



萩市の文化財

萩市の文化財

吉田初三郎筆
名勝萩と長門峡之図

萩市

は じ め に

平成17年3月6日に萩市・川上村・田万川町・むつみ村・須佐町・旭村・福栄村の1市・2町・4村が合併して誕生した新しい萩市には、国指定等の文化財が49件、県指定等の文化財が34件、市指定等の文化財が133件、合わせて216件の指定文化財があります。長い年月の中で、萩に暮らす人々とその暮らしを見守ってきた文化財は、それぞれの地域の歴史や文化、自然の特色を持っており、今もその地域で息づいています。

萩市では、質・量ともに豊かで優れたこれらの文化財を良好に保存するとともに、市民のみなさんと協働して文化財を積極的に活用したまちづくり「まちじゅう博物館」を提唱し、推進しておりますが、これも文化財に恵まれた萩市ならではの取り組みといえましょう。

この「萩市の文化財」により、文化財が一層身近なものとなり、文化財への理解を深めていただく一助になれば幸いです。

平成20年3月

萩市長 野 村 興 児

萩市の文化財 目次

文化財の種類別にし、その中でも指定年月日順、五十音順の順番で表記している。

国指定文化財

重要文化財

【建造物】

常念寺表門	①
旧厚狭毛利家萩屋敷長屋	②
東光寺	③
森田家住宅	⑦
菊屋家住宅	⑧
口羽家住宅	⑩
熊谷家住宅	⑫
大照院	⑭

【絵 画】

絹本著色春冬山水図	⑮
-----------	---

【彫 刻】

木造赤童子立像	⑳
木造聖観音立像	㉑
木造千手観音立像	㉒

【工芸品】

太刀 銘延吉 附 絲巻太刀拵	㉓
太刀 銘光房 弘安三年十月 日 附 革包太刀拵	㉔

【書 跡】

雪峯東山空和尚外集 石屏子介手沢本	㉕
-------------------	---

重要無形文化財

【工芸技術】

萩焼保持者 三輪節夫	㉖
第11代三輪休雪(壽雪)	

史 跡

松下村塾	㉗
吉田松陰幽囚ノ旧宅	㉘
萩反射炉	㉙
旧萩藩校明倫館	㉚
伊藤博文旧宅	㉛
木戸孝允旧宅	㉜
旧萩藩御船倉	㉝

萩城跡	㉞
-----	---

萩城城下町	㉟
-------	---

萩藩主毛利家墓所	㊱
----------	---

見島ジーコンボ古墳群	㊲
------------	---

萩往還	㊳
-----	---

名勝

長門峡	㊴
-----	---

名勝及び天然記念物

須佐湾	㊵
-----	---

天然記念物

明神池	㊶
-----	---

笠山コウライタチバナ自生地	㊷
---------------	---

見島ウシ産地	㊸
--------	---

見島のカメ生息地	㊹
----------	---

須佐高山の磁石石	㊺
----------	---

川上のユズおよびナンテン自生地	㊻
-----------------	---

指月山	㊼
-----	---

重要伝統的建造物群保存地区

萩市平安古地区	㊽
---------	---

萩市堀内地区	㊾
--------	---

萩市浜崎	㊿
------	---

登録有形文化財

萩駅舎	㊿
-----	---

明倫小学校本館	㊿
---------	---

むつみ村役場旧庁舎	㊿
-----------	---

むつみ村役場土蔵	㊿
----------	---

三見橋	㊿
-----	---

鹿背隧道	㊿
------	---

落合の石橋	㊿
-------	---

下横瀬公民館(旧明木村立図書館)	㊿
------------------	---

県指定文化財

有形文化財

【建造物】

萩学校教員室	61
長寿寺十三重塔	62
旧福原家萩屋敷門	63
旧梨羽家書院	64
花月楼	65
西堂寺六角堂	66

【絵画】

絹本着色釈迦三尊像	67
-----------	----

【彫刻】

木造釈迦如来坐像	68
木造毘沙門天立像	69
木造不動明王立像	70
木造文殊菩薩騎獅像	71
木造義翁和尚倚像	72

【書跡】

三祖師号	73
木額・柱聯・榜牌・同下書	74
石屏子介禅師墨蹟	75

【考古資料】

見島ジーコンボ古墳群出土品	76
円光寺古墳出土品	77

【歴史資料】

毛利氏日明貿易関係資料	78
-------------	----

無形文化財

【工芸技術】

萩焼保持者 野坂康起	79
萩焼保持者 波多野善蔵	80
萩焼保持者 岡田 裕	81

有形民俗文化財

宝泉寺船絵馬群	82
---------	----

無形民俗文化財

住吉神社「お船謡」	83
上三原の田植ばやし	84
友信神楽舞	85

史跡

萩焼古窯跡群	86
須佐唐津古窯跡群	87
穴観音古墳	88
大板山たたら製鉄遺跡	89
奥阿武宰判勘場跡	90

天然記念物

河内の大ムク	91
吉部八幡宮のスギ	92
三見吉広のバクチノキ	93
志都岐山神社のミドリヨシノ	94
田万川の柱状節理と水中自破砕溶岩	95
辻山のシダレザクラ	96

市指定文化財

有形文化財

【建造物】

旧周布家長屋門	97
平安橋	98
問田益田氏旧宅土塀	99
旧福原家書院	100
小川家長屋門	101
龍蔵寺觀音堂	102
花江茶亭	103
明倫館遺構 觀徳門	104
明倫館遺構 聖廟	105
明倫館遺構 南門	106
明倫館遺構 万歳橋	107
明倫館遺構 聖賢堂	108
端坊鐘楼	109
円政寺内金毘羅社社殿	110
附 石鳥居・山門・石灯籠	
松 八幡宮石燈籠	112
笠松神社石燈籠	113
笠松神社鳥居	113
亨徳寺三門	114
奥平家長屋門	115
大下阿弥陀堂内厨子	116
南明寺觀音堂	117
玉泉寺毘沙門堂内厨子	118
益田館	119
育英館門 附「育英館」扁額	120
佛光寺楼門	121
旧久保田家住宅	122
【絵 画】	
紙本墨画出山釈迦図	124
長州安武郡江津浦畧圖	125
絹本着色釈迦涅槃図	126
紙本墨画着色人物鶴龍図	127
紙本着色足利義昭像	128
絹本着色吉川元春像	128
紙本着色束帯天神像（崇竺筆）	129
絹本着色束帯天神像	129
紙本墨画十六羅漢像	130

西国三十三觀音靈場絵馬	131
（四番札所、五番札所）	
実相寺天井絵	132
発昌寺襖絵 附 高島北海書状一通	133
西国三十三觀音靈場絵馬（十番札所）	134
【彫 刻】	
木造薬師如来坐像	135
木造隨身倚像	136
木造二天立像	137
木造毘沙門天立像脇立吉祥天女像	138
木造毘沙門天立像脇立善日童子像	138
木造釋迦如来坐像	139
立木薬師如来像	140
木造阿弥陀如来立像	140
木造延命地藏菩薩立像	141
木造弘法大師立像	141
木造金剛力士像	142
木造釈迦如来立像	143
木造不動明王立像	143
木造如意輪觀世音菩薩坐像	144
木造扁額「實相山」	145
木造聖觀世音菩薩立像	146
木造阿弥陀如来立像	147
【工芸品】	
大蘊寺梵鐘	148
讃岐坊梵鐘	149
見島八幡宮鰐口	150
太刀 銘長州住人藤原□重・	151
寛永二十一甲申八月□日	
端坊梵鐘	152
不動明王立像	153
須佐唐津焼青磁釉銅器写花瓶	154
梅岳寺銅鐘	155
武氏八幡宮懸仏	156
武氏八幡宮神輿	157
片俣八幡宮懸仏	158
中嶋善磨作 竹籠	159
宇津觀音寺鰐口	160
【書 跡】	
紙本墨書年徳の書	161

古川久輝 書	162
山本又兵衛法号記	163
【古文書】	
大井八幡宮文書	164
【考古資料】	
元寇の碇石	165
塚穴古墳出土品	166
【歴史資料】	
益田家歴代領主肖像画群	167
附 紙本墨書益田就恒賛一幅	

無形文化財

【工芸技術】	
須佐唐津焼保持者 土谷一史	168

有形民俗文化財

松原祇園車	169
本町中祇園車	169
海上信仰資料黄帝社社殿	170

無形民俗文化財

木間「神代の舞」	171
玉江浦「天狗拍子」	172
越ヶ浜「巫女の舞」	173
越ヶ浜「大綱声」	174
笹尾義民おどり	175
遠谷神楽舞	175
中ノ原的まつり	176
大江後神楽舞	176
下領神楽舞（神笑座）	177
野田の柱松	178

史 跡

萩城下街割原標石	179
村田清風別宅跡	180
玉木文之進旧宅	181
円光寺穴観音古墳	182
八橋検校の碑	183
小倉四賢墓所	184
吉田松陰の墓ならびに墓所	185
菊ヶ浜土塁（女台場）	186
野山獄・岩倉獄跡	187

吉見正頼息女の墓	188
益田家墓所	189
須佐地古墳	190
塚穴古墳	191
旧湯川家屋敷	192
長添山古墳	194
桂太郎旧宅	195
伊藤博文旧宅地 附 伊藤博文別邸	196
吉田松陰誕生地	197
宇津観音寺観音堂	198

天然記念物

指月山のミカドアゲハ	199
大照院の大フジ	200
椿瀬のツバキ	201
野戸呂のシラカシ	201
須佐のシダレアカマツ	202
尊正寺のエドヒガン	202
武氏八幡宮社叢	203
三明のイトザクラ	204
妙権寺のイブキ	204
笠山虎ヶ崎タチバナ自生北限地	205
およびコウライタチバナ自生地	
笠山ハマボウ自生北限地	206
紫福の一本スギ	207
櫃島八幡宮のリュウキュウエノキ	207
笠山のホソイノデ・カサヤマイノデ・	208
カタホソイノデ混生地	
見島日崎のタダムシオイガイ・	209
ミシマヒメベッコウおよびその棲息地	
笠山虎ヶ崎ヤブツバキ群生林	210
佐々並のウラジロガシ	211

歴史的景観保存地区

藍場川および藍場川周辺地区	212
今魚店地区	213
大照院付近	214
東光寺および吉田松陰誕生地付近	215
堀内地区	216
南明寺境内および参道	217
藍玉座跡土堀	218

じょうねんじ おもてもん
常念寺表門

附 棟札 1 枚

- 指定年月日/昭和29年 9 月17日
- 所有者/宗教法人 常念寺
- 所在地/萩市大字下五間町
- 員数/ 1 棟



長栄山常念寺は、浄土宗の寺院で天文元年（1532）の創建と伝えられている。

表門はもと京都聚楽第の裏門であったと伝えられるもので、毛利輝元が豊臣秀吉から与えられ、伏見の毛利邸に移築していたものを、さらに輝元が萩城築城前に当寺を宿所にした縁によって、寛永10年（1633）常念寺の表門として移築寄進したものである。

門の形式は和様四脚門で両袖に潜り戸がついている。屋根は切妻造本瓦葺で、桁行3.66m、梁間は3.12mあり、規模的にはあまり大きくないが木割は雄大である。

特に木鼻や板葺股の削形の力強さ、外にまではみ出した桐・牡丹の葺股彫刻の豪放さに桃山時代の特色をうかがうことができる。

きゅう あ さ もう り け はぎ や しき なが や
旧厚狭毛利家萩屋敷長屋

附 棟札 1 枚

- 指定年月日/昭和41年 6 月11日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/ 1 棟



厚狭毛利家は、毛利元就^{もと なり}の8男元康^{もと やす}を始祖とする毛利氏一門で、厚狭郡厚狭（現 山陽小野田市）に知行地^{ち ぎょう}（8,370石余）をもっていたのでこのように呼ばれた。萩の屋敷は萩城大手門の南100mの要地に位置し、面積約15,500m²の広大なものであった。

棟札によるとこの長屋は10代元教^{もと のり}の時、安政3年（1856）に建てられたもので、桁^{けた}

行^{ゆき}51.5m、梁間^{はり ま}5.0mの長大な構造で、現在萩に残っている武家屋敷の中で最も大きい。

屋根は入母屋造、本瓦葺^{ほん かわらぶき}、南面は廂構^{ひさしがまえさんかわら}棧瓦^{ぶき}葺で、妻飾りは木連格子、南に向かって玄関および濡れ縁を設け、障子を立てて開放的に作られている。手法の特に目立つものはないが、建築年代がはっきりした貴重な建物である。

とう こう じ
東光寺

- 指定年月日/昭和41年 6 月11日
- 所有者/宗教法人 東光寺
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/ 4 棟



護国山東光寺は、元禄4年（1691）3代藩主毛利吉就が萩出身の名僧慧極を開山として創建した全国有数の黄檗宗の寺院である。

だい おう ほう でん
【大雄宝殿】

大雄宝殿は、元禄11年（1698）4代藩主毛利吉広によって建立されたものである。建物は、一重裳階付きの仏殿形式で桁行19.93m、梁間14.617m、正面一間通りは吹き放ちになっており、屋根は入母屋造本瓦葺で、棟の中央に宝珠と両端に鯨を置いている。堂内の土間は漆喰叩仕上げで、建物中央部に格子天井を張るなど特色ある唐様建築である。規模の壮大さと相まって、当地方の寺院建築中最高水準を示すものと高く評価される。



【鐘楼】

鐘楼の建築年代は、元禄7年（1694）に4代藩主毛利吉広によって梵鐘が寄進されているので、そのとき同時に建立されたと思われる。

建物の形式は、黄檗宗特有の一重裳階付入母屋造二層で裳階部分は棧瓦葺、屋根は入母屋造本瓦葺、桁行4.62m、梁間3.65mである。

上層には梵鐘がつってあり、鐘銘は開山慧極の撰で、萩藩の御細工人、鋳物師郡司喜兵衛信安・信之父子が鋳造したものである。



【三 門】

三門は、東光寺が創建されて121年後の文化9年（1812）10代藩主毛利斉熙が寄進したものである。規模は桁行^{けた ゆき}11.4m、梁間^{はり ま}6.5mの2階二重門で左右に上層部へ上るための山廊がある。屋根は入母屋造本瓦葺、中央に露盤付き宝珠^{ほうしゅ}を置き、2階には毘盧遮那仏・十八羅漢などが安置されている。全体の構造の形式は禅宗様である。規模も大きく地方寺院の三門として見ごたえがある。



【そうもん 総門】

総門の創建は、元禄6年（1693）の慧極筆「護国山」の扁額が掲げてあるので、そのころ完工されたものと思われる。

建物は、さんけん に こ はっきやくもん けた ゆき 三間二戸の八脚門、桁行8.7m、はり ま きり づまづり 梁間3.12m、一重切妻造、中央高屋根左右低屋根段違い本瓦葺である棟の両端にはま から 摩伽羅を飾り、黄檗宗特有の形式を示す遺構である。

もり た け じゅう たく
森田家住宅

附 貫木門 1 棟 塀重門 1 棟
塀重門左右板塀 2 棟 文書 1 通

- 指定年月日/昭和49年 2 月 5 日 ● 所有者/個 人
- 所在地/萩市大字黒川 ● 員数/ 1 棟



森田家の先祖は、17世紀の中頃、旧黒川村（現 萩市黒川）を開拓した石見吉見家浪人の森田対馬である。森田家は、その功績によって苗字帯刀を許され、旧黒川村の庄屋を代々勤めた。この住宅は18世紀中頃に建てられたもので、萩藩主の鷹狩の際には休息所にあてられたという。

主屋は天保14年（1843）以前に表側の座敷廻りを改造し、北背面に二階屋、西側面に湯殿、便所を増築している。この改造については、天保14年（1843）の家作改めで取り壊しを命じられたが、その際に提出した嘆願書によると、森田家の先祖以来の功績が認められて現状のまま差し置かれた経緯がある。

間取りは、東側に土間をとり、上手床上部

を棟通りで前後に仕切って3間ずつとしている。前側は土間寄りの間の前面に式台を設け、上手の座敷2間には矩折に畳敷の入側を、その外側には広屁を設けて落縁を廻し、座敷、入側とも面皮の長押を打っている。奥座敷には、床、違棚を矩折に、また次の間にも床を設けており、後側西端の室にも床を設け長押を打っているが、他の3間はいずれも差物で固めている。

この住宅は後世の改変はあるが、保存がきわめて良く、江戸時代の上層農家の例として貴重である。また、貫木門（表門）、塀重門及び板塀は、主屋の座敷廻りの改造と同時に建てられたもので、屋敷構えを示す上で重要である。

きく や け じゅう たく 菊屋家住宅

- 指定年月日/昭和49年 5 月21日
- 所有者/財団法人 菊屋家住宅保存会
- 所在地/萩市大字呉服町一丁目
- 員数/ 5 棟

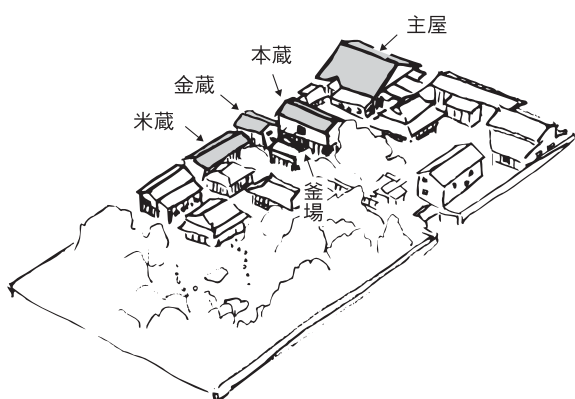


菊屋家の祖先は、毛利氏に従い広島から山口に移って町人となり、さらに萩城の築かれた慶長年間に萩に移ったといわれ、後には藩の御用達を勤めるほか、その屋敷は幕府巡見使の宿として本陣にもあてられてきた豪商であった。

【主 屋】

主屋の建築年代は明らかではないが、家に伝わる勤功書や建築手法からみて承応元年（1652）から明暦3年（1657）までの間に建てられたものと考えられる。

桁行^{けた ゆき}13.0m、梁間^{はり ま}14.9m、切妻造^{きり づま}棧瓦葺^{せんかわら ぶき}で居室部は前寄り一間半を「みせ」とし、その奥は土間寄りに役向きの部屋が3部屋設けられている。その上手は東に面して座敷2部屋があり、南寄りに家族の生活の場が間取りされている。全国的にみても現存する大型の町家としてその価値は極めて高い。



【本 蔵】

本蔵は主屋の後方にあり、土蔵づくり桁行^{けた ゆき}11.7m、^{はり ま}梁間4.8m、二階建、切妻造^{きり づま づくり}棧瓦葺^{さん か ね ぶ き}土蔵で、建築年代は明治ごろと思われる。

【金 蔵】

金蔵は本蔵の後方で、屋敷西側の道路に側面して建っている。桁行6.1m、梁間4.2m、2階建て、切妻造棧瓦葺土蔵で、建築年代は江戸中期から後期のものと思われる。内部には板石囲いの地下室が設けられている。

【米 蔵】

米蔵はさらに後方の道路に沿って建っている。桁行11.8m、梁間4.0m、切妻造棧瓦葺土蔵で、内部は石敷きの床であるが、以前は床板の建物であった。建築年代は19世紀ごろと思われる。

【釜 場】

釜場は、金蔵の東側にある桁行6.0m、梁間4.0m、切妻造棧瓦葺の小規模な建物で、北面は吹き放し、ほか三方は土大壁である。19世紀初めごろの建築と思われる。

これらの家屋は、主屋が極めて古く、蔵その他の付属屋も屋敷構えの一環として重要であり、主屋と数棟の蔵が建ち並ぶ西側の景観は「国指定史跡萩城城下町」の地域内にあって重要な構成要素の一つをなしている。

くちばけじゅうたく 口羽家住宅

- 指定年月日/昭和49年5月21日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/2棟



口羽家は、萩藩の寄組士（禄高 1,018 石余）で代々萩城三の丸に住んだ。大身の武士の居住地区であった堀内地区において、現在も旧藩時代そのままの旧位置に残っている。

【主屋】

主屋は現在南向きであるが、もとは表門と同じく東向きであったものを、弘化3年（1846）に移動したと伝えられる。切妻造

瓦葺の東西両面に入母屋造の突出部を付けた形式からなるが、西方の約3分の1は弘化3年の移動期に拡張したもので、西面はもとは寄棟造であったと思われる。

間取りの平面構成は棟通りで前後に仕切った六間取り型で、南面に広庇と縁を設け、北面と西面に廊下がついている。

建築年代はさだかではないが、建築手法等から18世紀末から19世紀初ごろと思われる。



【表 門】

表門は、萩に現存するものとしては最も雄大な規模を有する長屋門で、桁行^{けた ゆき}22.2m、梁間^{はり ま}4.9m、入母屋造本瓦葺である。片潜門^{いり も や づくり ほん かわらぶき}の南側には門番所・中間部屋・厩^{うまや}を置き、向かって左には表向きに出格子があり、内側にも窓があって門の内を見通すことができるようになっている。表側は白壁、腰下はなまこ壁となっている。

門の建築年代は口羽家の系譜によると延宝3年（1675）に江戸藩邸の門を拝領して萩に移築したものと伝えられるが、手法からみて18世紀後半のものと思われる。

この住宅は、萩城下に残る上級武士の屋敷としても古く、主屋と表門がセットで残り、かつ全国的にも比較的数の少ない武家屋敷の一遺例^{い い}として価値がある。

くま や け じゅう たく 熊谷家住宅

- 指定年月日/昭和49年 5 月21日
- 所有者/財団法人 熊谷美術館
- 所在地/萩市大字今魚店町
- 員数/ 4 棟

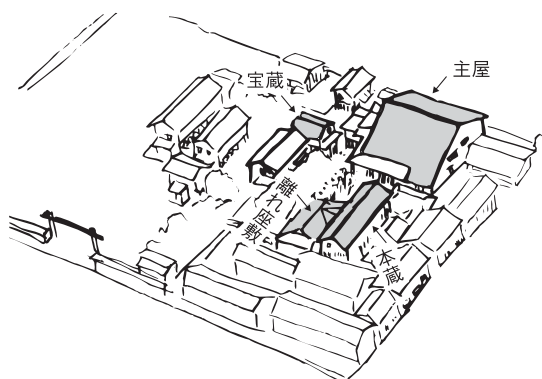


熊谷家は、藩政初期ごろ熊谷村（現 萩市川上）から萩城下に移ってきた商人で、宝暦4年（1754）分家の初代熊谷五右衛門芳充が萩藩の御用達として召し出されて以来、代々問屋と金融・仲買・製塩を業として栄えてきた豪商であった。

現在の住宅は、明和5年（1768）に新築したもので、広大な屋敷に主屋のほか離れ座敷、土蔵など10数棟が建ち並んでいる。

おも や 【主 屋】

主屋は桁行^{けた ゆき}14.7m、梁間^{はり ま}15.8mの大型町家である。屋根は切妻造^{きりづま}棧瓦^{づくりさん}葺^{かわらぶき}で道路に南面しており、東側には後に設けたと思われる茶屋・式台等が突出している。平面は桁行を3等分して西側を通り土間とし、床上部は梁間を4等分して二間半に二間の部屋が8室整然と並ぶ部屋割になる。特に土間廻りは、丁寧に仕上げた太い梁を縦横に架け渡した豪壮な構成をみせている。



【離れ座敷】

離れ座敷は、北の庭を隔てて主屋の後方にある。数寄屋風の桁行11.4m、梁間7.1mの建物で、主屋より少し遅れて建てられたものと思われる。屋根は南北に棟が通る入母屋造^{いりもやづくり}棧瓦葺^{さんかわらぶき}である。棟を西に向けてT字形に造り、西側は切妻造りにしている。以前はさらに棟が西に延びていたと思われる。

【本 蔵】

本蔵は桁行15.1m、梁間5.0m、二階建、きりづまづくり^{きりづまづくり}ほんかわらぶき^{ほんかわらぶき}の土蔵で、離れ座敷の西側に並

んで建っている。建築年代は主屋より古く、18世紀前半までさかのぼると思われる。

【宝 蔵】

宝蔵（金蔵）は主屋の東側にあり、桁行5.9m、梁間3.9m、二階建て、切妻造本瓦葺の小規模な土蔵で、石造の地下室を備えている。建築年代は19世紀を下るものであろう。

これらの4つの建物の中でも主屋は大規模で極めて質が良く、意匠も洗練されており、江戸時代後期における地方豪商の富を示す好個の遺例である。

また、離れ座敷や蔵も、屋根構えを知るうえで重要な要素の一つといえる。

だい しょう いん
大照院

- 指定年月日/平成14年 5 月23日
- 所有者/宗教法人 大照院
- 所在地/萩市大字椿
- 員数/ 5 棟



霊椿山大照院は、初代藩主毛利秀就^{ひでなり}の菩提を弔うために明暦2年（1656）に2代藩主綱広^{つなひろ}によって建てられた臨済宗の寺院である。延享4年（1747）火災のため全山の堂宇^{どうう}が焼失したが、6代藩主宗広^{むねひろ}によって直ちに再建が図られ、寛延3年（1750）に復興したのが現在の伽藍^{がらん}である。

【本 堂】

本堂は方丈風の仏堂で規模が大きく、桁行^{けたゆき}25.2 m、梁間^{はりま}18.0mの一重入母屋造、屋根^{いりもやづくり}は綴屋根^{しころやね}、棧瓦葺^{さんかわらぎ}である。

主室は前後に2列に並列した6室からなり、正面と左右の3面に広縁を、そして4面に狭屋間^{さやま}として落縁^{おちえん}を取り込むなど方丈形式の典型的な近世禅宗本堂建築である。建築年代の確実な遺構で、規模が大きく意匠の整った建物として貴重である。



【庫 裏】

建物は桁行^{けた ゆき}18.3 m、梁間^{はり ま}18.3 mの広大なものである。屋根は切妻造本瓦葺妻入^{きり づまづくりほんかわらぶきつま いり}で南西面に庇^{ひさし}がついている。

江戸時代初期から中期に移るころの建築で、絵様彫刻によく時代の様相が現れている。庫裏としては県内随一の規模をもち、藩主^ぼの菩提寺^{だいいじ}にふさわしい風格を備えている。



【書院】

書院は、本堂と庫裏をつなぐ西後方に位置し、南側に3室、北側に3室を並べた主棟と、西突出部の座敷および茶室など4室2列を並べた北突出部からなっている。

主棟は桁行^{けた ゆき}11.8m、梁間^{はり ま}9.8mで、屋根は主棟東側と北突出部北側^{いり も やづくり}が入母屋造、主棟と西落棟の西側は寄棟造、棧瓦葺^{よせ むね づくり}である。西側

突出部は桁行7.9m、梁間5.9m、北突出部は桁行13.5m、梁間7.0mである。

主棟東側の入一間は畳廊下で、北は庫裏の広縁、南は本堂への渡廊下が接続し、主棟南側と西突出部にかけて3室が並んでいる。

建築年代は、18世紀後半と思われるが、簡素ななかに品格のある造作がみられる傑作である。



【鐘楼門】

この鐘楼門は、山門と鐘楼を兼ねたもので、桁行^{けた ゆき}7.05m、梁間^{はり ま}4.09mの三間一戸の二重門である。屋根は入母屋造瓦葺^{いりも やづくりかわらぶき}で、初層の屋根中央に唐破風をつけている。左右両脇には二階に上る階段がついている。内部の床面は四半敷瓦の方式で礎石・礎盤は石製である。

柱は総円柱で上下に粽^{ちまき}をつけ、柱頭の頭貫^{かしらぬき}および台輪は操形つきである。

二階は正面と後ろ側の中央に唐戸を有し、両脇^{かとうまど}には火燈窓、横左右には連子窓^{れんじまど}を開いている。内部には寛延2年（1749）の銘のある萩藩名工、鋳物師郡司四郎左衛門信房鋳造の名鐘が吊ってある。



【經 藏】

この經藏は、総塗込の土蔵造で桁行6.4m、
 梁間6.4m、屋根は宝形造棧瓦葺である。正
 面入口の上は切妻破風で、向かって左側には
 火燈窓、右側と後方にはおのおの桁行4m、
 梁間3.2mの脇室が外側に張り出して造られ
 ている。屋根はいずれも寄棟造棧瓦葺で、両
 脇に1か所ずつの格子窓が開いている。

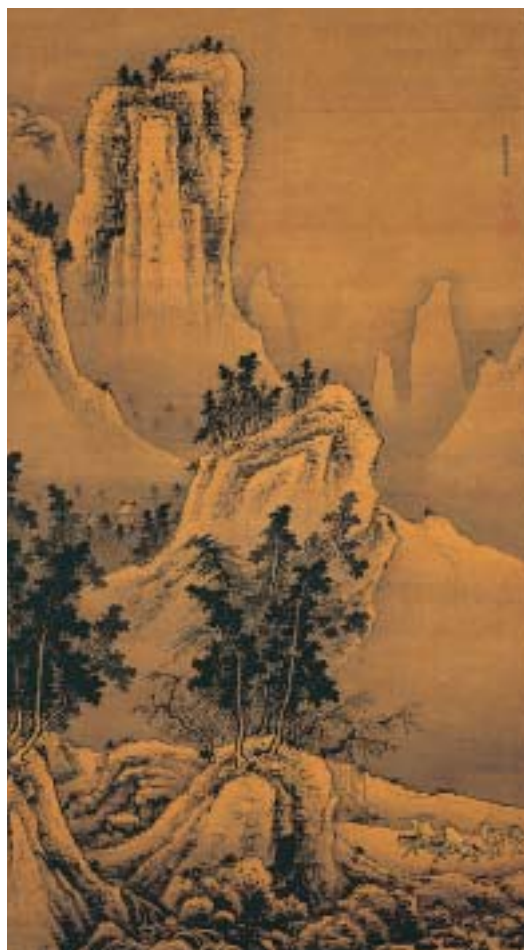
内部は四半敷瓦の方式を用い、中央に八角
 の輪藏を備えている。以前は大般若經全部と
 大藏經が収納してあったが、現在は本堂に移
 されている。

創建当時の經藏は、延享4年(1747)2月
 の火災で焼失したが、7代藩主重就(しげたか)は住職春
 林西堂などと力を尽くして宝暦5年(1755)
 に現在の經藏を再建した。

けん ぽん ちゃく しょく しゅん とう さん すい ず
絹本著色春冬山水図

たい ぶん しん ひつ
戴文進筆

- 指定年月日/昭和31年 6 月28日
- 所有者/財団法人 菊屋家住宅保存会
- 所在地/萩市大字呉服町一丁目
- 員数/ 2 幅



◀ 冬景図



▶ 春景図

戴文進は、中国の明時代^{みん}の画家である。明の画院に登用されようとしたが、ざん言のため妨げられて故郷の浙江省^{せつ こう しやう}に帰り、盛んに作家活動を行った。いわゆる浙派^{せつ ぱ}の始祖となった。南宋画院の画風をいっそう烈しく強くしたような筆致で、山水・神像・走獸花果などを描き、ことに山水を描いては明時代第一との定評がある。

本図は春景図・冬景図の二幅で、共に縦

144.5cm、横79.0cmである。わが国にある戴文進筆の山水図のなかでも最佳品と評価されている傑作である。春景図は水辺の小閣に憩い、桃花を賞する人物等を画面の下方に小映し、巨松、遠山などを上部に配している。冬景図は騎馬と従者とを右下に小さく描き、雪におおわれた土坡^{ど は}や岩石を画面いっぱいに置いている。四季山水図中の春冬二幅と思われる。

もく ぞう あか どう じ りゅう ぞう
木造赤童子立像

- 指定年月日/明治35年 7 月31日
- 所有者/宗教法人 大照院
- 所在地/萩市大字椿
- 員数/ 1 躯



赤童子とは天孫降臨のときの使者として知られている天児^{あめのこ}屋根^や命^{ねのみこと}で春日社の祭神の一つといわれている。赤童子については他にほとんど類例がなく、奈良県大和郡山市の植槻神社に赤童子の絵画（室町時代）があるくらいである。

本像は像高61.2cm、ヒノキ材の寄木造^{よせ きづくり}で、玉眼に水晶が入った彩色像である。鎌倉時代末の作と考えられている。この像の特筆すべきことは、中国の宋朝様式が混入していることで、上衣の肩の曲線文の飾り、両襟の渦巻形円文などは宋朝様式の影響を示すものである。また、頭上の鋼製の宝冠は長い年月の間に失われて現存するものが少なく、製作当初のものが残っているのは珍重すべきことである。

躰は唐服をまとい、上腹部に帯をしている。左右に束ねた髪や袖口の反り、裳^もの上腹部あたりの厚ぼったい感じは鎌倉末期ごろの作といえる。

もく ぞう しょう かん のん りゅう ぞう 木造聖観音立像

- 指定年月日/明治35年 7 月31日
- 所有者/宗教法人 南明寺
- 所在地/萩市大字椿
- 員数/ 1 躯

本像は、南明寺山中腹にある天台宗日輪山南明寺の本尊である。

像高153cm、ヒノキ材一木彫、胡粉彩色、彫眼の像であるが、肘・手首・天衣は別木でつないでいる。肩の張りの肉付きはよく、平安初期の手法を存しているが細長の肉身や衣文の彫りの浅さなどから平安後期の造りと思われる。台座裏に寛永20年（1643）10月、毛利秀就の寄進で京都の仏師が修理したと記された墨書銘があるので、おそらく光背や台座はその時の作と思われる。



彫
刻

もく ぞう せん じゅ かん のん りゅう ぞう
木造千手観音立像

- 指定年月日/明治35年 7 月31日
- 所有者/宗教法人 南明寺
- 所在地/萩市大字椿
- 員数/ 1 軀



本像は像高109.5cm、ヒノキ材の一木造^{いちぼくづくり}で、元来は彩色像であったと思われるが、現在は彩色が剥落している。肘・手首・足首・天衣・台座および宝珠のついた輪光はいずれも後補である。奈良の唐招提寺の千手観音（国宝）は実際に千の手をもつが、普通は中央の2手のほかに40本の手をつくっている。この像は頭上に11面の化仏をいただき、中央2手のうち左右第一手は合掌、第二手は前でかさねて宝鉢をとる形であるが、宝鉢は失われている。同じ南明寺にある聖観音立像（国指定重要文化財）と同一仏師の作で、平安時代後期のものと考えられている。

たち
太刀

めい のぶ よし
銘延吉

つけたり いとまき た ち こしらえ
附 絲巻太刀拵

- 指定年月日/大正8年4月12日
- 所有者/宗教法人 志都岐山神社
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数/1口



作者の延吉は、鎌倉末期の文保ごろ（1317～18）活躍した大和国吉野郡龍門一派の刀工で、龍門延吉とよばれていた。また、目貫の孔を瓜実（うりざね）に打ったことから大和瓜実と称された。

太刀は長さ63.4cm、反りは浅く1.5cm、造込み（しのぎづくり）（本造）で、刃文は大和の刀工に多くみられる作風の直刃である。棟（すこ）

は庵棟、切先は小鋒で、帽子（鋒の刃文）は浅くたれて小丸に返っている。このほか目釘孔は4つあけ、延吉の銘が入っている。

拵は金梨地に五七桐と長州沢瀉、菊紋蒔絵の絲巻太刀拵で美しいものである。

たち
太刀

めい みつ ふさ
銘光房

こうあんさんねんじゅうがつ
弘安三年十月

にち づけたり
日 附

かわつつみた ちこしらえ
革包太刀拵

- 指定年月日/大正15年4月19日
- 所有者/宗教法人 志都岐山神社
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数/1口



作者の光房は、相州鍛冶鎌倉の行光の弟子と伝えられ、行光は正光の父ともいわれている。光房の遺作は少なく、しかもこの作は優秀である。

太刀は長さ76.4cm、反り3.4cm、造込みは鑄造（本造）棟（峯）は庵棟で、先を入山形にし、目釘孔を1個あけ、佩表に「光房弘安三年十月日」の銘を入れている。拵も珍し

い制式をなし、柄・鞘ともに革包みで、中身と同様に鎌倉時代の作と思われる。

この太刀は代々毛利氏の重臣桂家に伝わり、「稲光」と称して秘蔵されていたが、毛利隆元（もと）の時代に桂元澄が宮崎八幡宮に奉納し、さらに寛文年間（1661～72）に桂就澄が箱を造って奉納したものである。

雪峯東山空和尚外集

石屏子介手沢本

- 指定年月日/昭和49年6月8日
- 所有者/宗教法人 龍蔵寺
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数/1冊

本書は、南宋初期禅林の黄龍派4世雪峯慧空の語録に入らない偈頌・法語真讃・書簡を編集したものである。著者は明らかではないが、書風・料紙から元時代（1271～1368）の書写と考えられる。入元僧石屏子介の印が押されているところから、石屏が入元中に取得した手沢本と解される。縦28.6cm、横16.8cm、紙数墨付44枚に袋綴装仮綴本である。

石屏子介和尚は大内氏に招かれて山口の香積寺の開山となり、後に龍蔵寺再興の開山となった人物である。

この外集はわが国においては貞和3年（1347）に刊本が行われているが、本書はその伝来を明らかにする元時代書写の将来本として非常に珍しい禅籍である。



はぎ やき ほ じ しゃ
萩焼保持者

み わ さだ お
三輪節夫 (だい だい み わ きゅうせつ じゅせつ
第11代三輪休雪、壽雪)

- 認定年月日/昭和58年4月13日
- 住所/萩市大字椿東



萩焼は、文禄・慶長の役のとき、毛利輝元^{てる もと}が朝鮮から連れて帰った李勺光^{り しゃっこう}、李敬^{り けい}がその始まりといわれている。山口県を代表する焼物で、主として茶器の製作で知られており、わが国の陶芸史上きわめて重要な位置を占めている。

三輪節夫は明治43年（1910）三輪窯9代雪堂の3男として生まれ、家法の萩焼の伝統技法を学び窯業に専念した。昭和42年（1967）には萩藩の御用窯としての歴史を持つ萩焼三輪窯を継いで11代休雪を襲名し、昭和47年（1972）には山口県指定の無形文化財萩焼保持者に認定されている。その作風は萩焼の伝統的な材質技法と、三輪窯の家法の上に個性的造形感覚を加え、現代に生きる萩焼の新境地を開いた。

平成15年（2003）に壽雪^{じゅ せつ}を号し、現在も現役の陶芸家として活躍している。

しょう か そん じゅく
松下村塾

- 指定年月日/大正11年10月12日
- 所有者/宗教法人 松陰神社
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/155.37m²



松下村塾は、木造平屋建切妻造瓦葺^{きり づま づくりからがき}50.90 m²の小舎で、当初からあった8畳の1室と、後に増築した10畳半の部分とからなっている。

初め吉田松陰の叔父玉木文之進が自宅で私塾を開き、松下村塾と名付けていた。ついで久保五郎左衛門がその名を継承し、子弟の教育にあたった。

安政4年(1857)11月5日、28歳の松陰

がこれを継ぎ、主宰することになった。

安政5年(1858)7月、松陰は藩から家学教育の許可を得て名実ともに村塾の主宰者となったが同年11月29日、松陰は再び一室に幽囚され、続いて再入獄の身となった。松下村塾は、松陰の野山獄出獄から再入獄までの3年間のうち最後の1年間門弟に接して指導激励した場所である。

よし だ しょう いん ゆう しゅう の きゅう たく
吉田松陰幽囚ノ旧宅

- 指定年月日/大正11年10月12日 ● 所有者/宗教法人 松陰神社
- 所在地/萩市大字椿東 ● 指定面積/442.97m²



この建物は、木造平屋建入母屋造瓦葺^{いり も や づくりかわらぶき}214m²の住宅で8畳3室、6畳3室、4畳、3畳7分、3畳半・3畳および2畳各1室ほか、板の間・物置・土間を有するかなり大きい建物である。幽囚の室は、東側にある3畳半の1室であるが、もともと4畳半の室であったものに神棚が作られたため狭くなったものと思われる。この家は現在、松陰神社が所有して保存している。

吉田松陰は、伊豆国下田でアメリカ軍艦による海外渡航に失敗して江戸伝馬町の牢に捕えられ、ついで萩に送られて野山獄に入れられたが、安政2年（1855）に釈放されて父杉百合之助預けとなり幽囚室に謹慎して読書と著述に専念した。そして近親者や近隣の子弟たちに孟子や武教全書を講じた。

はぎ はん しゃ ろ
萩反射炉

- 指定年月日/大正13年12月9日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/3,026m²



反射炉は、萩デルタ外の東北部、椿東前小畑上ノ原の丘陵上にある。

煙突部分の中央から上部5mは2本にわかれ、基底部分は長方形で、頂上に向かって9mまでは玄武岩と赤土とを用いているが、先端の2.5mは大きな煉瓦を使用している。全体の高さは11.5mで、漆喰が石積みの全体に

塗ってあったものと考えられる。丘陵の東側は2段に石垣を築き、全体が補強されている。

近世の反射炉でわが国に現存しているのは、静岡県の韮山に築造されたもの与此の2基だけである。わが国の産業史上、貴重な遺跡であるとともに、これによって萩藩の幕末における軍備充実の熱意がうかがわれる。

きゅう はぎ はん こう めい りん かん

旧萩藩校明倫館

- 指定年月日/昭和4年12月17日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字江向
- 指定面積/10,795.01m²



明倫館は、萩藩5代藩主毛利吉元よしとちが享保3年（1718）に、萩城三の丸追廻し筋おいまわに創建した。敷地は940坪であった。

それから130年後の嘉永2年（1849）に、江向の地に敷地15,184坪、建物総坪数11,328坪、練兵場3,020坪の広大な規模の新明倫館が完成して移ったものである。

【水練池】

水練池は、周囲を玄武岩の切石で築いた、東西39.5m、南北15.5m、深さ1.5mの池である。現在、東側と南側に池に降りる石段が設けられているが、古図では東側の中央から騎馬で池に駆け降りやすいように斜面になっている。南側の石段も図面にはなく、池の北と南は山形の土手になっている。これに反して西側には石段があり、後世変更されたものであろう。藩政時代、ここで遊泳術ゆうえいじゅつ並びに水中騎馬が行われた。藩校の水練池でわが国に現存する唯一のものである。



【有備館】

有備館は、旧明倫館の剣術場と槍術場を移して拡張したものである。木造平屋建入母屋造^{いりもや}棧瓦葺^{けりかわぶき}で、桁行^{けたゆき}37.8m、梁間^{はりま}10.8mの南北に長い建物である。内部の北半分は板の間39畳を剣術場、南半分は土間54畳を槍術場とし、各その西側を藩主^{じょうらん}の上覧場とし、中間に藩主臨場などの場合に使う控室がある。ここは藩士の練武のほか、他国からの剣槍術の修行者との試合場、すなわち「他国修行者引請^{ひきうけ}剣槍術場」でもあった。

【明倫館碑】

明倫館碑は2基あり、向かって左側は明倫館創建21年目の元文6年（1741）6代藩主毛利宗広^{むねひろ}が創立の由来を伝えるために建てたものである。玄武岩の石碑には2代学頭山県周南^{しゅうなん}撰文、3代学頭津田東陽^{つだとうよう}書による「明倫館記」が刻まれている。右側は嘉永2年（1849）13代藩主毛利敬親^{たかちか}が新明倫館の開校を記念して10代学頭山県太華^{やまがたたいか}に「重建明倫館記」を撰^{えら}ばせて建てた。



いとう ひろ ぶみ きゅう たく
伊藤博文旧宅

- 指定年月日/昭和 7 年 3 月 25 日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/393.39m²



伊藤博文旧宅は、木造平屋建寄棟造茅葺^{よせ むねづくりかや ぶき}で、総建て坪29坪、付属建物として便所・風呂場がある。居宅各室の大きさは6畳1室、5畳半1室、4畳半1室、3畳3室、2畳1室、玄関土間である。

この建物は、もと萩藩^{けい ほう}の軽卒^{けい そつ}（中間^{ちゅうげん}）水井武兵衛（伊藤直右衛門）の居宅であったが、安政元年（1854）に博文の父十蔵が一家をあげて伊藤家に入家した。その後、博文は

17歳のとき吉田松陰の門に入って教育を受けた。志士としての活躍や英国への留学など、この家に安住するいとまはなかったが、明治元年（1868）に兵庫県知事に赴任するまでここが本拠であった。

その後、明治憲法制定の任にあたってその功を遂げ、初代内閣総理大臣に就任するなど政府の要職を歴任した。

き ど たか よし きゅう たく
木戸孝允旧宅

- 指定年月日/昭和7年3月25日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字呉服町二丁目
- 指定面積/829.75m²



木戸孝允は、藩医和田昌景（^{しょう けい}禄高20石）の長男として天保4年（1833）6月26日にこの家に生まれた。

7歳のとき、近隣の桂九郎兵衛^{たか ひさ}孝古の養子となったが、実家のこの家で成長した。初め桂小五郎といい、33歳のとき藩命によって木戸貫治に改め、ついで準一郎と称した。実名は孝允で号は松菊など6つ持っていた。17歳のとき兵学門下生として明倫館で吉田松陰に学び、20歳のとき江戸に出て剣術を

学んだ。30歳のときから藩政の要職について藩内の正義派の指導をはじめ薩・長の連合に尽くした。

旧宅は、木造平屋建一部二階建で主棟と土間棟からなり、主棟の座敷棟は寄棟造^{よせ むね づくりさんかわらぶき}棧瓦葺、小間棟は入母屋造^{いり も や づくりさんかわらぶき}棧瓦葺、土間棟は入母屋造棧瓦葺である。城下町のほぼ中心にある武家屋敷地にあり、孝允が誕生した部屋や庭園などよく旧態を保っている。

きゅう はぎ はん お ふな ぐら

旧萩藩御船倉

- 指定年月日/昭和11年12月16日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字東浜崎町ほか
- 指定面積/423.45m²



御船倉は、藩主の御座船^{ござふね}を格納した場所である。慶長13年（1608）に萩城築城後、まもなく建てられたと思われる。構造は両側と奥に玄武岩^{げんぶがん}で壁を築き、上部に瓦屋根^{かわ}を葺き、前面は木製扉^{けた}を有している。大きさは桁行^{けた}26.9m、梁間^{はりま}8.8m、高さ8.8m、石壁の厚さは6mである。大船倉が一棟残っているが、享保年間（1716～35）作成の萩城下町絵図

には3棟、天保年間（1830～43）作の「八江萩名所図画^{やへはぎめいしよずえ}」には4棟の船倉が描かれている。明治初年に北側の1棟、昭和37年に南側の1棟が取り壊された。

現在は、明治以後の埋め立てのため河岸から離れた所になったが、往時は松本川に面して船が自由に出入りできる場所であった。

はぎ じょう あと

萩城跡

- 指定年月日/昭和26年 6 月 9 日
- 管理団体/萩 市
- 所在地/萩市大字堀内ほか
- 指定面積/368,872.18m²



萩城跡は、萩市街の西北隅にある指月山のふもとに位置する。萩城は、関ヶ原の戦いに敗れ、中国 8 か国から防長 2 か国に減封された毛利輝元^{てるもと}が築城した平山城で、別名を指月城とも呼ばれた。慶長 9 年（1604）に着手し、4 年後の慶長 13 年（1608）に完成した萩城には、本丸・二の丸・三の丸及び指月山の山頂に要害があり、文久 3 年（1863）4 月に

毛利家 13 代敬親^{たか ちか}が幕末の多端な国事の処理に不便として藩府を山口に移すまで萩藩主の居城であった。明治 7 年（1874）に萩城はすべて解体されたが、石垣及び堀の一部については良く保存されており、平成 17 年 11 月には萩開府 400 年を記念して外堀の北の総門が復元されている。

はぎ じょう じょう か まち
萩城城下町

- 指定年月日/昭和42年 1 月10日
- 所有者/萩 市ほか
- 所在地/萩市大字呉服町一丁目ほか
- 指定面積/55,087.41m²



▲ 江戸屋横町

萩城城下町は、旧萩城の外堀から外側にあたり、町筋は碁盤目状に画され、中・下級の武家屋敷や町家が軒を連ねていた。現在でも町筋はそのまま残っていて、よく城下町の面影をとどめている。

特に萩城三の丸に通じる中の総門東側の一帯は、町筋とともに家並みの配置の状況がそのまま保存されている。

表通りの呉服町筋は御成道で、この通りに面しては萩藩御用達^{ごようたし}の菊屋家、幕末の商家久保田家などの家々が残っている。表通りから南に向かって西から菊屋横町・伊勢屋横町・江戸屋横町と呼ばれている小路がある。これらの路に沿って高杉晋作旧宅跡、木戸孝允旧宅やなまこ壁の土蔵、門、土堀が連なっていて城下町の景観をしのぶことができる。

はぎ はん しゅ もう り け ぼ しょ 萩藩主毛利家墓所

- 指定年月日/昭和56年 5 月11日
- 所有者/個 人
- 所在地/萩市大字堀内・天樹院、萩市大字椿・大照院、萩市大字椿東・東光寺
- 指定面積/3.4ha



てん じゅ いん ぼ しょ 【天樹院墓所】

天樹院墓所は、毛利輝元^{てるもと}の墓所で、輝元と夫人および殉死者長井治郎左衛門の墓石があり、総面積2,975m²である。これらの墓は、花崗岩製の五輪塔形である。輝元^{か こう げん}のものは、高さ2.1m、夫人のものは1.8mといずれも大形である。また墓の周囲には玄武岩製の玉垣、

鳥居、石燈籠、長さ64mの参道の敷石、及び唐門などがあり、環境も良好である。

ここは、以前輝元の隠居所、四本松邸のあった所で、輝元の死後に天樹院（輝元の法号）が菩提寺としてたてられたが、明治 2 年（1869）廃寺になり墓所のみが残っている。



【大照院墓所】

大照院墓所は、萩藩初代藩主毛利秀就以下2代から12代までの偶数代の7藩主と夫人および一族と秀就に殉死した7藩士の墓52基などがあり、総面積5,717.39m²である。墓の周囲には、玉垣22か所、鳥居7基、石燈籠600数基、石橋1架、参道の石畳などの

石造物と墓所入口の小門1棟がある。

これらの墓は、明治以後に移されたものや一部の新墓を除いて、いずれも花崗岩製の五輪塔形である。なかでも藩主夫妻の墓は高さ4.5mの大形である。鳥居や多数の石燈籠は、家臣をはじめゆかりの深い人びとが寄進したものである。



【東光寺墓所】

東光寺墓所は、3代藩主毛利吉就^{よしなり}から11代までの奇数代の5藩主と夫人および一族、関係者の墓40基などがあり、総面積5,179.55 m²である。墓の周囲には玉垣16か所、神道碑6基、鳥居5基、石燈籠500数基、参道の石畳などの石造物が墓所入口の小門内にある。

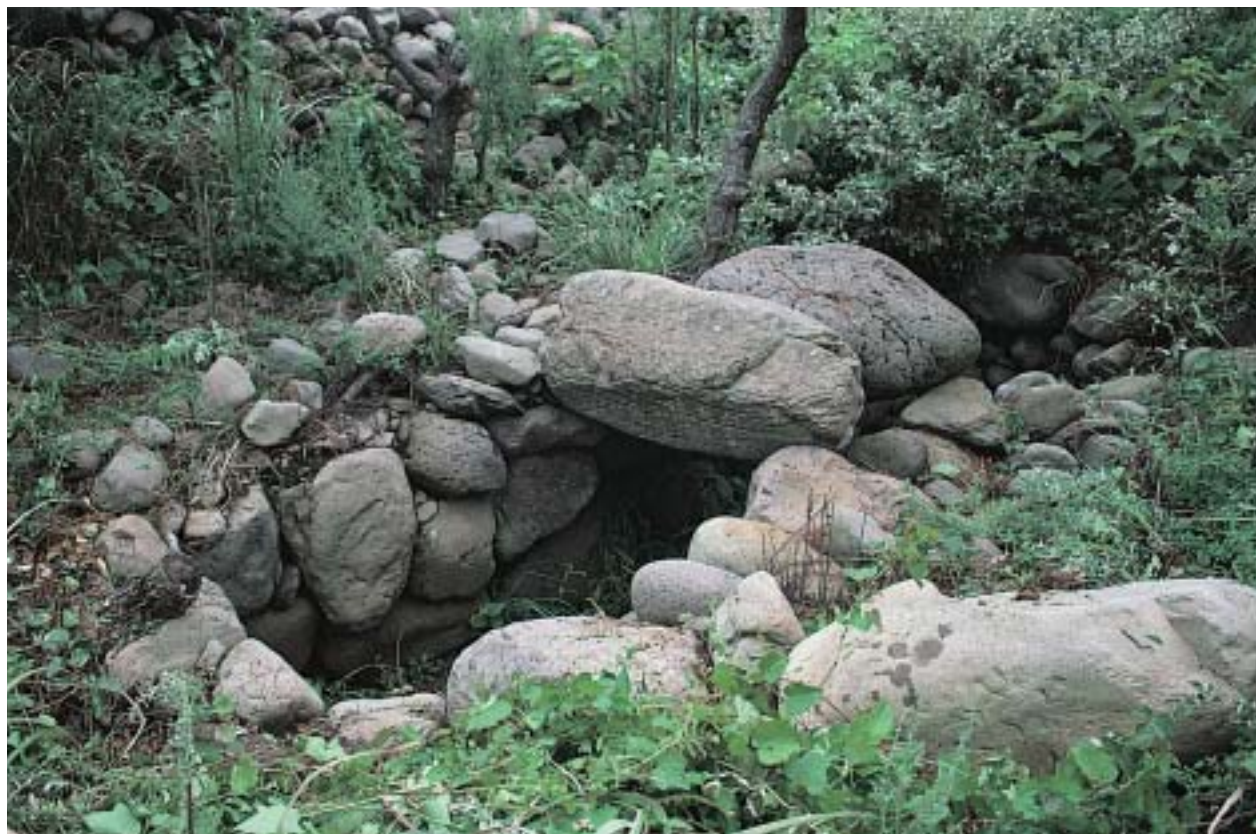
また門外には放生池と、それに架かる石橋、維新殉難者の墓などがある。

小門内の藩主夫妻・一族その関係者の墓は、唐破風の笠石を付けた角柱形で、特に藩主夫妻のものには家紋が陽刻してある。

これら3か所の墓所は、藩政時代の大名家の葬制や墓制を知るうえで貴重である。

見島ジーコンボ古墳群

- 指定年月日/昭和59年 7 月25日
- 所有者/国・萩市
- 所在地/萩市見島
- 指定面積/1.2ha



見島ジーコンボ古墳群は、7世紀後半から10世紀初頭にかけて造られたもので、萩沖約45kmの海上に浮かぶ見島の古代遺跡である。本村地区の東方高見山から晩台山に至る横浦海岸一帯に、長さ約300m、幅50mから100mにわたって分布している。

古墳の数はおよそ200基、現在石櫛を残しているものだけでも160基はあり、このほかに破壊されたものや未確認のものも相当数あ

ると思われる。海浜の比較的大きな玄武岩を用いて造られた積石塚で、その分布密度は高く、全国でも稀な集団古墳群である。

見島の地理的状況に加えて、墓の数が多かったことや武器類、装身用具類、銅線、土器類などが出土されたことから、埋葬されているのは朝鮮半島からの侵入に備えて駐留していた武人の集団で、中央の文化を持っていたと思われる。

はぎ おう かん
萩往還

- 指定年月日/平成元年 9 月22日
- 所有者/国・山口県ほか
- 所在地/萩市大字椿、明木ほか
- 距離/7.5km



萩往還は、慶長9年（1604）関ヶ原の戦いに敗れ、防長2か国に減封された毛利輝元が築城した萩城の城下町（萩市）と瀬戸内海の三田尻（防府市）をほぼ直線で結ぶ参勤交代道として開かれた。陰陽連絡道として重要な街道であった萩往還は、城下町唐樋の札場を起点として、橋本川に架かる橋本大橋を渡

り、悴坂^{かせがさか}を越え、明木から一升谷を経て佐々並に至り、さらに板堂峠を越えて山口に入り、鯖山峠を越え三田尻港に至る。沿線には、涙松跡、悴坂一里塚跡、大屋刑場跡、悴坂^{かご}駕籠^{たてば}建場跡などの遺跡が残り、幕末には維新の志士たちが往来するなど歴史的にも重要な役割を果たしている。

ちょうもんきょう

長門峡

- 指定年月日/大正12年3月7日
- 管理団体/山口県
- 所在地/萩市川上ほか
- 指定面積/3,358,973m²



長門峡は、今から数十万年前から数万年前、徳佐から三谷にかけて存在していた湖の水が、日本海に流れ出るとき川底を削ってできたものである。

周囲の山地は、約9000万年前の火山活動でできた火山岩（流紋岩、安山岩）や凝灰岩などからなり、これらの岩石は、長い年月をかけて川の流れて削られ、両岸は断崖絶壁をなしている。

川底には砂や小石はほとんどなく、岩石がむき出しになっており、各所に滝や^{あうけつ}甌穴や淵

など流水でできた地形が見られる。

この阿武川を中心とした生雲川、^{いくも}蔵目喜川、^{ささなみ}佐々並川の水と岩と植物とが調和して雄大な自然美をなす渓谷には動植物が豊富で、特にシダ植物は多く生育しており、その種類は120種を超える。

なお、川上（萩市）から阿東町にまたがる総延長約5 kmの渓谷は、萩出身の日本画家、高島北海（1850～1931）により長門峡と名づけられた。

す さ わん
須佐湾

- 指定年月日/昭和3年3月5日
- 管理団体/萩市
- 所在地/萩市大字須佐



須佐湾は、典型的なおぼれ谷現象によるぶどう状海湾である。1つの湾の中に更に7つの入江が複雑に入り組み、海岸線は延長16kmにも及び、湾内には大小様々な島が散在しており、その美しさから歌人達に多く詠まれている。

須佐湾周辺の岩質は、主として安山岩や流紋岩等の火山系岩質と新第3期層（1500万年前）に堆積したといわれる化石を含む砂岩や礫岩（須佐層）、さらに斑れい岩の貫入による変成岩ホルンフェルス等が入り組んでおり、特に黒色と淡灰色の層が織り成すホルンフェルス大断層は、学術的にも貴重なものと

して知られている。海蝕によって海岸は奇岩断層を作り、地質学的にも興味が持たれている。

また、約2kmにわたって高さ約100mの大絶壁を連ねる屏風岩、更に高さ9m、幅5m、奥行き50mの赤瀬の洞門をはじめとする多くの海食洞の景観は雄大で、その他にも、船隠・玉島・鶴島・亀島・中島・亀のくび・黒岩・地の松島・観音岩・のり石・よろい岩・かぶと岩・雄島などの多くの名勝地がある。

なお、昭和31年（1956）11月に北長門海岸国定公園に指定された。

みょう じん いけ
明神池

- 指定年月日/大正13年12月9日 ● 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字椿東 ● 指定面積/11,788m²



明神池は、笠山（標高112m）と本土との間に砂州^{さす}ができ、陸続きになったときに埋め残された海跡湖である。現在も池の水は溶岩塊の隙間を通して外海とつながっており、外海の干満に応じて池の水も増減する。

大池・中の池・奥の池の3部分からなる池にはマダイ・クロダイ・メジナ・スズキ・イナ（ボラ）・メバル・イサキ・コノシロ・カ

ワハギ・フグ・エイなどの磯付魚類が生息している。なかでもクロダイ・メジナ・イナ・コノシロなどは池で盛んに^{ふか}孵化し、春には池の周囲に稚魚が集まり黒色を呈する。

なお、水面にはシオアメンボが見られるが、これは日本海岸における唯一の産地で、明神池は本種の分布北限となっている。

かさ やま
笠山コウライタチバナ

じ せい ち
自生地

- 指定年月日/大正15年2月24日
- 管理団体/萩市
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/1,322m²

見島ウシ産地

- 指定年月日/昭和3年9月20日
- 管理団体/萩市
- 所在地/萩市見島



見島ウシは、朝鮮半島から渡来し、室町時代ごろから飼養されていたといわれ、以来混血することなく現在に至ったため日本で最も古い和牛といわれている。

役用種で毛色は黒褐色、体高は成雌牛約1.17m、成雄牛約1.25mと、当時本土でよく飼養されていた和牛より小柄であるが、体はよく締まり、体のつり合いも良い。角は小

形で外上方に開き、やや横に延びている。四肢・蹄は短く、強靱である。また、晩熟で3～6歳で成熟年齢に達する。

性質はきわめて温順で力が強く抗病性も高い。加えて粗食に耐えるなどの特性をもっているため古くから農耕や壁土練等に重宝されてきた。

見島のカメ生息地

- 指定年月日/昭和3年9月20日
- 管理団体/萩市
- 所在地/萩市見島
- 指定面積/3,563.6m²



見島の本村^{ほんむら}周辺の平地には、イシガメ・クサガメが多数生息している。

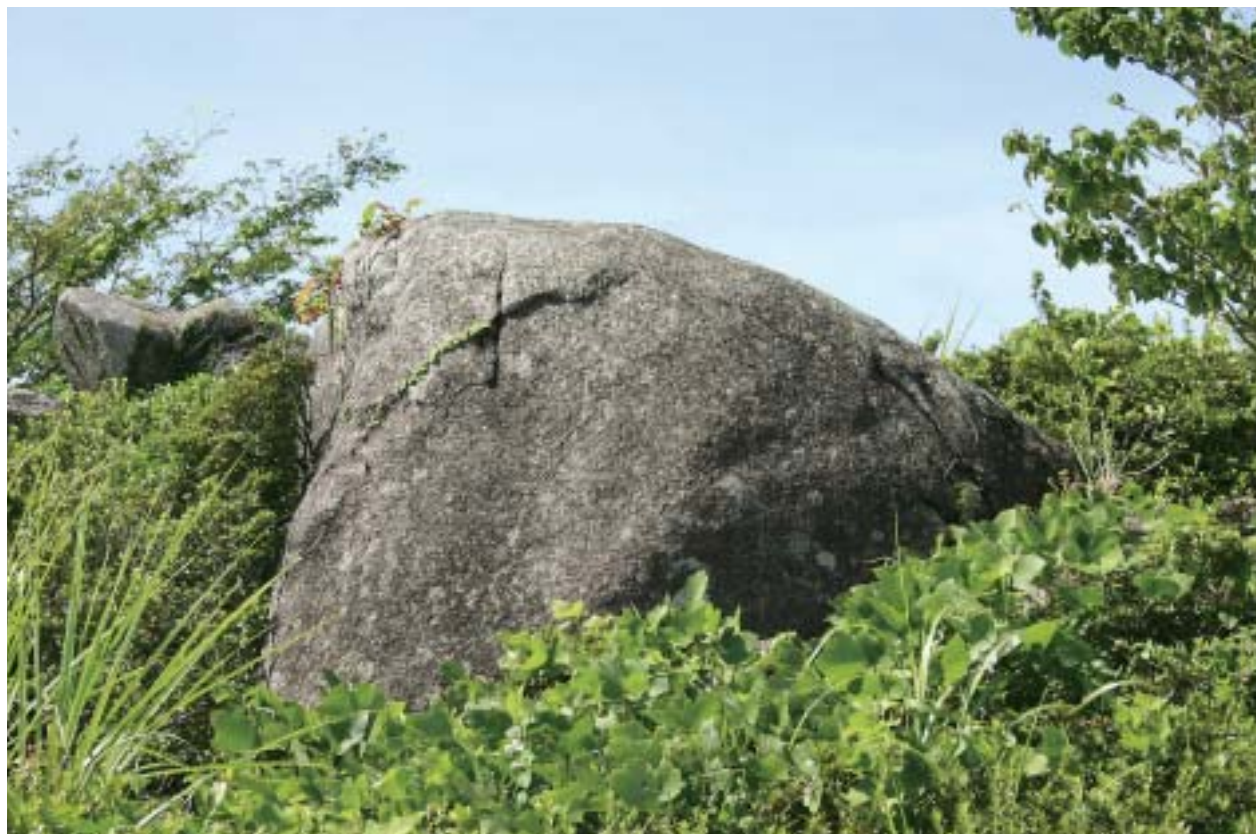
見島はもと本州の一部であったが、第4紀洪積世以後に島として本州から離れたもので、島内には当時の遺存生物がみられる。イシガメ・クサガメはその一つで、^{かた}片くの池にはこれらのカメが生息しているので指定された。

この池はかなり大きな池で、ときどき水際の岩の上でカメの休んでいる姿がみられる。

イシガメはわが国の特産物で、本州・四国・九州に分布している。また、クサガメは本州・四国・九州・朝鮮半島・台湾・中国などに生息している。このカメは後肢のつけ根から悪臭を出すのでクサガメの名がある。

す さ こう やま じ しゃく い し 須佐高山の磁石石

- 指定年月日/昭和11年12月16日 ● 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字須佐



高山（標高532.8m）は、第三紀中新世の須佐層を斑れい岩類が貫いてできたもので、餅盤という丸餅を伏せたようなドーム状の山の形をしている。貫入の時期は地層の順序から中新世以降で、日本における最も新しい深成岩類の1つに数えられている。

高山の頂上はやや広く、斑れい岩の岩塊が

いたるところに散り、北方の馬背、象の鼻、天狗岩、あるいは風穴付近には、巨岩の露出が顕著である。この付近一帯には、磁力強力な岩石が散在し、この周辺で磁石やレーダーは用をなさない。その理由は未だに解明されておらず、この岩を磁石石とよんでいる。

かわ かみ 川上のユズおよびナンテン自生地

- 指定年月日/昭和16年8月1日 ● 所有者/宗教法人 福昌院
- 所在地/萩市川上 ● 指定面積/1983.4m²



萩市川上の山林地帯は、スギ、ヒノキの造林地を除けば、シラカシとアラカシを主体とする照葉樹林である。それらに混じってあちこちにユズが生育し、場所によってはユズが高木層に混生している。指定地では、大きいものは目通り直径30cmにも達する。樹齢60～70年になれば、枝先から枯れはじめるので、100年以上の老木は認められない。ユズは野生の状態で、果実が熟する秋には一面が黄色

く見える。

指定地の他、川上全域にわたり天然林、人工林の別なく、下木の5～8割はナンテンである。ナンテンはメギ科の常緑低木で、幹の高さは1～2mである。本州（東海道以西）、四国、九州、中国大陆に分布しており、日本の自生地は相当広範囲であるが、川上地域のように多数生育しているのは珍しい。

し づき やま 指月山

- 指定年月日/昭和46年 3 月16日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字堀内
- 指定面積/19.1ha



指月山は、日本海中の独立山で、本土との間にできた砂嘴^{さし}によってつながれた陸繋島である。山体は花崗岩^{かこうがん}でできていて、海拔143mである。

防長二州に封ぜられた毛利氏はこの山麓を埋め立てて築城し、慶長13年（1608）に完成したが、このときから300年にわたる藩政時代を通じて、その森林は城内林として保護

され、そのまま維持されて今日に至っている。このため山体を覆う森林はよくその姿をとどめ、温暖帯照葉樹林として日本でもまれにみる成熟した森林である。これらの樹林は周囲6.4mもあるクスノキをはじめ、シイ・ツバキ・イスノキなどの常緑広葉樹に多少の落葉樹が混生している。このほかサザンカの群生がみられ、その自生北限地となっている。

はぎ し ひ や こ ち く 萩市平安古地区

- 選定年月日 / 昭和51年 9 月 4 日
- 所在地 / 萩市大字平安古町 ● 選定面積 / 4.0ha



◀ 坪井九右衛門旧宅

選定地区は、橋本川に沿った東西約150m、南北約300mの範囲で、藩政期の地割りをよく残している。かつて重臣の多くは三の丸に住んでいたが、平安古・江向・土原方面の開墾が進むにつれて武家住宅もふえていった。

現在、この地域には毛利一門の右田毛利家（16,000石余）の下屋敷をはじめ、寄組児玉家（3,084石）、栗屋家（691石余）や大組町

田家（66石）などの屋敷跡が今も往時の面影を残している。特に幕末藩政に活躍した坪井九右衛門（157石）の旧宅は、長屋門付近から土蔵・本邸の式台・庭まわりなどによく旧状を残している。また、この地域には左右を高い土塀で囲み、見通しのきかない「鍵曲」といわれる鍵手形道路が残っている。

はぎ し ほり うち ち く 萩市堀内地区

- 選定年月日/昭和51年9月4日
- 所在地/萩市大字堀内 ● 選定面積/55.0ha



◀ 永代家老 益田家物見矢倉

選定地区は、旧萩城三の丸地域で、堀内といわれる広さ東西9丁余（約990m）、南北6丁余（約660m）の約55.0haである。藩政時代、藩の諸役所（御蔵元・御木屋・諸郡御用屋敷・御膳夫所・御徒士所）や毛利一門、永代家老、寄組といった重臣たちの邸宅が建ち並んでいた。

現存の建物としては、永代家老益田家

（12,000石）の物見矢倉、旧周布家（1,530石）の長屋門、繁沢家（1,094石余）の長屋門、永代家老福原家（11,314石）の屋敷門、口羽家（1,018石余）表門と主屋等がよく旧態をとどめている。明治以降、士族救済のために広大な屋敷跡に植栽された夏みかんが、これら長屋門や土塀などと一体をなし、歴史的風致を残している。

はぎ し はま さき 萩市浜崎

- 選定年月日/平成13年11月14日
- 所在地/萩市大字浜崎町ほか ● 選定面積/10.3ha



▲ 浜崎本町筋 旧山村船具店

選定地区は、萩城下三角州北東端に位置し、東西約320m、南北約530mの範囲で、藩政時代は廻船業と水産加工業で栄えた町であった。

地区内には、藩政時代から昭和初期にかけての伝統的建造物が100棟以上現存しており、なかでも藩政時代に遡ると推定される主屋や土蔵は44棟を数える。

主屋の一般的な形式は切妻造平入二階建て

角地では入母屋造となっている。また戸口は藪戸や潜り戸の付いた大戸を設けている。窓の形式は虫籠窓や出格子など建てられた時代によって異なっており、変化ある表構えになっている。

藩政時代から近代にかけての伝統的建造物が数多く残り、特色ある歴史的景観をよく伝え、わが国にとっても価値が高いものである。

はぎ えき しゃ
萩駅舎

- 登録年月日/平成 8 年12月20日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字椿



萩駅舎は、大正14年（1925）4月3日の美祢線長門三隅・萩駅間の開通に合わせて建築されたもので、若干の改修は施されているが、開業当時の姿をよく残し、現在も駅舎として使用されている。

屋根は切妻造の棟先部分を切り落とした形で、当初は屋根材に石板が用いられたようである。また、屋根上に採光や装飾のためドー

マウインドウが突出して取り付けられ、大正時代の洋風建築がしのばれる。

壁面は白壁と縦長の大きな窓が特徴で、窓は上下に開閉できるなど洋風のデザインを取り入れている。

現存する鉄道の付属施設として、また萩地方の近代化を象徴する建物として注目されている。

めい りん しょう がっ こう ほん かん
明倫小学校本館

- 登録年月日/平成8年12月20日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字江向



明倫小学校本館は、藩校明倫館跡地に昭和10年に建てられた木造二階建の校舎である。屋根は入母屋造、東西両端と中央玄関の棟に藩校明倫館の聖廟と同じように鴟尾が置かれ外壁は1階部分が簷子下見板張、2階部分が白漆喰塗りになっている。また連続する窓のデザインは特徴的で、伝統様式の中に近代的

デザインが取り入れられている。採光・通風・耐震性も考慮し、所々には支柱を入れた塵芥投入塔を設けるなど機能的にも優れた建築設計である。

現在本館は小学校の一部として、校長室や職員室、特別教室などに使用されている。

そん やく ば
むつみ村役場
きゅう ちょう しゃ
旧庁舎

- 登録年月日/平成 9 年 6 月12日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字吉部上



むつみ村役場旧庁舎は明治28年（1895）に吉部村役場として建設、昭和30年（1955）に吉部村と高俣村が合併しむつみ村となり、昭和60年（1985）に新庁舎が建設されるまで90年以上に渡りむつみ村役場本庁舎として使用されてきた。

木造二階建寄棟造、よせ むねづくり 棧瓦葺、さんかわらぶき 桁行14.773m、はり ま 梁間7.879mの旧庁舎は、長方形平面の妻側中央に車寄が取り付け、当初は1階の内部に十字形の土間を設け、周りの板敷き床との境に柵やカウンターが取り付けられていたことが柱やかまち 框の痕跡より解る。また2階は奥1間半を和室とし、それ以外を一室の大広間としていた。カウンターの撤去・階段の位置の変更・間仕切の変更等の改築が行われているものの、主要部材はほとんどが健全な状態で残っている。

この庁舎は建築年代が判明している山口県内の役場の中では最古のものである。

そん やく ば
むつみ村役場
ど ぞう
土蔵

- 登録年月日/平成 9 年 6 月12日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字吉部上



この土蔵は、吉部村役場の資料保存庫として、庁舎と同じく明治28年（1895）に建設されたと伝えられている。木造二階建切妻造、きり づまづくり 棧瓦葺、さんかわらぶき 桁行5.909m、けた ゆき 梁間4.924m、はり ま 軸組は良好である。野地板が近年に取り替えられており、屋根の破損もそれほどないが、外壁の壁土が落ちている部分があり、小舞まで見える箇所がある。窓外部に取り付く銅板扉は3か所中2か所が欠失している。1階には3か所の造り付けの戸棚があるが、当初からあったものではないと思われる。

さん み ばし
三見橋

- 登録年月日/平成10年10月9日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市三見



三見橋は、萩市の西部に位置する床並川に架かる橋で、通称「三見のめがね橋」の名で広く知られている。橋は長さ21.4m、幅3.4m、水面からの高さ13.0mの大規模な石造りアーチ橋で、大正3年（1914）に完成した。

明治維新後の近代化の中で、山陰地域の産業経済発展のためには交通の利便向上が不可

欠とされ、県道の改修が決まった際にその県道の橋として設けられたのがこの橋である。山間の谷間を大きく跨いだ全景は、^{また}殊に^{こと}アーチの曲線が印象的で、かつ堂々としている。建築年代は新しいが、近代化遺産として貴重な石造建築物であるといえよう。

か せ ずい どう
鹿背隧道

- 登録年月日/平成11年7月8日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字椿、明木



鹿背隧道は、^{かせ が さか}悴ヶ坂峠を貫通する隧道である。県内では類のない石造トンネルで、長さ約182m、幅員約4.2m、高さ約3.9mの規模を有する。明治16年（1883）に着工、明治19年（1886）頃完成したと思われる。施工にあたっては、萩・阿武地域のほか、大島久賀や大分安心院の石工が工事を請け負っている。

明治10年代の石張り道路隧道としては大変稀少であり、総延長も国内最長を誇っている。

素朴ではあるが重厚な味わいを持つ切石積みのポータル（坑口）、総石張りの内部は壮観である。

おち あい いし ばし
 落合の石橋

- 登録年月日/平成11年11月18日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字佐々並



この石橋は、萩往還にある石造の^{はね}刎橋である。石組みの兩岸から片持梁^{かたもちはり}の役割を果たす柱状の石材が桁として突出し、その上に3列の加工された玄武岩らしき板石がのっている。この方式は他の地方ではほとんど見られない橋梁形式で、山口県特有のものとされている。

石橋は、静かな山間に開かれた田地に沿っ

た清流に小径を結んで懸けられ、人馬の往来の賑わった幕末の萩往還の様子が偲ばれる。

確認されている建造年代では、長門市湯本の^{ばんじゃく}磐石橋が最も古いものとされており、落合の石橋は山陰から瀬戸内への橋梁形式や技術伝播の中継地として注目される。

しも よこ ぜ こう みん かん
下横瀬公民館（旧明木村立図書館）

- 登録年月日/平成11年11月18日 ●所有者/下横瀬地区
- 所在地/萩市大字明木



旧明木村立図書館は、明治39年(1906)に明木尋常小学校内に開館した。登録建物は、昭和2年(1927)に村内で読書組合が創設されたことを契機に、昭和3年(1928)に新館として建築されたものである。

昭和34年(1959)読書組合創立50周年(昭和31年)記念として新図書館が完成すると、下横瀬地区の公民館として現在地に移築され

た。現在は、地区住民の集会や会合の場として活用されている。

村内の教育文化の向上を目指す瀧口吉良(明木村長・県会議長・貴族院議員・衆議院議員を歴任)の尽力により建設された日本で最初の村立図書館であり、昭和初期から戦前昭和期を中心に旧明木村の文化教養を育んできたシンボルの一つとして貴重である。

はぎ がっ こう きょういん しつ
萩学校教員室

- 指定年月日/昭和44年12月5日
- 所有者/山口県
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/1棟



萩学校教員室は、明治3年萩明倫館を改組して創立された「萩中学」の教員室として明治20年（1887）に建てられたもので、萩中学校が堀内に移転した後は明倫尋常高等小学校の教員室や図書館として使用されていた。その後、萩市役所の敷地内に移築され庁舎の一部として使用していたが、昭和44年（1969）

に現在地に再度移築し修復された。

建物の形式は木造一部二階建寄棟造^{よせむねづくりさん}檼^{かわらぶき}瓦葺、玄関は吹き放し、桁行^{けたゆき}12.24m、梁間^{はりま}7.28mで軒廻りは化粧軒、裏天井である。

全体に建築当時の外観がよく保存され、その姿も優れていて、萩における明治洋風建築の代表的なものである。

ちょうじゅ じ じゅうさん じゅうのとう

長寿寺十三重塔

- 指定年月日/昭和48年10月19日 ● 所有者/宗教法人 長寿寺
- 所在地/萩市大字北古萩町 ● 員数/1基



十三重塔は元和4～6年（1618～20）に萩藩の当職であった榎本元吉が、長門市向津具の二尊院にあったものを萩の自宅に引き取って建てていたが、その後、熊谷浄味（くまが い）が貰い受けて当寺の境内に建立したといい伝えられている。

高さは失われた相輪を除き5.45mで、下層の軒の一边は1.17m、最上の軒ですら一边0.75mの大きさを誇る実に堂々としたものである。厚い軒、両端の部分の力強い反りは鎌倉後期の様式をよく表している。基礎の一面に銘文を削った跡があり、嘉元4年（1306）4月15日と造立年代をわずかに読み取ることができる。地方臭のない本格的な作りから中央で作られたものと思われ、県下の石塔の中でも第一級のものである。

きゅう ふく はら け はぎ や しき もん
旧福原家萩屋敷門

- 指定年月日/昭和49年11月8日 ● 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字堀内 ● 員数/1棟



この門は、萩藩永代家老福原家(11,314石余)の萩上屋敷の表門である。福原家の本拠は領地の宇部にあったが、当主は代々毛利家の重臣として平素は萩に住むのが常であった。福原家にはこの上屋敷の外、萩城下に中屋敷と下屋敷があった。

門の形式は腕木門で両袖に潜り戸が付いている。屋根は切妻造本瓦葺で、桁行7.9m、

梁間2.1m、棟高4.4mの長大なものである。木割は雄大で、特に柱の上下や冠木に打たれた飾り金具に模した木彫の飾りはおもしろく、建立は江戸中期と思われる。

現在、萩に残る重臣の武家屋敷の門の多くは、門番所のある長屋門であるが、門番所のないこの形式は珍しく貴重である。

きゅう なし ば け しょ いん

旧梨羽家書院

- 指定年月日/昭和52年11月11日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/1棟



梨羽家は、萩藩大組の藩士で683石余の禄を授けられていた。屋敷は堀内地区の重臣たちの屋敷街に位置し、敷地面積から他に数棟の建物があつたと思われるが、現在はこの書院しか残っていない。

建物は桁行^{けた ゆき}12.8m、梁間^{はり ま}6.0mで、屋根は西端寄棟造^{よせ むねづくり}、東端切妻造^{きり づまづくり}の棧瓦葺^{さん かわらぶき}である。南側に通して庇縁^{ひさしえん}、北側・東側には濡れ縁を設

けている。

萩には長屋門が相当数残っているが、武家住宅の本邸は少なく、本書院は一部を欠いているが、19世紀初頭に建築された貴重な建物である。特に欄間障子の中綿式などの工作は優秀なもので、比較的高級な建築物といえる。

か げつ ろう
花月楼

- 指定年月日/昭和54年12月4日
- 所有者/宗教法人 松陰神社
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/1棟



茶室「花月楼」は、7代藩主毛利重就^{しげ たか}が利休の流れを汲む表千家の家元、第7代如心斎の門人、江戸千家の元祖川上^{かわかみ}不白の献上した花月楼の設計図に基づいて、安永5年(1776)三田尻(防府市)の別邸宅に建築したものである。

重就の没後、その寵愛を受けた御茶堂竹田休和^{ひや へ}が9代藩主斉房から貰い受けて平安古の

自分の屋敷内に移築し、その記念に「花月楼之記」を作った。明治21年(1888)品川弥二郎がこの建物を松本橋のたもとの自宅に移建保存していたものを昭和34年(1959)に現位置に移築した。

なお花月楼とは、茶事七事式のなかの「花月の式」を催すことができるように設計された茶室のことである。

西堂寺六角堂

- 指定年月日/昭和56年12月11日
- 所有者/宗教法人 西堂寺
- 所在地/萩市大字江崎
- 員数/ 1 棟



湧出山^{ゆうしゅつざん}西堂寺は、応永年間(1394～1428)に創建された曹洞宗^{さいとうしゅう}の寺院で、当時は、済度寺といわれていたが、後に西堂寺と称されるようになった。大内から毛利の時代にかけて祈願所として世の信仰があつく、海の中の寺「浮島^{うきしま}西堂寺」とも呼ばれ、広くその名を知られている。六角堂は、その境内にある木造の一面4.26m、高さ11mの六角円堂で、寛保元年(1741)の寺社由来によると、「本堂二間半六角」とあり、江戸中期頃には六角堂

として建立されていたと思われる。一重裳階^{もこし}付、屋根は宝形造本瓦葺、一面に入母屋造妻入^{いりもやづくりつま}の向拝が付き、向拝の正面は2.54m、出は1.77mで、裳階の柱はすべて六角柱であり、内陣とはえび虹梁^{こうりょう}でつながれている。軒は扇垂木となっており、内陣の柱も六角、天井は絵入りの菱格子である。

棟束銘に慶応4年(1868)とあることから、慶応年間に新古の部材料を用いて現在の六角堂が再建されたと思われる。

けん ぽん ちゃくしょくしゃ か さん ぞん ぞう 絹本着色釈迦三尊像

- 指定年月日/昭和53年12月22日 ● 所有者/宗教法人 東光寺
- 所在地/山口市亀山町(山口県立美術館寄託) ● 員数/三幅対



三幅一對の釈迦三尊図は、黄味を帯びたやや粗目の絹を用いたうえに墨を主として描かれ、部分的に朱・緑青などの顔料を使用している。

主幅は縦97cm、横44cmの大きさで、釈迦如来像が正面向きに描かれている。右手に蓮華を持ち、左手を腹前に置き、条相部に唐草を施す袈裟を着し、岩座上の白蓮華に結跏趺坐している。

右幅の文殊菩薩像は右手に如意、左手に経冊を持って獅子上に坐している。

左幅の普賢菩薩像は両手で経巻を開いて持ち白象上に坐している。

鎌倉末期以降に描かれた水墨道釈画の伝統にしたがったものであろうが、本図は温雅にまとめられているところから室町後期の作と思われる。

もく ぞう しゃ か によ らい ざ ぞう 木造釈迦如来坐像

- 指定年月日/昭和41年 6 月10日
- 所有者/宗教法人 大照院
- 所在地/萩市大字椿
- 員数/ 1 躯

この像は納衣^{のう え}を着け、左手は膝上^{ひざうえ}で印相^{いん ぞう}を結び、右手は肘^{ひじ}を曲げて前に立て、右足を外にして結跏趺坐^{けっ か ぶ ざ}している。像高は2.33mのいわゆる丈六仏^{じょうろく ぶつ}の古像の一つである。細目の

穏やかな螺髪^{ら ぼつ}、伏目の両眼、丸味のある頬の肉どりなど、平安末期の一典型を示すもので、納衣胸前の浅い衣文^{えもん}等、木取りの風が雄大であり、時代の特色がよく表われている。製作は平安末期のものと思われるが、総体に後世の補修の跡がみられるのが措まれる。

もと大椿山歓喜寺の本尊であったが、歓喜寺が中世に荒廃し、その跡地に毛利氏の菩提寺霊椿山大照院が創建されて同寺の釈迦堂に安置された。



もく ぞう び しゃ もん てん りゅう ぞう 木造毘沙門天立像

- 指定年月日/昭和41年 6 月10日
- 所有者/宗教法人 玉泉寺
- 所在地/萩市川上
- 員数/ 1 躯

この像は像高165cm、樟材一木造で、彩色は剥落、宝髪、彫眼、開眼、唐様の鎧をつけ、左手は肘を曲げ掌に宝塔を乗せ、右手には宝棒を持ち、すね当てを付け靴を履いている。腰をやや左に捻り、左足で夜叉の頭部、右足で腰部を踏みつけている。邪鬼、岩座は後補である。あられずりの地方作であるが、面相にきびしさを、体軀に力強い量感を感じさせ、鎌倉時代初期を下らない時代の作と推定される。

もともと光國山生福寺しょうふくじに安置されていたが、生福寺が廃寺となり、玉泉寺に移したものである。「昔、山崩れの災害で、生福寺にあった尊像が川を下り、海を渡り、遠く見島に流れつき、宇津観音に祀られていた。が、それから見島で疫病が流行った。占ったところ、川上に戻すべしとのことで、疫病治まった。」との言い伝えが残っている。



もく ぞう ふ どう みょう おう りゅう ぞう 木造不動明王立像

- 指定年月日/昭和41年 6 月10日 ● 所有者/宗教法人 長寿寺
- 所在地/萩市大字北古萩町 ● 員数/ 1 躯



この像は高さ162cm、^{けん ばつ}巻髪・^{べん ばつ}弁髪を左肩に垂らし、左目を半眼に右目をいっぱいに見開き、下歯で上くちびるをかんで犬歯をのぞかせ、右手に宝剣、左手に^{けん さく}羂索を持っている。総体に肉どりも穏やかなヒノキ材一木彫で眼も彫眼である。平安時代後期の作であるが、^{えもん}衣文の刀の入りも深くて力強く、裳の折返し^{じょうはく}は条帛の垂下部の形などに流動感がある。現在は鼻先を欠き、両手足先、光背や台座などを後補しているのが、等身の不動立像の古作として注目に値し、県内の不動明王像の中では優れている。

もと長寿寺の末寺で浜崎町上ノ丁にあった松巖寺の不動堂の本尊であったが、廃寺になったため長寿寺に移したものである。

もく ぞう もん じゅ ぼ さつ き し ぞう 木造文殊菩薩騎獅像

- 指定年月日/昭和42年7月4日
- 所有者/宗教法人 佛光寺
- 所在地/萩市大字紫福
- 員数/1 軀

この像はヒノキ材の寄木造^{よせぎづくり}で、像高94cm、玉眼入り、頭上に宝髻^{ほうけい}を五つ結び、三道を彫り、条帛^{じょうはく}を左肩から天衣を両肩からかけ、裳は折返一段、右手に宝剣、左手に経巻をにぎって獅子座の上に座禅をしている。南北朝時代に、建仁寺大仏師肥前法橋覚賀により製作されたもので、その製作年代の古さと仏像の端然たる力強い姿態、きびしいまでの表情と形相、そして神秘的な魅力は、人びとの祈りにこたえる頼もしさを感じさせる。



もく ぞう ぎ おう お しょう い ぞう
木造義翁和尚倚像

- 指定年月日/昭和53年12月22日 ● 所有者/宗教法人 大照院
- 所在地/萩市大字椿 ● 員数/1 軀



この像は、大椿山歓喜寺開山義翁和尚の尊像である。和尚は建武2年（1335）に入滅、その後113年目の文安4年（1447）に製作されたことが袈^も先^{さき}裏の墨書銘によってわかる。

歓喜寺は荒廃していたが、明暦2年（1656）毛利家の菩提寺大照院として再建されている。

この像は総高69cm、坐高44cm、ヒノキ材寄木造、頭部は一材丸彫であるが、後頭部を矧^{はぎ}つけて挿首^{さしくび}にしている。

面相は深く刻まれた額の皺^{ひたい}、眉根^{しわ}をよせてにらむ鋭い眼光、たくましい鼻、きびしく引締めた口元など、萩地方に臨済禅を伝えた傑僧の気迫があらわれていて地方作の優秀作といえる。

さん そ し ごう
三祖師号

- 指定年月日/昭和48年 3 月30日
- 所有者/宗教法人 東光寺
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/3 幅



これら三幅対の書は、黄檗宗初祖達磨大師・二祖慧可大師・三祖僧璨大師の三祖師号で、わが国に初めて黄檗宗を伝え、宇治に本山万福寺を開いた明の帰化僧隱元隆琦、そしてその隱元と並び黄檗能書の三筆と称せられた木庵性瑫・即非如一が書いたものである。

それぞれの大きさは、縦はいずれも139.5cm、横は隱元書が34.5cmで、他は30.5cmである。これらの遺墨が対幅で伝来していることは珍しく、江戸時代初期に日本の書道史上に一転機を画した唐様明朝の書風をみることで、その点でも貴重である。

もく がく ちゅう れん ほう はい どう した がき 木額・柱聯・榜牌・同下書

- 指定年月日/昭和48年 3 月30日
- 所有者/宗教法人 東光寺
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/121点 木額40枚、柱聯29対と 1 枚、榜牌 3 面、下書19幅



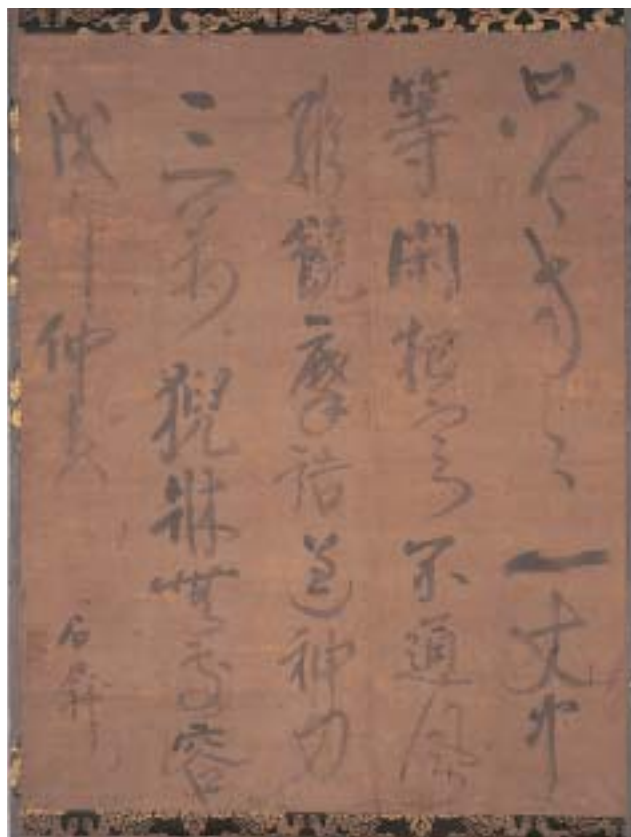
東光寺の木額・柱聯・榜牌・同下書は、黄檗宗本山萬福寺（国指定重要文化財）に次ぐ重要なもので、これらは東光寺の盛んなころ、20数棟あった各堂宇の内外に掲げられていたものである。木額は軒下や堂内の梁上に掛け、柱聯は左右対称になっている 1 対の柱に対向の法語を書いて下げ、榜牌は僧の集団生活を規制する指示事項を書いて掲げられたも

のであって、いずれも木製である。またこれらの下書は紙本で墨書である。

柱聯のなかには屋外にあって雨露にさらされ、剥落のはなはだしいものもある。これらの筆者は黄檗能書三筆の隠元・木庵・即非その他慧極以下当山歴代住職の筆に成るものが多く、雄渾な黄檗流の書法を伝えている。

しっ ぺい す かい ぜん じ ぼく せき
石屏子介禅師墨蹟

- 指定年月日/昭和50年 3 月22日 ● 所有者/宗教法人 龍蔵寺
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託） ● 員数/ 1 幅



石屏子介は、鎌倉末期の文保2年（1318）に來朝した元僧靈山道隱から法嗣し、興国3年（1342）ごろに入元して禅を学び、正平11年（1356）に帰国した。帰朝後は、菊池武光のために肥後国高瀬に永徳寺を開創し、ついで大内義弘の招きに応じて周防山口の香積寺の開山となった。また、三論宗の古刹白

牛山龍蔵寺を再興して臨済宗に改めたので、龍蔵寺も石屏子介を開山と崇めている。

この書は、拈古七絶の偈、紙本墨書縦70cm、横53.7cmの掛幅装で、全体に淡い墨跡ながら枯淡のうちにも雄勁な風趣に富んでおり、南朝の天授4年（1378）石屏子介示寂3年前の作である。

えん こう じ こ ぶん しゅつ ど ひん 円光寺古墳出土品

- 指定年月日/平成4年5月29日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/12個



昭和4年（1929）JR山陰本線敷設工事に伴って発見された円光寺古墳は、直径30m前後で6世紀中・後期築造の円墳と推定されている。石棺系の主体部から勾玉・管玉・環頭太刀柄頭、鉄鏃、土器片等が出土した。

これらのうち、めのう製勾玉3個、碧玉製勾玉1個、碧玉製管玉1個、耳環2個、環頭太刀柄頭3個が現存し、萩博物館に収蔵されている。

とりわけ、環頭太刀柄頭は、径約6cmの環頭に鳳凰文を配したもので、県内では他に3か所の古墳から出土されている。

環頭太刀柄頭の保有者は、有力な首長の存在を想定することができるもので、阿武国造につながる系統の首長と考えられる。また、古墳時代における大陸との交渉や防長地域の政治的動向をうかがう上で、その資料的価値は大きいといえる。

毛利氏日明貿易関係資料

- 指定年月日/昭和57年11月5日 ● 所有者/個人
- 所在地/萩市大字土原 ● 員数/3点 船旗1流 船旗文写1通 天正十二年梶原元兼証状写1通



毛利氏日明貿易関係資料は、毛利氏の対外貿易（対明貿易）に関する資料である。

船旗は縦167cm、横95cmの麻製の布で作られ、左端に棹さし用の鹿革の吊り手が13個配されており、黒色の太糸で縫い合わされている。上部には竹棒をさすための折返し縫いが残っている。

船旗文写は縦30cm、横45cmの、船旗の墨書銘を写したもので、返り点や送りがな等が付されている。

天正12年（1584） 梶原元兼証状写は縦16.5cm、横39cmの船旗に対応する文書で、貿易のありかたを詳しく記したものである。

これらの資料は、天正期（1573～91）毛利氏の対明貿易が赤間関（あかまがせき 下関市）を拠点に行われたことを伝える貴重な歴史資料である。

萩焼保持者 野坂康起

- 認定年月日/平成14年 3月26日
- 住所/萩市大字山田

萩焼は萩藩の御用窯として慶長年間（1596～1614）に開窯され、その技術は今日まで受け継がれ、とりわけ茶陶界での評価は高いものがある。

野坂（旧姓小田）康起は、昭和6年（1931）三重県で生まれ、同県や岐阜県で修行を重ね、志野・瀬戸黒の人間国宝荒川豊蔵に師事し作陶に専念した。昭和33年（1958）萩の野坂百一の婿養子となり、萩での作陶が始まった。

多種多様な土や釉そして窯にふれた経験から、東日本系の技術を熟知するとともに西日本系の技術を身につけた陶芸家として大変珍重されるべき存在となっている。とりわけ伊羅保釉と線文は、彼の独壇場といえる。

これら萩焼に新たな息吹を吹き込んだ実績は非常に高く評価されている。



はぎ やき ほ じ しゃ
萩焼保持者は だ の ぜん ぞう
波多野善蔵

- 認定年月日/平成14年3月26日
- 住所/萩市大字堀内

萩焼は萩藩の御用窯として慶長年間（1596～1614）に開窯され、その技術は今日まで受け継がれ、とりわけ茶陶界での評価は高いものがある。

波多野（旧姓山口）善蔵は、昭和17年（1942）佐賀県唐津市で生まれ、有田・唐津焼で作陶を学んだ。昭和43年（1968）萩の波多野栄三の養子となり萩での作陶を開始した。

一部に釉薬をかけずに焼き上げ、その部分を鮮やかな赤橙色に発色させる「緋色（火色）」という技法を創出させ、従来の萩焼にはない独自の作品を数多く手がけるとともに伝統的な茶陶にもその力量を発揮させている。



はぎ やき ほ じ しゃ
萩焼保持者

おか だ ゆう
岡田 裕

- 認定年月日/平成18年3月31日
- 住所/萩市大字椿東



萩焼は萩藩の御用窯として慶長年間（1596～1614）に開窯され、その技術は今日まで受け継がれ、とりわけ茶陶界での評価は高いものがある。

岡田裕は、昭和21年（1946）晴雲山岡田窯七代仙舟の長男として生まれた。大学進学のため萩を離れ、大学卒業後会社勤めを経て帰郷。昭和47年（1972）より、父である七

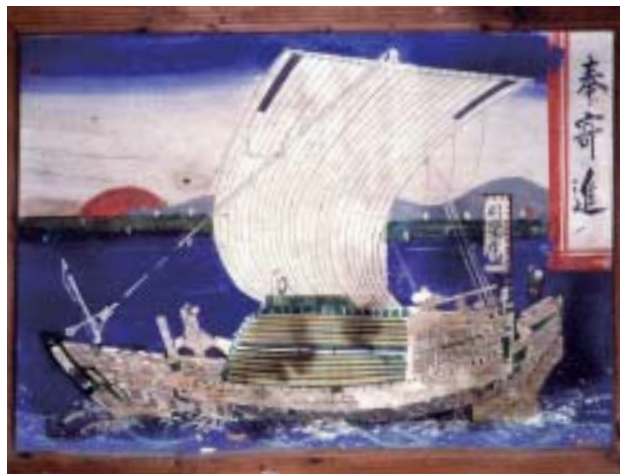
代仙舟に作陶を学び、平成16年（2004）に八代仙舟を継承した。

型紙を使い数種類の萩の粘土をそれぞれに吹き付けて模様を出し、部分的に焼き締める「炎彩」という技法を創出させ、萩焼の世界にさらなる斬新性をもたらしたとして高く評価されている。

ほう せん じ ふな え ま ぐん

宝泉寺船絵馬群

- 指定年月日/昭和61年10月24日 ● 所有者/宗教法人 宝泉寺
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託） ● 員数/67点



須佐高山にある宝泉寺とその鎮守・黄帝社には、船絵馬を中心とする67面の奉納された絵馬が伝わっている。高山は北前船の船乗りにとって航海の目印だけでなく、古くから「沖を行く船は帆を下げて敬拝」という作法があるくらいの信仰の聖地とみなされていた。そのため、高山の黄帝社は船乗りの信仰が厚く、須佐や江崎に寄港した時は、海上安全を祈って絵馬が奉納されたという。奉納者には、能登から長門までの広い範囲の船頭の名前があり、67面のうち56面は船絵馬で、うち9面は難船絵馬である。北前船時代の海上交通に係る資料として質、量ともに貴重である。

すみ よし じん じゃ ふな うた 住吉神社「お船謡」

- 指定年月日/昭和43年4月5日
- 保持者/住吉神社お船謡保存会
- 住所/萩市大字浜崎町



「お船謡」は、毛利氏の御座船唄^{ご ざ ふね うた}として藩主が乗船するときや新造船が進水するとき、また年頭に御船倉で代官が乗り初めの行事を催すときに演唱された。万治2年（1659）に住吉神社が勧請^{かん じょう}されてからは、その神幸祭^{かみ じよう}に山車^{だし}「お船」の上で謡われるようになったが、藩政時代には一般人の「お船謡」の演唱は禁じられ、演唱者も世襲^{せ しゅう}的な藩の階級であ

る「浜崎歌舸子」の家柄の者14人に限られていた。明治以後、神幸祭の行事のうち「お船」に関する事柄だけは浜崎の魚問屋が主催し、自家の使用人を使って「お船」を引かせ、問屋の若主人たちが「お船謡」を謡っていたが、後には浜崎町内で引き受けるようになり、演唱者も浜崎町内の一般男子から選ばれるようになった。

かみ み はら た うえ 上三原の田植ばやし

- 指定年月日/昭和48年 3 月30日
- 所有者/上三原の田植ばやし保存会
- 萩市大字須佐



慶長 5 年（1600）関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元^{てるもと}に従い、益田元祥^{もとよし}は須佐に移封された。このときに移住した農民が上三原の田植ばやしを伝えたといわれている。途中で一時期中断されたが、明治末期に神穀田の植付けの時の舞として復活した。庶民色豊かな唄と踊りで、衣装や面にも独特な趣向がこらされている。踊りは、当地方の小作人たちが地主の田植を行なう際に豊作を祈願して踊ったもので、秋の祭礼にはその初穂を氏神に供えた。

囃子の種類は、「綾」と称する道行きの囃子と、玉ごし、さねくり、打上げの植調子の3種、合わせて四種類の囃子方がある。このうち、道行きの綾と最後の打上げは「ユリ唄」

である。胴のパチさばきは、数種類に分けられており、複雑な「代かき」の様子を演じたものであるといわれる。大胴・メシ胴・拍子・シロかき・えぶり・早乙女の各役割があり、数には制限はない。

衣装は、ゆかた・花笠・たすき（5色）・面で、用具は、下げ杖・ささら・男根・風呂鍬・松葉・ナエメゴ・天秤棒であり、楽器は大胴・合鉦・拍子木である。

「打上げ」のユリ唄は、山口県内の田唄と異なり、安芸・石見系のオロシの部分歌っており、昔は安芸、石見系の田唄の唱法と同一であったと思われる。

とも のぶ かぐ ら まい
友信神楽舞

- 指定年月日/平成3年4月5日
- 保存団体/友信神楽保存会
- 所在地/萩市大字中小川



寛文7年(1667)毛利家の分家にあたり、中小川村に給領地をもっていた繁沢主水が、紀州(和歌山県)より権現様を勧請し、友信後山(権現山)に祀った。この時、社の神楽殿で村の若者が神楽舞を奉納したのが、友信神楽の起源とされている。

なお、友信という地名は、昔、鹿ヶ嶽(現在の城山)に城があり、相馬総二良友信が居城としていたということから名付けられたと伝えられている。

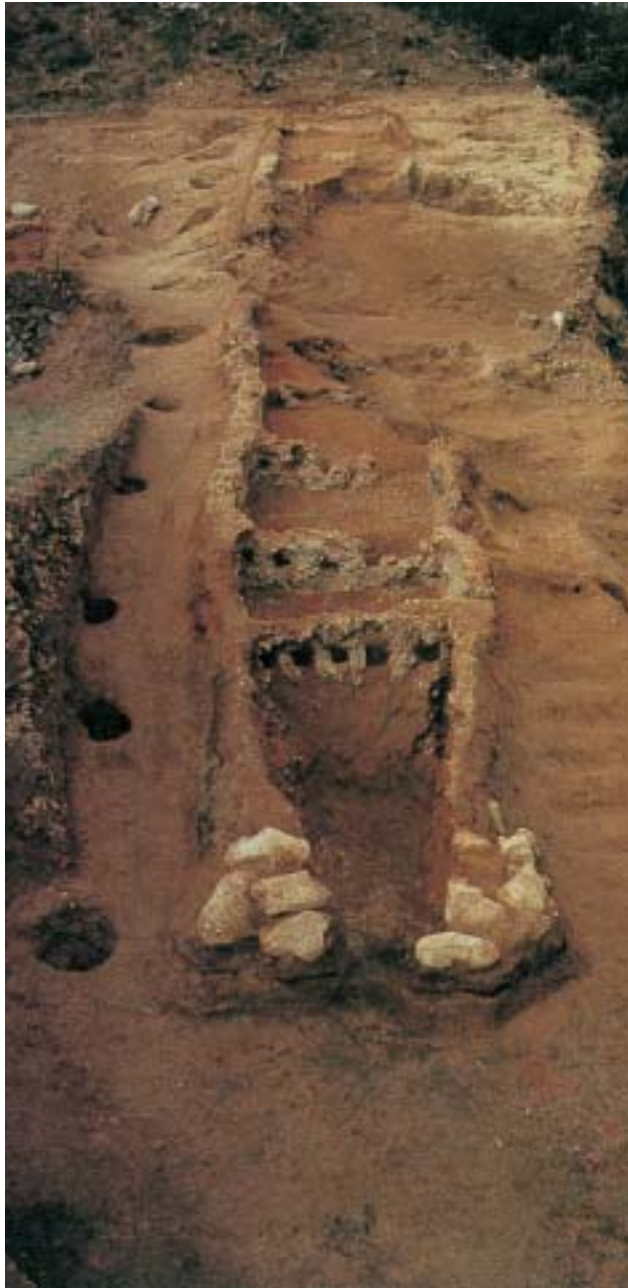
その後、友信神楽は、代々継承され、昭和

48年(1973)には友信神楽保存会が設立され、勝間田八幡宮大祭や、地方の秋祭りにこの舞いを奉納するだけでなく、県内はもとより近県の神楽大会に出場するなど、振興と継承に努めている。

神楽は早い調子(6調子)で、笛の音、神がかりの清爽な悪魔退治の祈願を込めた場面などは、友信神楽独特のもので、曲目は10数種あり、中でも「塵輪」「鍾馗」「大蛇」は友信神楽の代表的な舞である。

はぎ やき こ よう せき ぐん
萩焼古窯跡群

- 指定年月日/昭和56年12月11日 ● 所有者/個人
- 所在地/萩市大字椿東 ● 指定面積/1,330m²



萩焼古窯跡群は、17世紀初頭から19世紀後半にかけて使用されたと推定される陶磁器窯跡群である。

遺跡は、唐人山の西側山麓に開けた通称「坂の浴」^{えき}に立地し、その周辺は水田や夏柑畑として開墾されている。

窯跡は浴口部斜面、北面から南東方向に約100mの範囲にかけて3基、さらに坂家敷地内1基の計4基が遺存している。このうち3基は水田開作などによる土砂採取のため、窯本体の1部が壊滅あるいは水田下に埋没したものである。付近に点在する物原^{もの はら}には成品として焼かれた陶磁片はもとより、各種の窯道具が多量に埋存し、萩焼の細かな技法や「御用窯」の実体を知ることができ、萩焼の歴史的解明にとっても重要である。

す さ から つ こ よう せき ぐん
須佐唐津古窯跡群

- 指定年月日 / 昭和59年11月2日
- 所有者 / 萩市ほか
- 萩市大字須佐



須佐唐津古窯跡群は、須佐湾の南東にある犬鳴山の山麓、唐津地区の西側斜面上に三基並んで築造された登窯である。築窯の新しいものから一号窯・二号窯・三号窯と呼ばれている。窯には合成樹脂による崩落防止の保存処理が施され、最古の三号窯は鉄骨・スレートの覆屋により保護されている。開窯時期は不明であるが、江戸時代初期から大正時代末期まで使われていた。

堆積していた陶磁器類からは国産として最も早い陶磁器が見られるほか、渡来した朝鮮陶工の技法を受け継いだ江戸初期の陶器が見られる。



あな かん のん こ ぶん
穴観音古墳

- 指定年月日/昭和60年10月29日
- 所有者/宗教法人 禅林寺ほか
- 所在地/萩市大字高佐下



穴観音古墳は、高佐盆地の中央部東域に張り出した山脚と独立丘陵間の南斜面（標高約350 m）に位置する。6世紀から7世紀初頭に築造されたと見られ、横穴式の石室の上に四角形の墳丘を築いた特色のある方墳である。県内に残存する同型のものは3か所で、時代的にも地域的にも他に類のない重要なものである。墳丘の規模は東～西辺12.8m、南～北辺13.5m、高さ7.8m、石室全長8.06m、玄室の長さ3.1m、玄室幅1.78～2.22m、中心部高2.2mで、副葬品は出土されなかった。被葬者は不明であるが、方墳は島根県一帯に多く見られることから、出雲地方と何らかの

かかわりを持ち、この地方を統治した有力者の墓と推定されている。

遺物は、玄室（遺骸を納める部屋）内から勾玉1点、羨道部（玄室への道）及び墳丘南西隅部から須恵器の破片がそれぞれ1点出土した。また、墳丘築成の盛土を行った当時に混入した弥生土器の破片や石鏃^{せきぞく}が出土している。江戸時代末期に編さんされた「防長風土注進案」に「塚穴」として記載される等、早くからその所在が知られており、横穴式石室内に祀られた観音石仏に火吹竹を供えて耳の病氣完治を祈願する参拝者が絶えない。

おおいた やま

せい てつ い せき

大板山たたら製鉄遺跡

●指定年月日/昭和63年11月25日 ●所有者/萩市

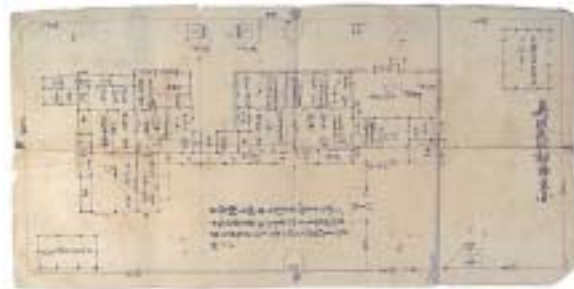
●所在地/萩市大字紫福 ●指定面積/6,458m²

この遺跡は、元小屋・高殿・砂鉄掛取場・鉄池・鍛冶屋等の主要施設の遺構がよく保存されており、県内最大である。我が国の伝統的な製鉄方法は、鉄の原料である砂鉄と燃料の木炭を炉に入れ、ふいごを用いて行う。この時に使う炉を「たたら」と呼ぶ。

「砂鉄七里に炭三里」と言われ燃料の木炭を豊富に生産できる大板山に立地し、また、砂鉄は島根県の三隅町（現 浜田市）から北前船を利用し、奈古港経由で搬入した。ここで作られた鉄は、幕末に萩藩が建造したことで有名な軍艦「こうしんまる庚申丸」にも使用されている。

おく あ ぶ さい ばん かん ば あと
奥阿武宰判勘場跡

- 指定年月日/平成15年4月4日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字吉部上
- 指定面積/1,755m²



奥阿武宰判勘場は、江戸時代の幕藩体制下に置く萩藩の郷村支配行政組織の一つとして創設されたもので、吉部・高佐・片俣（現萩市むつみ）鈴野川・弥富・須佐（現萩市須佐）小川・田万・江崎（現萩市田万川）惣郷・宇田・木与・宇生賀・福賀（現阿武町）蔵目喜・生雲・地福・嘉年・徳佐（現阿東町）の村々を管轄地域としていた。

勘場には、代官のもとに宰判内の名望のある者の中から任命される大庄屋とその下に恵米方・算用師その他の役があり、それぞれ民間から選ばれて、民政や年貢をはじめとする

税、治安及び産業の振興などの執務を勘場役人として行っていた。

むつみ地域の中心にそびえる権現山（標高472m）南麓に東—西58～64m、北—南20～22mのほぼ長方形に造成された勘場の敷地は、面積約1,300m²（約390坪）に及ぶ。その南面（前面）には、精巧に組み上げられた高さ5mを越える石垣が残り、井戸や貯水池がみられる。

勘場跡は、幕藩体制時代の政治・経済・文化等を解明していく上で、大変貴重な歴史遺産である。

こ うち おお 河内の大ムク

- 指定年月日/昭和41年 6 月10日 ● 所有者/個 人
- 所在地/萩市大字椿 ● 指定面積/608.26m²



河内の大ムクは、ＪＲ萩駅の南方約３kmに位置し、椿河内地区の大屋川沿いに泰然自若とした大木２樹をみることができる。２樹のうち大きい方は目通り周囲6.21m、根回り11.50m、高さ28mに達している。幹周では山口市小古祖の須賀神社のものとともに県内最大であるが、本樹の方が樹高もあり、下枝が下垂して美しく、老樹であることを示して

いる。小さい方は目通り周囲4.6mで、両樹とも樹上にフウランやノキシノブの着生をみることができ、やはり巨樹として有数のものである。

ムクノキはニレ科に属し大木となる。古来エノキとともに神の依代よりしろとして家の東北、道の分岐点、集落の入口などに植栽され保護されてきたので各地に巨樹が多くみられる。

き べ はち まん ぐう 吉部八幡宮のスギ

- 指定年月日/昭和53年12月22日
- 所有者/宗教法人 吉部八幡宮
- 所在地/萩市大字吉部上



吉部八幡宮は、延長8年（930）豊前国宇佐宮より吉部宮ノ原に勧請され、その後建久年間（1190～1198）に現在地亀尾山に奉遷されたと伝えられている。吉部八幡宮の境内の参道を登ると、中段の参道の左右に2本、上段本殿に向かって右側に1本、計3本のスギがある。スギの樹齢は約500年と推定され、近郷には見られない巨木である。

本殿に向かって

- 中段参道左側のものは、
目通り周囲6.9m・樹高約33m
- 中段参道右側のものは、
目通り周囲6.7m・樹高約31m
- 上段本殿右側のものは、
目通り周囲6.3m・樹高約34m

であり、いずれも樹勢は旺盛であるが、中段参道右側のものは梢の部分が少し枯れている。

国指定・県指定とも全国的にみて、目通り周囲7～8mのものが最も多く、このスギは必ずしも最大級とはいいい難いが、一社地にこのような巨木が3本揃っていることは珍しい。

さん み よし ひろ 三見吉広のバクチノキ

- 指定年月日/昭和55年12月5日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市三見



このバクチノキは三見吉広の道路沿いに位置し、通称「森様」と呼ばれ、傍らには小祠がある。四季を通じて濃緑の葉を茂らせ、半円形のみごとな樹冠を形成している。目通りの幹周2.3m、地際の幹周2.5m、樹高17m、枝張りは東西・南北とも約18mである。

祠の銘は「宝暦五年（1755）乙亥六月十五日」とあり、古くから信仰の対象であった

ことがわかり本樹もその当時から存在していたものと思われる。

バクチノキは、バラ科、サクラ属の常緑樹である。成長するにしたがって樹皮が次々に剥落し、剥落面は光沢のある黄赤色を呈するので特異な樹膚となる。バクチノキの名は樹皮の脱落するありさまを賭博に負けた者の脱衣になぞらえたものである。

し づ き や ま じん じゃ 志都岐山神社のミドリヨシノ

- 指定年月日/昭和56年 3 月24日
- 所有者/宗教法人 志都岐山神社
- 所在地/萩市大字堀内



ミドリヨシノは、萩藩主7代重就^{しげ たか}が参勤交代の際に持ち帰ったと伝えられるサクラで、国内では萩市でのみ成育が確認されている希少種である。大正11年（1922）と昭和4年（1929）に植物学者の二階重楼^{にかいじゅうろう}（1859～1932）からこのサクラの同定を依頼された東京大学の本田正次博士は、これをソメイヨシノの変種と認め、ミドリヨシノ（*Prunus yedoensis* var. *Nikaii* Honda）と命名した。学名には二階の名前が入れられ、昭和4年（1929）に

送った標本がミドリヨシノの基準標本となっている。

指定木は、根元の周囲約1.7m、幹は下部から三分岐し、主幹の目通り周0.8m、樹高約6mで、指月公園（国指定史跡萩城跡）内の志都岐山神社参道、旧明倫館遺構万歳橋東側にある。花は代表的なサクラのソメイヨシノに似ているが、がくが緑色であることからミドリヨシノと名付けられた。花は純白で、遠くから見ると梨の花のように見える。

た ま がわ ちゅうじょう せつ り すい ちゅう じ は さい よう がん
 田万川の柱状節理と水中自破碎溶岩

- 指定年月日/平成10年4月14日 ● 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字上小川東分 ● 指定面積/5,248m²



平成3年(1991)、^{うえ}上の原から^た田添に至る道路工事中に玄武岩柱状節理が現れた。この玄武岩柱状節理は、阿武町福賀のイラオ山が火山活動をしていたころ、川に流れ込んだ玄武岩を主とする溶岩が、急に冷えたために固まりながらひび割れてこのようになり、その後、土地が盛り上がり今のように高いところに位置するようになったと考えられている。地層の重なり方を見ると、溶岩が水中に流れ込み、柱状節理ができあがったことがよくわかる。柱状節理は大きくカーブしており、全体が巨大な球状になっていたことを示している。

また、基盤となる「^{あんざんがん}安山岩」があり、その上に川だったことを示す「^{れき}礫の層」と「砂の層」が重なり、そこへ玄武岩が流れ込み「水



に反応して砕けた層」(溶岩の水中爆発による^{はさい}破碎)が薄く^{おほ}覆い、その上の玄武岩が柱状節理を形成したということが順を追ってわかる「^{るとう}露頭」は全国的にも珍しく、山口県内唯一の貴重なものである。

つじ やま 辻山のシダレザクラ

- 指定年月日/平成11年4月6日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字高佐上



高佐上辻山の林道を登って行くと、杉林の中に1本の桜の巨木がある。現在は山林となっているが、矢島家の旧宅があった場所であり、かつてその庭に植えられたシダレザクラがある。

樹形は、樹高15.8m、主幹の目通り幹囲は2.26m、ほぼ均整の取れた傘形であり、樹齢は約300年と推定されている。

このシダレザクラは、エドヒガンの枝垂れ

性の品種で、原産地が日本・韓国・中国であるといわれており、江戸前期の貝原益軒は大和本草で「糸桜唐より来たる…」としているようだが定かではないようである。古来から寺院に多く植えられ、優雅で寿命が永く、大木になることから天然記念物に指定されるものが多く、この地は、土地が適湿・肥沃であることから将来さらに大きく成長することが期待されている。

きゅう す う け なが や もん

旧周布家長屋門

● 指定年月日/昭和37年 1 月11日 ● 所有者/萩 市

● 所在地/萩市大字堀内 ● 員数/ 1 棟



周布家は、萩藩永代家老益田家の庶流で、石見国周布郷の地頭職として周布村に住し、周布を氏としたところから始まる。藩政時代は大組士の筆頭として1,530石余の知行地を長門市渋木に領していた。

この長屋門は同家萩屋敷の表門として、平屋建本瓦葺の建物で、東西の桁行24.91m、東端から北に折れ曲がった部分の桁行11.2m、

梁間は3.96mの道路に沿った長い建物である。

中央から東寄りの所に2.46m幅の門を構えて開き扉を設けている。建物の外観は腰部を下見板張りとし、基礎に見事な切石積みがあり、上部は白漆喰大壁造である。この長屋門は江戸中期の代表的な武家屋敷長屋の様式を残している。

へい あん ばし
平安橋

- 指定年月日/昭和37年 1 月11日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字堀内、平安古町
- 員数/ 1 基



この橋は、萩城三の丸の3か所の総門（北・中・平安古）の一つである平安古の総門前の外堀に架けられている石橋である。平安古に通じている橋という所から平安橋と呼ばれ、城下町から三の丸へ入る南の通路の一つとなっていた。

橋は玄武岩で造られており、吊り桁・定着桁を備えたゲルバー桁橋の構造を持った無橋

脚の珍しい橋である。橋桁は全長6.04m、幅3.95m、堀底からの高さ2.5mである。

慶安5年（1652）の萩城下町絵図には木橋として描かれているが、城下の新堀川（しんぼりがわ）に架かっている石橋がいずれも明和年間（1764～71）に構築されているところから同時期に石造に架け換えられたものと思われる。

とい だ ます だ し きゅう たく ど べい
問田益田氏旧宅土塀

- 指定年月日/昭和37年12月24日 ● 所有者/個人
- 所在地/萩市大字堀内 ● 員数/1棟



問田益田家は永代家老益田家の分家筋にあたり、給領地（4,096石）を問田（現 山口市）に持っていたのでこう呼ばれた。

この土塀のある堀内地区は旧萩城三の丸にあたり、高い土塀を巡らした重臣たちの屋敷が建ち並んでいた所で、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。この地域には土塀が数多く残っているが、なかでも延長231.7mある問田益田氏旧宅土塀は往時の姿

を最もよくとどめている。

土塀の構造は下部の石垣部と上部の塗壁に分かれており、石垣部分は高さ約1.0m、幅1.1m、上部の塗壁部分は高さ1.45m、幅0.8m、本瓦葺^{ほんかわらぶき}の堂々たるものである。藩政時代この一帯の塀壁はすべて白壁で天気の良い日にはまばゆいほどであったと伝えられている。

きゅう ふく はら け しょ いん
旧福原家書院

- 指定年月日/昭和42年12月25日
- 所有者/宗教法人 志都岐山神社
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/ 1 棟



福原家は厚狭郡宇部（現 宇部市）に給領地（11,314石余）を持ち、萩藩の永代家老として代々重きをなしていた。

この建物は、堀内（三の丸）にあった萩屋敷内の書院で、明治15年（1882）に志都岐山神社の社務所として移されたものである。

屋根は寄棟造^{よせむね}棧瓦葺^{づくりさんかわらぶき}、桁行^{けた}10.57m、梁間^{はりま}7.1mで北面に棧瓦葺^{ひさし}の庇をつけている。

内部は全体を2つの部分とし、上段10畳

の間を桜の間と呼び書院床・書院窓を設けている。床は、幅が広く奥行きの浅い典型的な書院造である。下段10畳の間は紅葉の間と呼ばれ、それぞれの襖^{ふすま}に有地含章筆^{ありぢがんしょう}になる桜と楓の絵が描かれている。建築年代は、天明年間（1781～88）ごろと思われるが、当時の重臣の住居を知る上で貴重な建物である。

こ がわ け なが や もん
小川家長屋門

- 指定年月日/昭和46年 3 月26日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字土原
- 員数/1 棟



小川家は萩藩の大組士（500石）で、藩政末期の当主小川^{あさのすけ}厚狭佐は慶応元年（1865）から明治元年（1868）までの3年間萩町奉行を勤めた。

この長屋門は同家の表門で、木造平屋建入母屋造^{いり}棧瓦葺、桁行^も27.39m、梁間^や6.0mのかなり長い建物である。

門構えはほぼ中央付近に幅2間の通路があ

り、正面から1.5m入った所に冠木を架け、入口は袖壁付きの観音開きになっている。内部は通路の南側に8室と濡れ縁があり、北側には土間をはさんで6室がある。道路に面した西側には5か所の出格子窓があり、腰部は下見板張りとし、上部は外大壁である。屋根および妻部分は南端は雄大な入母屋造りで、北端は後に改造した跡がある。

りゅう ぞう し かん のん どう
龍蔵寺観音堂

- 指定年月日/昭和46年 3 月26日
- 所有者/宗教法人 龍蔵寺
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/ 1 棟



白牛山龍蔵寺は、寺伝によると天平年間（729～748）に行基ぎょうきを開山として創建されたといわれている。応安年間（1368～74）山口の香積寺こうしゃくじに往山中しゅう べい す かいの石屏子介いっぺいすかい禅師がその退廃を嘆き、寺家を再興して臨済宗に改め、鎌倉の建長寺に属した。

この堂の建造年代は中世ごろと推定されており、形式は木造平屋建宝形造本瓦葺、桁行・

はり ま 梁間とも6.46mで、全体が素木造しら き づくりの丸柱である。正面入口には、建物に比べて大きめの唐破風は ふをつけた向拝を作っているため、入口は雄大な感じを与えている。

明治年間の修理の際に造られたと思われる板囲いがしてあり、現在は覆い堂おおの形式を持っているといえる。萩に現存する最古の建物で、構造的にも優秀なものである。

はなの え ちゃ てい
花江茶亭

- 指定年月日/昭和48年2月13日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/1棟



花江茶亭は、安政の初め（1854）ごろ、
13代藩主毛利敬親^{たか ちか}が三の丸内の橋本川沿い
にあった花江御殿^{はなのえ ご てん}（川手御殿・常盤江御殿^{とき わ え}）
内に造った茶室である。幕末の多事多難の
おり、この茶室で敬親は支藩主や家臣たちと茶
事に託して時勢を論じ、国事を画策したとい
われている。

明治2年（1869）に長屋氏に譲渡された

が明治22年（1889）ごろ品川弥二郎らが主
唱してこれを買取り、指月公園内の現在地
に移築した。

建物は木造平屋建入母屋造茅葺^{いり も や づくり かや ぶき}で、桁行^{けた ゆき}
6.95m、梁間^{はり ま}3.38m、本床と脇床がついた
4畳半の茶室と、3畳の水屋からなっている。
移築の際湯殿と便所は取り除かれ、瓦葺^{かわらぶき}の平
屋1棟が控の間として増築された。

めい りん かん い こう
明倫館遺構かん とく もん
観徳門

- 指定年月日/昭和48年 2 月13日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字江向
- 員数/ 1 棟



観徳門は、旧藩校明倫館の遺構で、孔子を祀った聖廟の前門である。明倫館の正門（南門）と聖廟との中間に位置し、泮水に架かる万歳橋を渡り、聖廟を巡らす石柵内への入口になっていた。

形式は木造瓦棒銅板葺、左右に唐破風を備えた平唐門で、桁行2.5m、梁間1.45m、両袖に連子格子の塀をつけている。出入口は一間一戸、扉は上部に連子を入れた棧唐戸で両

開きになっている。

全体に木鼻や操形が多く、装飾的要素が目立ち、構造的にも大仏様や禅宗様の要素を持つ珍しいものである。建築年代は、新明倫館が再建された嘉永2年（1849）で、本願寺萩別院に移されて客殿門となっていたが、昭和57年（1982）3月、明倫館の旧地である明倫小学校敷地内に移された。

めい りん かん い こう
明倫館遺構せい びょう
聖廟

- 指定年月日/昭和48年2月13日
- 所有者/宗教法人 海潮寺
- 所在地/萩市大字北古萩町
- 員数/1棟



藩校明倫館の聖廟の遺構は、現在、総源山海潮寺の本堂となっている。海潮寺は明治7年（1874）に山門と蔵とを残して焼失したため、この聖廟を買収して翌8年（1875）秋に移築し、本堂として再建した。

藩政時代、全国の藩校では構内に壮大な聖廟を造営し、孔子を学神として祀るのを理想としていた。明倫館もその例にもれず、嘉永

2年（1849）江向に再建された時、敷地の中心部に南面して造営され、宣聖殿と称した。

建物は木造平屋建入母屋造本瓦葺で桁行17.28m、^{はりま}梁間9.6m、中央部正面に入母屋造り本瓦葺きの入口のある前室が張り出している。聖壇には孔子の木主を祀っていた。全体としてよく旧態を保ち江戸時代末期の聖廟建築として貴重なものである。

めい りん かん い こう なん もん 明倫館遺構 南門

- 指定年月日/昭和48年 2 月13日 ● 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字江向 ● 員数/ 1 棟



南門は嘉永 2 年（1849）に江向に新築された新明倫館の正門として、弘化 5 年（1848）正月に建てられたものである。明倫館全体からみて南にあたるので南門と名付けられたが、通称表御門と呼ばれていた。明倫館の敷地の外側には溝が巡らされており、その溝から南門までの間は、東西に長い馬場になっていた。

門は切妻造本瓦葺で桁行3.93m、梁間3.09mの間一戸の四脚門で、左右に袖があり、

潜門くぐりもんがついている。明倫館正門時代には入口の上部に扁額が掲げてあった。額の体裁は「明倫館」と浮彫りされ、白地に黒字である。

本願寺山口別院に移され正門となっていたが、平成15年 2 月、萩市へ寄附され、旧地である明倫小学校敷地内へ移築した。

なおこの門は、藩主が聖廟せいびょうを拝する春秋の「釈菜せきさい（孔子祭）」や公式行事以外は開けられなかった。

めい りん かん い こう
明倫館遺構ばん せい ばし
万歳橋

- 指定年月日/昭和48年2月13日
- 所有者/宗教法人 志都岐山神社
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/1基



嘉永2年（1849）江向の地に新築された明倫館には、多くの藩校と同じように聖廟の前に泮水^{はんすい}を巡らして、その中央に石橋が架けてあった。泮水は頼池^{はん}ともいい、中国上代の形式を模倣したもので、諸侯の学校であることの象徴である。泮は半と同じ意味で、聖廟周囲の南半分にしか水がないことを意味している。この池は藩校によっては半円形のものもあるが、明倫館は半矩形であった。

橋は花崗岩^{かこうがん}で造られており、万歳橋と名付けられていた。長さ4.05m、幅員3.15mの直橋で橋脚はなく、兩岸の石垣の橋台に2本のアーチ式橋桁^{はしげた}を渡し、その上に10箇の短冊石^{ざくいし}を横に並べて造られており、高欄の橋柱は左右5本ずつとした太鼓橋（反橋）である。橋を渡る前の短冊石は失われ、別の玄武岩^{げんぶがん}の石が置かれている。

めい りん かん い こう
明倫館遺構せい けん どう
聖賢堂

- 指定年月日/昭和58年 3 月19日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字江向
- 員数/ 1 棟



聖賢堂は、藩校明倫館^{せいびやう}の聖廟前、観徳門の左右にあった東塾・西塾の遺構である。

明倫館廃校の後、両塾を合わせて1棟とし、市内東田町の阿呼社境内に移築されていたが、大正7年（1918）に再び元の地の明倫館跡へ移された。

建物は木造平屋建^{きりづまづくり}切妻造^{むく}、起り屋根^{さんかわらぶき}棧瓦葺^{はりま}で桁行^{けたゆき}7.68m、梁間^{はりま}2.86mである。

大棟の両端には一文字三星^{いちもんじみつぼし}の毛利家紋の棟

瓦が載せてあり、当時の面影をとどめている。

外観は南側に4か所、西側に2か所の火燈^{かとう}窓^{まど}があり、北側には後に庇^{ひさし}をつけた入口を設けている。内部は畳敷き10畳半と板敷1畳半があり、当時は聖廟で行われる釈菜^{せきさい}（孔子の祭）の道具などを納めたり、その準備に使ったところでもある。

はしのぼうしょうろう
端坊鐘楼

- 指定年月日/昭和49年3月23日
- 所有者/宗教法人 端坊
- 所在地/萩市大字恵美須町
- 員数/1棟



松林山端坊は、慶長13年（1608）に毛利輝元てるもとの意向によって建立された浄土真宗本願寺派の寺である。鐘楼は貞享3年（1686）3代藩主吉就よしなりが初入国にあたり、時鐘用として寄進建立したもので、修理は藩が行うが、年々現米15石を扶持して常に2名の鐘撞を置き、諸士から時鐘料を徴収した。

建物は木造入母屋造で、一層は本瓦葺ほんかわらぶき、

上層は棧瓦葺さんかわらぶきの二層三階の造りである。1階・2階は桁行・梁間ともに6.24m、3階は桁行・梁間ともに3.94mである。内部は1階は土間、2階・3階は板の間造で、松を用いた素木造しらきづくりである。

享保9年（1724）に鐘楼の上にさらに望楼が設けられたが、この部分は昭和15年に取り除かれた。

えん せい じ ない こん び ら しゃ しゃ でん

円政寺内金毘羅社社殿

つかり いしとり い さんもん いしとうろう
附 石鳥居・山門・石灯籠

- 指定年月日/昭和51年 6 月10日
- 所有者/宗教法人 円政寺
- 所在地/萩市大字南古萩町
- 員数/ 1 棟



金毘羅社の建立年は不詳であるが、入口に金毘羅社に寄進された鳥居が建っており、それに延享2年(1745)と彫られている点や天保年間(1830~43)に編纂された「八江萩名所図画」に現在の社そのままの姿が描かれていることなどから、少なくともそのころには建立されていたと思われる。

本殿は木造切妻造檜皮葺で桁行1.73m、梁間1.2m、主な用材はケヤキ、柱は丸柱である。

釣屋は桁行5.41m、梁間5.1mの棧瓦葺で、内部は畳敷きである。

拝殿は一重装階付、入母屋造本瓦葺、前面庇は檜皮葺、用材はケヤキ、柱は丸柱で、唐

破風の桁行4.0m、梁間6.1mの本県独特の楼造風である。このように社殿が地方色の濃い古い建物であることや神仏習合の形態が今でもみられる点で貴重な遺構である。

石鳥居は花崗岩製で高さ2.8m、様式は明神鳥居で笠木・島木に反りがあり、柱には転びがあり、柱頭部には台輪がついている。建立年代は延享2年(1745)である。

山門は桁行2.42m、梁間1.34mの棟門形式で本瓦葺、両袖に1.35mの潜門がついている。建築年代は不明である。

石灯籠は玄武岩製で高さ4.3m、さらに77cmの4段の台座上に立ち、県下最大のも



▲石鳥居

のである。竿の部分の竜の高彫はすばらしく、高さ1.14m、直径52cmである。製作年代は安政5年（1858）で萩の石工五嶋吉平恒徳、同山中武祐利豊の共同制作であり、付近の町人たちが寄進したものである。



▲石灯籠



▲山門

まつ ざき はち まん ぐう いし とう ろう
松崎八幡宮石燈籠

- 指定年月日/昭和51年12月16日
- 所有者/宗教法人 松崎八幡宮
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/36基



松崎八幡宮の社前に立ち並ぶ石燈籠は、益田家第25代就恒（元禄5年）をはじめ、益田親施（安政2年）など、益田家歴代の領主が江戸参勤から帰国の度に奉献したものである。当時の建造技術や彫刻技術を推測する資料として、また歴史的資料としても価値が高い。

燈籠は社殿に向って左側16基、右側16基が、高さ2.1mを保ち建立当時を物語るかのように参道に立ち並んでいる。

かさまつ じん じゃ いし とう ろう 笠松神社石燈籠

- 指定年月日/昭和51年12月16日
- 所有者/宗教法人 笠松神社
- 所在地/萩市大字須佐 ● 員数/10基



この石燈籠は、益田家第33代親施^{ちかのぶ}を高正大明神として祀った笠松神社の参道にあるもので、元治元年（1864）11月12日、禁門の変の責任をとって徳山の惣持院で切腹し32歳の生涯を閉じた主君親施を思い、家臣が奉納したものである。社殿に向かって両側に高さ2.25mの石燈籠が3基ずつ建てられ、燈籠の足には「元治四年丁卯八月吉辰」と実在しない年号が刻まれている。これは、幕府の行った慶応への改号に反抗するもので、主君の悲憤を思い、また主君を偲ぶ家臣団の気概がうかがわれる。

昭和52年9月30日には、社殿に向かって両側に2基ずつ建てられた高さ2.57m、2.18mの石燈籠を追加指定した。

かさまつ じん じゃ とり い 笠松神社鳥居

- 指定年月日/昭和52年9月30日
- 所有者/宗教法人 笠松神社
- 所在地/萩市大字須佐 ● 員数/1基



笠松神社は益田家第33代親施^{ちかのぶ}を祀り、親施の霊を高正大明神とした。主君の悲憤を思っ、慶応の改号を認めず実在しない年号を刻んだ反骨の気概を示した鳥居であり、当時の故主君を偲ぶ家臣団の憤慨を思わせるものとして、燈籠とともに貴重な建造物である。鳥居は社殿の正面高さ約6m、足に「元治三年丙九月 一基旧益田家 家臣団」という銘がある。

こう とく じ さん もん
 亨徳寺三門

- 指定年月日/昭和52年10月11日
- 所有者/宗教法人 亨徳寺
- 所在地/萩市大字北古萩町
- 員数/ 1 棟



亨徳寺三門は「上梁銘」によると、元禄 8 年（1695）浜崎町の町人山県十左衛門幸雅の建立によって寄進されたもので、大正10年（1921）に一山堂宇が火災にあったが、門は罹災を免れた。形式は三間三戸の楼門で、屋根は入母屋造^{いりも やぶくりさん}棧瓦葺^{かわら ぶき}、桁行^{けた ゆき}6.67m、梁間^{はり ま}3.64m、軒高^{のき たけ}5.26m、棟高^{むね たけ}8.7m、上階周囲に高欄付の縁を巡らしている。禅宗楼門として組手の一手を広くとり鏡軒^{かがみのき}小天井^{こ てん じょう}を組入れた技法に地方色的な特徴があり、軒廻りや柱間装置などの意匠もよく整っている。建立年代が明らかな遺構として貴重である。

おく だいら け なが や もん
奥平家長屋門

- 指定年月日/昭和54年 2 月23日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字土原
- 員数/1 棟



奥平家は、萩藩の中級武士として大組（300石）に属していた。この門は同家の表門で西に面し、寄棟造^{よせむねづくり}棧瓦葺^{さんかわらぶき}、桁行^{けたゆき}26.65m、梁間^{はりま}5.0mの長い建物である。

門構えは中央からやや南に片寄って幅3.87mの通路があり、入口は袖壁付き片引板戸を建てている。内部の部屋は通路の南側に3室と土間・板の間があり、通路の北側には床や

仏壇構えのある部屋など9室と土間および縁がある。

道路に面した西側には4か所の出格子窓があり腰部は下見板張りとし、上部は外大壁である。

建築年代は技法などからみて、江戸時代末期のものと思われるが、門構えや出格子など当初の形態をよく残している。

おお じも あ み だ どう ない す し
大下阿弥陀堂内厨子

- 指定年月日/昭和55年 3 月31日 ● 所有者/大下地区
- 所在地/萩市大字佐々並 ● 員数/ 1 基



この厨子は六所権現宮の本地仏であった阿弥陀如来像を安置する厨子である。

構造は、桁行も梁間も柱間が1つの一間四面、屋根は入母屋造で、小さい板でふく柿葺という形をとっている。柱はすべて円柱で、頭貫という上部の水平材の木鼻には大仏様(天竺様)の操形を施し、長押を打ち、大輪の上に禅宗様(唐様)の三手先という斗拱を組み、

軒は二重、二軒で、極を密にした繁極の手法を用いている。正面入口は藁座を造り、扉は棧唐戸、側面と背面には板を横張りにはめ込んでいる。桁行83cm、梁間73cm、高さ2.22mと小規模であるが、和様を基調に禅宗様と大仏様を取り入れた折衷様式の整った建造物である。

なん みょう じ かん のん どう
南明寺観音堂

- 指定年月日/昭和55年 9 月19日
- 所有者/宗教法人 南明寺
- 所在地/萩市大字椿
- 員数/ 1 棟



日輪山南明寺は、寺伝によると平安時代の
大同元年（806）に創建された真言宗の修験
寺で、後に天台宗に改宗し、毛利家の祈願寺
として栄えた。

標高300mの南明寺山中腹の奥の院にある
当観音堂は桁行・梁間ともに3間の宝形造棧
瓦葺である。内部は一間四方に四天柱を建て
ているが、1室造で外周りに濡れ縁を巡らし
ている。

建物の縁回りや造作の一部および屋根に後
補の箇所がみられるが、主要部はほとんど当
初のものである。殊に正面の簷股や頭貫およ
び垂木・木鼻の操形は意匠が優れており、こ
の地方では数少ない貴重な遺構である。なお、
建築年代は「日輪山」の扁額に「寛文三卯
（1663）年云々」とあるのでほぼそのころの
ものと思われる。

ぎょくせん じ び しゃ もん どう ない ず し
玉泉寺毘沙門堂内厨子

- 指定年月日/昭和57年 1 月28日
- 所有者/宗教法人 玉泉寺
- 所在地/萩市川上
- 員数/ 1 基



この厨子は、寛文11年（1671）生福寺境内に毘沙門堂が再建された際に、宍戸就宗が毘沙門天立像とともに寄進したと伝えられる唐様厨子である。

生福寺は廃寺となったため、大正11年に建立された玉泉寺境内の毘沙門堂に移された。この時、厨子が堂内に入らないため、厨子の屋根の上部と屋根の端を切除している。

なお、厨子には毘沙門天立像と脇立吉祥天女像、脇立善日童子像が安置されている。

ます だ やかた
益田館

- 指定年月日/昭和57年2月26日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/1棟



関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元^{てるもと}に従って須佐に移った益田家第20代元祥^{もとよし}は、慶長8年(1603)に三宅(島根県益田市)にあったお土居(屋敷)の別館を解体して船で運び、移築して館(居宅)とした。現在の益田館は、明治7年(1874)に改築されたもので、藩政時代に比べ半分ほどに縮小され、表門や付属屋は失われているが、主屋と四脚門^{しきやくもん}棧瓦葺^{さんかわらぶき}

の中門が遺存している。

主屋は式台を設けた玄関のある座敷とこれに続く部屋、土間があり、座敷部分は木造平屋建入母屋造^{いりもやづくり}棧瓦葺^{けたゆき}で桁行11m、梁間10m、居室部分は木造平屋建(一部二階)切妻造^{きりづまづくり}棧瓦葺^{さんかわらぶき}で桁行22m、梁間14mである。座敷から居間へは廊下で通じている。

いく えい かん もん

育英館門

つたひ
附いくえいかん
「育英館」へんがく
扁額

- 指定年月日/昭和58年 3 月29日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/ 1 棟



育英館は享保年間（1716～1735）に益田家第27代元道^{もとみち}が子弟教育のため創立したものである。33代親施^{ちかのぶ}のとき、吉田松陰と親交のあった小国融蔵^{おぐにゆうぞう}を学頭とし、松下村塾との塾生交換が数か月ではあるが行われた。勤皇思想、海防思想を鼓吹し文武を奨励し、松下村塾や萩藩校明倫館とともに、多くの俊才を輩出した。

この門は育英館の門で、一間腕木門^{いっけんうでぎもん}の切妻造^{きりづま}棧瓦葺^{づくりさんかわらぶき}である。



ぶつ こう じ ろう もん
佛光寺楼門

- 指定年月日/平成10年 3月12日
- 所有者/宗教法人 佛光寺
- 所在地/萩市大字紫福
- 員数/ 1 棟



この楼門は、五台山佛光寺文殊堂が再建された寛文年間（1661 72）頃に建立されたと思われる。形式は木造入母屋造茅葺で、桁行3.8m、梁間3.0mである。4基の礎石には、紫福の地頭であった見島氏の名の入った墓石が使われている。



きゅう く ぼ た け じゅう たく

旧久保田家住宅

- 指定年月日/平成15年 6 月27日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字呉服町一丁目
- 員数/ 4 棟



久保田家は、初代庄七が藩政時代後期に近江の国（滋賀県）から萩に入り、熊谷町の久保田家の分家となり、菊屋家の向かいで呉服商を開いたと伝えられている。2代庄次郎の時に酒造業に転じ、造り酒屋の「あらたま酒店」を営業していた。また明治時代、しばしば名士の宿舎としても利用されたと伝えられる。

【主 屋】

主屋の建造年代は明確ではないが、主体部の構造手法からみて幕末頃に建てられたと思われる。大黒柱を中心に、太い差鴨居を縦横に組んで軸部を固めた堅固な造りとなっており、桁行^{けた ゆき}20.7m、梁間^{はり ま}19.8m、切妻造^{きり まづくり}、^{さんかわらぶき}瓦葺、平入り一部2階で町屋である。庭に向いた縁側の手すりなど、それぞれ意匠を凝らしており、近代和風建築の特色が良く表されている。

【離れ】

離れは造作の質が高く良材を用いて丁寧に建てられている。桁行12.8m、梁間19.5m、木造平屋建入母屋造^{いりもやづくりさんかわらぶき}棧瓦葺で、南面、北面に半間の庇を付け、平面は田の字型になり、東北隅の縁側から渡廊下で便所棟が北側に繋がっている。建築年は明治16年頃と思われる。

【土蔵】

土蔵造^{どそうづくり}で、桁行8.7m、梁間4.0m、2階建切妻造^{きりまき}棧瓦葺で西側に入り口を設け、床は1・2階とも板張りとし、床下に石造りの物入れが造られ、算盤を敷いて石造りの蓋を滑らす納まり工夫が施されている。建築年代は明治16年頃と思われる。



▲土蔵



▲内部

【表門】

門は腕木門^{うできもん}切妻造^{きりまき}棧瓦葺、^{さんからと}棧唐戸を吊り込み、西側に潜り戸を設けている。柱は上下に粽が付き、足元に練型付きの礎盤^{ます}を敷き、斗^{さねひじき}、実肘木など全体に装飾を取り入れた意匠でまとめている。

旧久保田家住宅は、幕末から明治前期にかけての建物として、意匠、構造、技術に優れ、酒造業で繁栄した往時の状況をよく伝えており、史跡萩城城下町を形成する建物として極めて重要である。

し ほん ぼく が しゅつ さん しゃ か ず
紙本墨画出山釈迦図

- 指定年月日/昭和55年12月25日 ● 所有者/宗教法人 大蘊寺
- 所在地/萩市大字須佐 ● 員数/ 1 幅



雲谷等顔筆による出山釈迦図である。出山釈迦図とは、山中で苦行を脱し悟りを開いた釈迦が山を下る様子を描いた絵のことをいう。

作者の雲谷等顔は本名を原直治といい、肥前国藤津郡能古見（現 佐賀県鹿島市）城主原豊後守直家の2男として生まれたと伝えられている。毛利輝元から拝領した雪舟の旧居「雲谷庵」にちなんで姓を「雲谷」、また雪舟等揚の「等」を名の一字につけ、以後、雲谷派の絵師たちは、代々その名に「等」の一字を用いた。雲谷派は雪舟の画法を受け継ぎ、江戸の藩邸、藩内外の毛利家ゆかりの寺院などの絵画制作に携わるなど、その名声は西国一円に行き渡り、幕府御用絵師狩野派と並び称される一大流派を形成した。

ちょうしゅう あ ぶ ごおり え づ うら りやく ず
長州安武郡江津浦畧圖

● 指定年月日/昭和56年 6 月15日 ● 所有者/個人

● 所在地/萩市大字江崎 ● 員数/1 枚



この図は、萩藩の直轄地であった江崎浦を描いた絵図である。天然の良港であった江崎浦は、古くから阿武郡18郷の米の積み出し港として栄えた。江戸時代には北前船の寄港地として重要度を一段と増し、米穀・半紙・蠟・鉄・刃金・綿・芋^{からむし}・材木・煙草・油・茶・畳表類・塩・薪・生魚・干魚などが交易された。港の入り口には灯籠堂（灯台）が置かれ、多数の帆船が出入りしている。左上の高山の中腹には海上関係者の信仰のよりどころとなった黄帝社、左下には山口県の有形文化財に指定されている西堂寺の六角堂も描かれている。海上交通を取り締まる御番所（浦交所）また芝居小屋や魚市場もあり、要港として賑わった状況を知ることができる。

けん ぼん ちゃく しょく しゃ か ね はん ず
絹本着色釈迦涅槃図

- 指定年月日/昭和57年 2 月26日
- 所有者/宗教法人 大蘊寺
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/ 1 幅



益田家第20代元祥（牛庵入道）が寄進したもので作者は不明であるが、桃山時代の作と伝えられている。

涅槃図は、釈迦が沙羅双樹の下で涅槃に入る時の、頭北・面西・右脇にして臥し、周囲に弟子を始め菩薩・天竜・鬼畜などが泣き悲しむさまを描いた絵のことをいう。

〔箱書〕

涅槃像者桃林院様御寄附近就破損修補之表具地齡松院様御寄附

右涅槃像左右下三方八相之図書添修補之尤雑用授戒講中助成焉者也

金瀧山十六世圭洲奕代 文化三丙寅歳 仲春穀旦

しほんぼくがちゃくしょくじんぶつかくりゅうず
紙本墨画着色人物鶴龍図

● 指定年月日/平成元年1月24日 ● 所有者/萩市
● 所在地/萩市大字須佐 ● 員数/4幅



この絵画の作者は、萩藩永代家老益田家家臣の永富等原で、1740年代のものと推定される。等原は、別号を海鷗、毛定軒、知足軒といい、その画風や大寧寺（長門市）所蔵の二十八祖の図を雲谷等與や波多野等有と一緒に描いていることから、雲谷等益か雲谷等與に学んだものと思われる。

○ 紙本墨画人物画（人物）

雪舟末裔七十歳等原 落款（毛定軒）

○ 紙本墨画着色画（鶴） 落款（毛定軒）

○ 紙本墨画人物画（龍） 落款（毛定軒）

○ 紙本墨画人物画（人物）

雪舟末裔七十歳等原 落款（毛定軒）

し ほん ちゃく しょく

紙本着色

あし かが よし あき ぞう

足利義昭像

- 指定年月日/平成4年5月28日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字須佐
(萩市立須佐歴史民俗資料館寄託)
- 員数/1幅



この絵画は、萩藩永代家老益田家に伝わるもので、室町幕府第15代将軍で最後の将軍となった足利義昭が描かれている。

作者は狩野元信の弟子崇竺で、永禄5年(1562)の賛がある。

けん ぼん ちゃく しょく

絹本着色

きつ かわ もと はる ぞう

吉川元春像

- 指定年月日/平成4年5月28日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字須佐
(萩市立須佐歴史民俗資料館寄託)
- 員数/1幅



この絵画は、萩藩永代家老益田家に伝わるもので、毛利元就の二男吉川元春が描かれている。元春は益田家第20代元祥^{もとよし}の娘との間に女兒をもうけており、所有者の益田家とは姻戚関係にあった。作製年代は室町末から桃山時代と思われるが作者は不明である。

し ほん ちゃく しょく
紙本着色そく たい てん じん ぞう すう じく ひつ
束帯天神像(崇竺筆)

- 指定年月日/平成4年5月28日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字須佐
(萩市立須佐歴史民俗資料館寄託)
- 員数/1幅



この絵画は、萩藩永代家老益田家に伝わるもので、菅原道真が描かれている。

作者は狩野元信の弟子崇竺で、作製年代は室町末期と思われる。

けん ほん ちゃく しょく
絹本着色そく たい てん じん ぞう
束帯天神像

- 指定年月日/平成4年5月28日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字須佐
(萩市立須佐歴史民俗資料館寄託)
- 員数/1幅



この絵画は、萩藩永代家老益田家に伝わるもので、菅原道真が描かれている。作製年代は江戸時代と思われるが作者は不明である。

し ほん ぼく が じゅう ろく ら かん ぞう
紙本墨画十六羅漢像

- 指定年月日/平成4年6月1日
- 所有者/宗教法人 大蘊寺
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/16幅



十六羅漢像は、雲谷派の弟子家の一つである波多野家の初代等有の作で、元禄から宝永（1688～1711）の間の作と推定されている。益田家第8代兼弼四男兼国子孫波田兼虎（育英館第2代館長）が寄付したもので、天明年間（1781～88）頃から大蘊寺所有となっている。16幅の裏面には1幅ずつ波田家先祖

1名の戒名が墨書してあり、波田の落款が押印してある。

羅漢は阿羅漢（あらはん）の略で、サンスクリット語の「アルハット」を語源とし、悟りをひらいた高僧を指す。釈迦の弟子で特に優れた代表的な16人の弟子を十六羅漢と呼ぶ。

さい ごく さん じゅうさん かのん れい じょう え ま よん ばん ふだ しょ ご ばん ふだ しょ
 西国三十三観音霊場絵馬 (四番札所、五番札所)

● 指定年月日 / 平成11年12月17日 ● 所有者 / 宗教法人 実相寺
 ● 所在地 / 萩市川上 ● 員数 / 2点



この絵馬は、江戸中期の雲谷派絵師、雲谷
 等潤^{とうじゅん}が寛政10年（1798）に描いた千手観音
 の立像と座像の2点の絵馬である。他に類例
 の少ない雲谷派画家による絵馬として貴重で
 ある。

じっ そう じ てん じょう え 実相寺天井絵

- 指定年月日/平成11年12月17日
- 所有者/宗教法人 実相寺
- 所在地/萩市川上
- 員数/80面



この天井絵80面は、幕末期に萩藩のお抱え絵師集団であった雲谷派の5人の絵師が共同制作したものである。

雲谷等溪(等龍)、等球、等守、等勇(等雄)、等玉の5人の絵師により、80面の天井絵には、芍薬、蘭、水仙、桔梗、紅葉など四季の草花木が色とりどりに描かれている。部分的に剥落もあるものの、本堂内で風雨や外光にも晒されなかったこともあり、顔料や色彩の保存状況は、総体的に良好である。

ほっしょう じ ふすま え
発昌寺襖絵

つがひ 附 たかしま ほっかいしよじょういつつう
 高島北海書状一通

- 指定年月日/平成11年12月17日
- 所有者/宗教法人 発昌寺
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数/16面



▲ 柿に秋草図



▲ 夏草花図



▲ 蘭竹図



▲ 松梅図

発昌寺襖絵は、萩出身の日本画家、高島北海（1850～1931）の作品である。

萩出身の宰相、田中義一が開基となった発昌寺の襖絵として描かれ、その後福昌院にて保存、管理されていたが、現在は萩博物館に寄託されている。

「柿に秋草図」4面、「夏草花図」4面、「蘭竹図」4面、「松梅図」4面から成り、いず

れも北海が山岳画とともに得意とした樹木草花の図柄で構成されている。ここには80歳という高齢にもかかわらず、16面の襖の大画面に、老成し熟達した北海の画技が悠々と展開されている。大正期から長門峡を探勝し景勝の開発、紹介に尽力した北海が、そのゆかりの地にある寺院に残した最晩年の力作といえる。

さい ごく さん じゅう さん かん のん れい じょう え ま じゅうばん ふだ しょ
 西国三十三観音霊場絵馬(十番札所)

- 指定年月日/平成13年 8 月20日
- 所有者/個 人
- 所在地/萩市川上
- 員数/ 1 面



この絵馬は、実相寺所蔵の市指定文化財西国三十三観音霊場絵馬（四番札所、五番札所）2面と同時期に雲谷等潤によって製作されたものである。

図様はきわめて素朴なものであり、墨線主体で描かれながら衣や火炎などの部分に朱が、また同様に衣や装身具、蓮弁などに若干の胡粉が施されている。その画風や賦彩は、実相寺所蔵の絵馬と全く同種のものと考えられ、胡粉の剥落が諸所みられるものの、保存状態は良好である。

もく ぞう やく し によ らい ざ ぞう 木造薬師如来坐像

- 指定年月日/昭和46年 3月26日
- 所有者/宗教法人 広厳寺
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/1 軀



広厳寺は花園山と号し、曹洞宗に属しているが、もとは天台宗で永享年間（1429～40）に花園山安養寺として創建され、そのとき薬師堂を建てて薬師如来を安置したと伝えられている。安養寺はその後、荒廃していたが、慶長9年（1604）開山一天大佐和尚により広厳寺として再建された。

像は高さ86.35cm、ヒノキ材の一木造で、左手の掌の上に薬壺をのせ、膝は横木を剥ぎ内刳を施している。以前は、肘の形からみて、阿弥陀如来であったと考えられる。

彩色は後世の補修の際に施されたもので、肉身部分はほとんど剥落して素地を表している。

頭部には螺髪を彫り出し、威厳のある眼の切れの美しさなど面相は優しさの中に力強さをもっている。衣文も流麗で、よく平安期の特色をあらわしている。

もく ぞう ずい しん い ぞう
木造隨身倚像

- 指定年月日/昭和48年 5 月 8 日
- 所有者/宗教法人 松崎八幡宮
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/ 2 躯



両像ともにヒノキ材の一木造で、^{いちぼくづくり}内刻をしていない。両袖、両手首から先、両足首から先（沓部）は矧ぎ付けている。左側の像の右手首から先を欠失している。彩色はしているが剥落が甚しい。室町時代中期の作で、応永29年（1422）の銘がある。

もく ぞう に てん りゅう ぞう
木造二天立像

- 指定年月日/昭和55年 3 月31日 ● 所有者/大下地区
- 所在地/萩市大字佐々並 ● 員数/2 軀



両像ともにヒノキ材の一木造で内削りを施さない古い形式で、肩に両腕を矧ぎ付けているが悉く失われている。両腕が肩から欠けているため定かではないが、多聞天(毘沙門天)と思われる。一体は兜をかぶり、唐様甲をつけており、像高は75cmである。他方は短髻、天冠台を彫り唐様甲をつけ、前者と同じように天部像の一般的な形に作られている。像高は78cm、岩座に立つ形で柄を作ってはめ込む形である。彩色はともに剥落して僅かに胡粉が残っている。

わが国では四天王の信仰が早くからあり、一般的に持国天、増長天、広目天、多聞天が須弥壇の東西南北を守護する形に作られる。県内では山口市黒川の広沢寺、旧大島町三蒲(現 周防大島町)の松尾寺に二天の例があり、これらは一方が口を開く阿形、もう一方が口を閉じる吽形に作られ対をなしているが、この二天立像はどちらも口を閉じた吽形で二天として対をなし、しかも南無阿弥陀仏と書いてあることから、本尊阿弥陀如来の脇侍であったことがわかる。

もく ぞう び しゃ もん てん りゅう ぞう

木造毘沙門天立像

わき だち きつ しょう てん にょ ぞう

脇立吉祥天女像

- 指定年月日/昭和55年12月17日
- 所有者/宗教法人 玉泉寺
- 所在地/萩市川上 ● 員数/ 1 軀



この像は、像高105cmの木像である。

作者は不明であるが、県指定有形文化財毘沙門天立像と同じ時期の作で、鎌倉時代初期の作と伝えられている。

もく ぞう び しゃ もん てん りゅう ぞう

木造毘沙門天立像

わき だち ぜん にち どう じ ぞう

脇立善日童子像

- 指定年月日/昭和55年12月17日
- 所有者/宗教法人 玉泉寺
- 所在地/萩市川上 ● 員数/ 1 軀



この像は、像高105cmの木像である。

作者は不明であるが、県指定有形文化財毘沙門天立像と同じ時期の作で、鎌倉時代初期の作と伝えられている。

もく ぞう しゃ か によ らい ざ ぞう
木造釋迦如来坐像

- 指定年月日/昭和56年 6 月15日 ● 所有者/13区自治会
- 所在地/萩市大字中小川 ● 員数/ 1 軀



この像は、寛政10年（1798）3月6日に木喰上人が弥富村（現 萩市弥富）より友信に入り、3月14日に江崎の六角堂に移動するまで滞在した間に松の生木に彫られたもので、総高は135.2cmである。白髪長身の見慣れぬ旅の僧が生木彫刻をする姿を一目見よ

うと地区の人々が集まって騒いだので、木喰上人は地主の安井家に頼んで松の四方を箆で広く囲んでもらい、その中で像を刻んだという。後に松に刻まれた像を切り取り、友信寺に安置されたが、現在は廃寺となったため、お堂に移されている。

たち き やく し によ らい ぞう
立木薬師如来像

- 指定年月日/昭和60年 3 月19日
- 所有者/宗教法人 願行寺
- 所在地/萩市大字福井下 ● 員数/ 1 躯



願行寺門内の^{かや}櫃の木に、木喰上人によって彫られた像高71.2cmの薬師如来像がある。寛政9年（1797）の作で、左手たなごころの上に薬壺を置き、右手上から覆うようにしている像の光背には悉曇で光明真言が記されている。県内随一の立木仏として重宝されている。別名「耳の薬師様」として崇められ、遠方からのお参りも多い。

もく ぞう
木造

あ み だ によ らい りゅう ぞう
阿弥陀如来立像

- 指定年月日/昭和60年 3 月19日
- 所有者/宗教法人 願行寺
- 所在地/萩市大字福井下 ● 員数/ 1 躯



この像は木喰上人の作で、用材はイチヨウ、像高は34.8cmである。高さ8cmの蓮台の上に立っており、仏体の裏は削りぬいて空洞となっている。やや楕円形の光背には「寛政十年（1798）二月八日成就 八十一才」と記されている。

もく ぞう

木造

えん めい じ ぞう ぼ さつ りゅう ぞう

延命地藏菩薩立像

- 指定年月日/昭和60年 3 月19日
- 所有者/宗教法人 宝宗寺
- 所在地/萩市大字福井上 ● 員数/ 1 躯



この像は木喰上人の作で、用材はイチヨウ、像高は82cmである。背銘に寛政10年（1798）1月24日に完成したことが記されており、願行寺で彫られ後に宝宗寺に移されたことがわかる。右手に宝珠を握り、16cmの蓮台の上に立つ像の顔面は著しく破損しているが、他の部分は原状をとどめている。

もく ぞう

木造

こう ぼう だい し りゅう ぞう

弘法大師立像

- 指定年月日/昭和60年 3 月19日
- 所有者/宗教法人 信盛寺
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数/ 1 躯



この像は木喰上人の作で、用材はイチヨウ、像高は109.29cmである。背銘に寛政10年（1798）2月18日に完成したことが記されている。太い眉、釣り上った眼、肥満した頬で、右手に五鈷杖、左手に数珠を持ち、21cmの台座の上に直立した姿勢は威厳にみちている。木喰上人は寛政10年（1798）2月15日より同28日まで信盛寺に滞在しているので、信盛寺における第1作と考えられる。

もく ぞう こん ごう りき し ぞう
木造金剛力士像

- 指定年月日/昭和60年 3 月19日
- 所有者/宗教法人 佛光寺
- 所在地/萩市大字紫福
- 員数/ 2 躯



この金剛力士像は、寛永元年（1748）の作で、ヒノキ材の寄木造彩色である。阿形像は像高203.5cm、吽形像は像高204.4cmで、作者は不明だが野性的で力量感にあふれている。もとは金谷神社の社坊で、廃仏毀釈により廃寺となった臨済宗陽明山正灯院にあったもので、明治15～19年頃（1882～1886）奈古の丸屋弥十郎が譲り受けて、五台山佛光寺へ寄進したといわれている。

もく ぞう
木造しゃ か によ らい りゅう ぞう
釈迦如来立像

- 指定年月日/昭和60年3月19日
- 所有者/宗教法人 信盛寺
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数/1 軀



この像は木喰上人の作で、用材はイチョウ、像高は88.48cmである。背銘に寛政10年（1798）2月21日に完成したことが記されている。出山の釈迦像で、蓮台の上に立ち、衣を左肩にかけ両手でもって腰に束ね、頭髪は渦巻き、胸には肋骨が露わに見え脛を出し素足である。

もく ぞう
木造ふ どう みょう おう りゅう ぞう
不動明王立像

- 指定年月日/昭和60年3月19日
- 所有者/宗教法人 宝宗寺
- 所在地/萩市大字福井上 ● 員数/1 軀



この像は木喰上人の作で、用材はイチョウ、像高71cm、台座27.5cmである。背銘に寛政10年（1798）2月11日に完成したことが記されている。木喰上人は、寛政10年（1798）2月15日に願行寺を辞して信盛寺に移っているため、願行寺における最後の作である。後年、願行寺から宝宗寺に移されている。

もく ぞう によ い りん かん ぜ おん ぼ さつ ざ ぞう

木造如意輪観世音菩薩坐像

- 指定年月日/昭和60年 3 月19日
- 所有者/宗教法人 願行寺
- 所在地/萩市大字福井下
- 員数/ 1 軀



この像は木喰上人の作で、用材はイチョウ、像高は91.4cmである。光背の中央円輪には悉曇^{しつたん}で諸仏光明真言が記されており、外輪には細かく一面に青海波が描かれ、波の中にも同じく真言が記されている。仏体の裏は刳りぬいて空洞となっており、その中には長さ

42.42cm、巾9.1cmの木札が釘で打ちつけられていた。木喰上人は、寛政 9 年（1797）12月11日から翌年 2 月15日まで願行寺に滞在しており、寛政 9 年（1797）12月18日に完成したこの像は、願行寺における第一作と考えられている。

もく ぞう へん がく じっ しょう ざん
木造扁額「實相山」

- 指定年月日/昭和60年 3 月19日 ● 所有者/宗教法人 信盛寺
- 所在地/萩市大字紫福 ● 員数/ 1 面



この扁額は木喰上人が寛政10年（1798）2月28日に刻んだもので、信盛寺の山号「實相山」の文字が刻んである。

木喰上人は、享保3年（1718）甲斐国（山梨県）に生まれ、14才のとき家を出て元文4年（1739）真言宗の僧となった。宝暦12年（1762）45才で木喰戒を受け、木喰と号した。安永2年（1773）に日本廻国の願をおこし、北は蝦夷地（北海道）から南は九州に至るまで、日向（宮崎県）の国分寺に10年滞留したほかは、1か所に留まることはな

かった。長門国（現 山口県）へは80才の寛政9年（1797）6月24日から翌寛政10年3月24日まで滞在した。千体彫刻を終えて、さらに二千体を志したが文化7年（1810）93才で没した。

萩市内では、^{こま}木間・^{おうみ}青海・^{からひまち}唐樋町・福井下・^{しぶき}紫福・^{やどみ}弥富・上小川・江崎などに泊まっている。現在、山口県内で確認された52体の木喰彫刻の仏像のうち萩市内には14体があるが、扁額は県内に残る唯一のものである。

もく ぞう しょう かん ぜ おん ぼ さつ りゅう ぞう
木造聖觀世音菩薩立像

- 指定年月日/平成6年3月14日 ● 所有者/門前地区
- 所在地/萩市大字福井下 ● 員数/1 軀



この像は、ヒノキ材の寄木造^{よせぎづくり}で、像高124 cm、右手は斜め前方に立て、左手は腹前に出し、未開蓮華を握る。条帛、裳をつけ蓮台上に立つこの像は、宝髻を高く結い、切れ長の眼、目蓋、筋の通った小鼻、口唇、卵型面相、胸、腹、内割りの丸刀のノミ目、ゆったりとした裳の扱いなど、その製作は南北朝時代と見られている。

もく ぞう あ み だ にょ らい りゅう ぞう
木造阿弥陀如来立像

- 指定年月日 / 平成12年3月8日
- 所有者 / 宗教法人 信盛寺
- 所在地 / 萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数 / 1 軀

この像は木喰上人の作で、用材は柿と言いち ぼく づくりい伝えられる一木造である。像高は33cmで、背銘に寛政10年（1798）2月25日に完成したことが記されている。12枚の蓮弁を持った蓮華座上に立ち、背部まで丁寧に彫刻されている。



だい おん じ ほん しょう
大蘊寺梵鐘

- 指定年月日/昭和47年4月27日
- 所有者/宗教法人 大蘊寺
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/1口



金瀧山大蘊寺は、永享年間（1429～1440）に弥富村に創建され、弥高山興禅寺と号したが、天正19年（1591）深川（現 長門市）の大寧寺15代関翁和尚を招き興禅山妙悟寺と改めた。慶長8年（1603）二世傑叟和尚のとき火災により鐘楼のみを残して焼失し、弥富での再興を志したが、領主益田元祥の意に沿い弥富から須佐に移り、益田家開祖以来の菩提所となった。益田元祥の父藤兼の法名をもって大蘊寺と号し、山号を金瀧山と改めている。

梵鐘は、永享7年（1435）の鑄造で、総高110.6cmと室町期の鐘としては中型である。鐘身80.7cm、笠形の高さ5.9cm、同厚さ5.3cm、口径62.2cm、口辺の厚さ9.0cm、乳廓4か所、廓内4段4列64個の乳を有している。撞座の径は10.0cmで蓮華文であるが、外周に花芯をめぐらす中房のみで、その外側に花卉を欠いている。池の間1区から4区にかけて陰刻の銘文があるが、興禅寺の廃壊により、土に埋もれたものを掘り出し、須佐へ曳き運んだものと伝えられており、有為転変がうかがわれる。

さぬ き ぼう ほん しょう

讃岐坊梵鐘

● 指定年月日/昭和48年 2 月13日 ● 所有者/宗教法人 讃岐坊

● 所在地/萩市見島 ● 員数/ 1 口

梵鐘は青銅製で、総高84cmの小ぶりのものである。鐘身61cm、龍頭の高さ21cm、同幅（最大）16cm、同厚さ7.4cm、口径50.2cm、口辺の厚さ5.4cmの日本鐘である。乳廓^{にゅうかく}4か所、1廓内3段3列9個の乳を有して、撞座^{つきざ}口径8.5cmである。

撞座左の陰刻の銘文によると、この鐘は応永20年（1413）当時の地頭であった山田貞友（弘貞）と下神宗重が覚満宮に寄進したもので、現在、萩・阿武郡内では最古の梵鐘である。覚満宮は仁寿3年（853）に長府の忌宮を勧請したものと伝えられ、寛文元年（1661）に客幡宮と改称した。

なお、讃岐坊は讃岐坊という社僧が住した客幡宮の社坊であった。



み しま はち まん ぐう わに ぐち
見島八幡宮鰐口

- 指定年月日/昭和48年2月13日
- 所有者/宗教法人 見島神社
- 所在地/萩市見島
- 員数/1口



この鰐口は社殿や仏堂正面の軒下に吊す金属製の音響具で、参詣者は布で編んだ綱を振り動かして打ち鳴らすものである。

見島八幡宮鰐口は青銅製で直径39cm、表面に陰刻の銘文がある。この銘文によると、南北朝時代、北朝の至徳4年（1387）に当地の地頭であったと推定される永祐が八幡宮に寄進したものである。

見島八幡宮は、貞観元年（859）に豊前国宇佐（大分県）から勧進したと伝えられ、明治41年（1908）に客幡宮と合祀されて見島神社となった。

この鰐口は南北朝時代の優れた工芸品であり、見島のかつての繁栄を示す貴重なものである。

太刀

銘長州住人藤原しげ重・寛永二十かんえい一甲申八月じゅういちこうしん日

- 指定年月日/昭和48年5月8日
- 所有者/宗教法人 松崎八幡宮
- 所在地/萩市大字須佐
- 員数/1口



この太刀は、萩藩永代家老益田家第21代
もと たか元堯が武運長久を祈願して須佐八幡宮に奉納
 したものである。初代藤原清重の作であり、
 代表作といわれる二振のうちの一振である。
 藤原清重は毛利氏お抱えの鍛冶であったが、
 第2代清重の時須佐に移り益田氏お抱えの鍛
 冶となった。

はしのぼう ほん しょう
端坊梵鐘

- 指定年月日/昭和49年 3 月23日
- 所有者/宗教法人 端坊
- 所在地/萩市大字恵美須町
- 員数/ 1 口



この梵鐘は青銅製で、総高1.465mのかなり大きな日本鐘である。龍頭の高さ32.5cm、幅(最大)31.8cm、厚さ9.6cm、口径83.9cm、口辺の厚さ10.5cm、乳廓4か所、廓内4段4列64個の乳を有している。撞座の径7.2cm、八葉複弁の蓮華座である。池の間撞座の左に陰刻の銘文がある。

銘文は13世住職明琢の撰で、鐘は貞享3年(1686)3代藩主吉就が鐘楼とともに時鐘として寄進したことがわかる。萩では幕府の許可を得て初めて設けられた時鐘で、諸士から時鐘料を徴収した。鐘は城下町に鳴り渡るように鐘楼の3階上高く吊られていた。

作者は藩の御細工人、鑄物師郡司喜兵衛信安で郡司一族を代表する近世の名工である。

ふ どう みょう おう りゅう ぞう
不動明王立像

- 指定年月日/昭和51年 6 月10日
- 所有者/宗教法人 南明寺
- 所在地/萩市大字椿
- 員数/ 1 躯

この像は総高103cm、像高91cmの忿怒相^{ふんぬ}の藤製不動明王像である。左目を下向き、右目は上向きに見開いた天地眼で、鼻は巨大な団子鼻、歯で唇をかみしめている。牙は現在失われているが、一文字に結んだ口の両端に右牙を上、左牙を外に出していたと思われる。右手に宝剣、左手に索を持ち、腰を右にひねって岩座に立っている。

像を納めた厨子に添えられた造立札によると、寛永20年（1643）8月に永代家老益田玄蕃頭元堯^{もと たか}が寄進したもので、作者は竹工倉増河内守信久である。籐細工は萩の名産品の一つであり、藩の御細工人として倉増家をはじめとする九家があった。

作者、寄進者及びその年代も明確であり、本体の材質がすべて籐でできている像は、全国的にも珍しく、資料的価値の高い作品といえる。



す さ から つ やき せい じ ゆう どう き うつし か びん
須佐唐津焼青磁釉銅器写花瓶

- 指定年月日/昭和52年 9 月30日 ● 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字須佐 ● 員数/ 1 口



作者は不明であるが、土谷窯系のものと推定され、江戸中期、寛政から文政年間（1789～1829）にかけて作陶された萩藩永代家老益田家用命の製品と思われる。作柄の秀抜なことから須佐唐津焼伝世品として価値が高く、また、須佐唐津焼を知るうえで貴重である。

ばい がく じ どう しょう
梅岳寺銅鐘

- 指定年月日/昭和55年 9 月12日
- 所有者/宗教法人 梅岳寺
- 所在地/萩市川上
- 員数/ 1 口



この銅鐘は慶安4年(1651)1月9日、初代藩主毛利秀就の後を追ひ殉死した梨羽頼母就云の菩提を弔うため、その妻が寄進したものである。龍頭の高さ24cm、総高103.5cm、口径60cm、口の厚さ7.5cmあり乳廊は4か所、一廊内四列16個の乳が有り、撞座は蓮華文

で2か所にある。

萩藩の鋳物師郡司讃岐守藤原信久が銭造し現存するものとしては、寛永19年(1642)に銭造された防府市の岩淵観音堂のものに次いで古いものである。

たけ うじ はち まん ぐう かけ ほとけ

武氏八幡宮懸仏

- 指定年月日/昭和56年 6 月15日
- 所有者/宗教法人 武氏八幡宮
- 所在地/萩市大字上小川
- 員数/ 4 面



武氏八幡宮は、大宝元年（701）に豊前国宇佐（大分県）から勧請したと伝えられる。大内家の祈願所となり、唯心寺という社坊もあり、社領として200石あったという。元和3年（1617）火災にあい、現在地に遷座したという。懸仏は御正体とも呼ばれ、武氏八幡宮に4面伝わるうちの2面である。裏面の墨書銘から明応3年（1494）と天正11年（1583）に奉納されたもので、天正11年のものは山口で作られたことがわかる。

たけ うじ はち まん ぐう み こし
武氏八幡宮神輿

- 指定年月日/昭和56年 6 月15日
- 所有者/宗教法人 武氏八幡宮
- 所在地/萩市大字上小川
- 員数/ 1 基



この神輿は、約 1 m²の土台の上にのり、柱心々0.5mである。明応 7 年（1498）8 月 15 日と記された棟札があり、室町時代の神輿は、県内で最も古いものと推測されている。また、わらび手の先端にある紋様は、当時の建築様式を知る上で貴重なものである。

武氏八幡宮の祭りは、防長風土注進案に、「祭

日 八月廿二日 廿三日」と記されているが、現在、氏子たちの仕事の都合で、9月26日と 9 月 27 日に改められている。神輿は、氏子によって、昭和 3 年（1928）に第一鳥居の右脇に建設された自然石積みの神輿台「馬場の尾行宮所」へ行幸される。

かた また はち まん ぐう かけ ほとけ

片俣八幡宮懸仏

- 指定年月日/昭和60年 8 月 9 日
- 所有者/宗教法人 片俣八幡宮
- 所在地/萩市大字吉部上（吉部公民館寄託）
- 員数/ 2 面



片俣八幡宮は、大同 2 年（807）に豊前国宇佐（大分県）から勧請したと伝えられる。懸仏は、銅などの円板上に神像・仏像の半肉彫りの鑄像をつけたり線刻したりして、神社本殿や寺院本堂の柱や壁などにかけて拝んだもので、神仏習合の信仰より生まれ、鎌倉・室町時代にかけて盛行した。片俣八幡宮に 2 面ある懸仏のうちの 1 面で、裏面の墨書銘から永享 4 年（1432）に奉納されたことがわかる。

なかしまよし まろ さく
中嶋善磨作たけ かご
竹籠

● 指定年月日/平成15年 5 月22日 ● 所有者/個人

● 所在地/萩市大字上田万 ● 員数/6点



1 春日野網代籠 (唐物)



2 「喜」文字蓋付手提籠 (唐物)



3 三重編手付籠 (唐物)



4 手付四方籠 (唐物)



5 二重編手付籠 (唐物)



6 牡丹籠 (和物)

中嶋善磨は明治35年（1902）田万川町（現萩市）に生まれた竹細工師である。和物花籠をはじめ炭斗などの茶道具、蓋付手提籠や魚釣りに用いる背負籠のような生活用具にいたるまで幅広く製作した。

この6点は、極めて細い竹ひごで幾重にも編み、飾り模様編みを入れ、漆塗りを施すなど、中嶋善磨の高い技術力により生まれたものである。

1 春日野網代籠 (唐物)

(高さ52.5cm、最大径15.5cm 把手付け根)

2 「喜」文字蓋付手提籠 (唐物)

(高さ32.0cm、最大径27.5cm 把手付け根)

3 三重編手付籠 (唐物)

(高さ76.5cm、最大径24.0cm 把手付け根)

4 手付四方籠 (唐物)

(高さ67.8cm、最大径28.5cm 底対角線)

5 二重編手付籠 (唐物)

(高さ54.5cm、最大径23.3cm)

6 牡丹籠 (和物)

(高さ100.5cm、最大径27.0cm 把手付け根)

う つ かん のん じ わに ぐち
宇津観音寺鰐口

- 指定年月日/平成15年 6 月27日
- 所有者/宗教法人 観音寺
- 所在地/萩市見島
- 員数/ 1 口



この鰐口は銅製で直径25.4cm、表面に浅く陰刻銘文がある。一部に誤記や書順の誤り等が認められるものの破損もなく全体として保存状態もよいといえる。銘文によると室町時代の応永13年（1406）に見島の豪族山田貞友（弘貞）によって奉納されたものであることが分かる。この事によって宇津の観音寺観音堂の存在が室町初期までさかのぼって確

認できる。

すでに見島八幡宮の至徳4年（1387）製作の鰐口は市指定有形文化財として指定されているが、当鰐口もこれに比肩するものと言えよう。

またこの鰐口は宇津のみならず、中世における見島全島の社寺信仰のありようを考える上で貴重な資料と言える。

しほんぼくしよとしとくしよ
紙本墨書年徳の書

- 指定年月日/昭和56年6月15日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字堀内
- 員数/1幅



寛政10年（1798）3月6日、81歳の木喰
上人は弥富村（現 萩市弥富）より友信に入り、
3月14日に江崎の六角堂に移動するまで滞
在した。この間、松の生木に木造釋迦如来坐
像を刻んだが、白髪長身の見慣れぬ旅の僧が
生木彫刻をする姿を一目見ようと地区の人々
が集まって騒いだので、地主の安井家に頼ん
で松の四方を筵で広く囲んでもらい、その中

で像を刻んだという。この書は、その時に安
井家から受けたもてなしに対する返礼として
書かれたものと言われている。正月用の掛け
軸として、年徳の年の中に七福神の名が入っ
ており、僧らしい風格のある書となっている。

木喰上人の書は数が少なく、全国で確認さ
れているものはこの書を含めても7幅だけだ
がある。

ふる かわ ひさ てる しょ
古川久輝 書

- 指定年月日/平成15年 5 月22日 ● 所有者/個 人
- 所在地/萩市大字下田万 ● 員数/ 2 幅



この書は、書道家古川久輝による正信偈と千曲川旅情の歌を書いたものである。古川久輝は大正3年（1914）6月16日に弥富村（現萩市弥富）に生まれ、昭和9年（1934）より教職に就いた。定年で教職を退いた後は、田万川町の教育長を務める等教育行政に尽力し、書道家として地域文化の向上に貢献した。

やまもと また べ え ほう ごう き

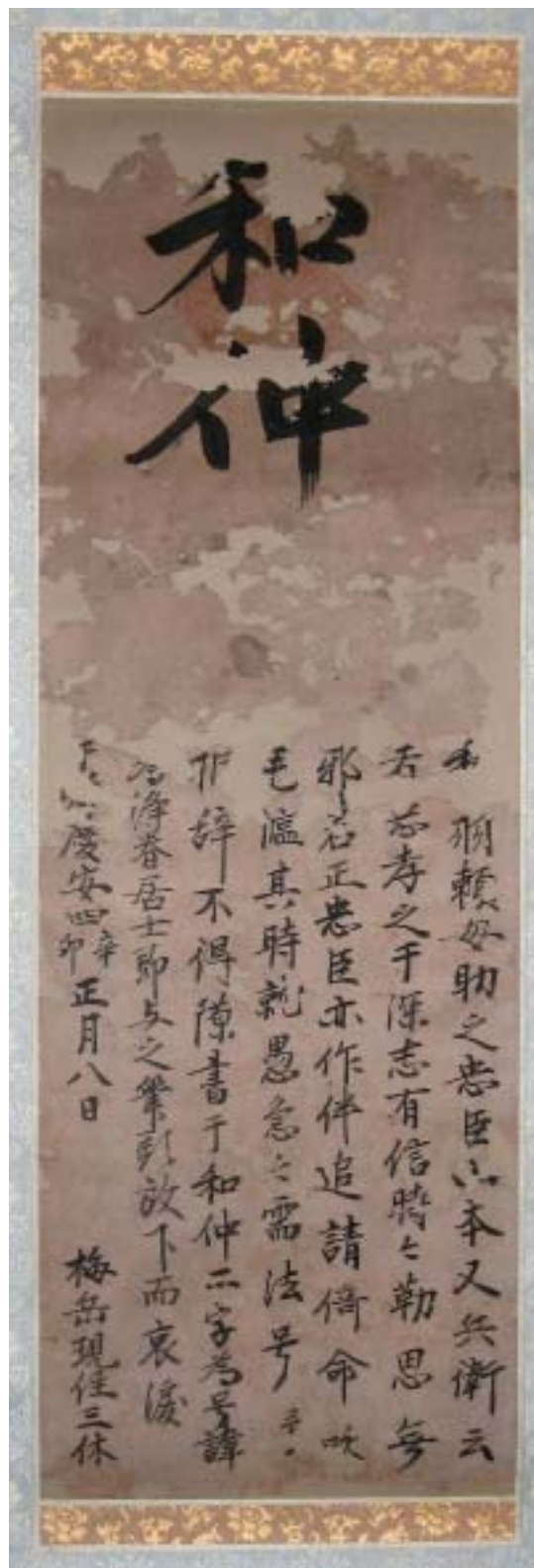
山本又兵衛法号記

- 指定年月日/平成16年7月22日
- 所有者/宗教法人 梅岳寺
- 所在地/萩市川上
- 員数/1軸

この書は、慶安4年（1651）病没した萩藩主毛利秀就の後を追ひ殉死した梨羽頼母就云の家臣山本又兵衛が、自らの殉死に際して法号・諱を求めたのに応えて、楊岐山梅岳寺住職三休和尚が深い感銘のもとに起草したものである。

またこの書は、陪臣の殉死に直接係わる資料であるとともに、寛文3年（1663）幕府が殉死を禁じたことにより、又兵衛の殉死が萩藩で最後の殉死の例の一つとなったことから貴重である。

なお、山本又兵衛の墓は梨羽家の墓所に設けられている。



おお い はち まん ぐう もん じょ
大井八幡宮文書

- 指定年月日/平成 9 年 4 月 25 日
- 所有者/宗教法人 大井八幡宮
- 所在地/萩市大字堀内（萩博物館寄託）
- 員数/14 点



大井八幡宮は、永観 2 年（984）に大井郷の宿居殿に神霊を勧請したのを始まりとし、中世末期まで阿武郡（萩市・阿武町・阿東町）の惣社としての地位を占めていた。指定されている 14 点の文書のうち、永正 5 年（1508）の「大井八幡宮御済納米銭役人文書」は阿武郡の惣社である大井八幡宮の祭礼にあたり、郡内諸郷に課せられた人役以下の諸負担を記

したもので、合併した萩市内の須佐・多万（田万）・弥富・小河（小川）・吉部・高佐・福井・紫福・椿・三見・河島（川島）・大島・倭島（相島）・羽島・志津島（櫃島）の地名が見える。このころ見島は大津郡に属し、江崎は多万郷内、鈴野川は小河郷内、片俣は賀年（嘉年）郷内、黒川は福井郷内、川上・明木・佐々並は椿郷内、山田是三見郷内にあった。

げん こう いかり いし
元寇の碇石

- 指定年月日/昭和55年4月25日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大井
- 員数/1基

この碇石は地上に現れた部分の高さ2.3m、前面の最大幅は34cm、横幅最大22cm、全長推定2.8mの不整方柱形の暗紫色砂質凝灰岩製である。

中央部両横に深さ約2cm、幅5cmの帯状の溝があり、裏にも25cm間隔で2本の並行する陰刻線が認められている。

元寇の碇石は全国で38か所、40個が確認されているが、そのほとんどが九州の日本海側、福岡県の博多湾を中心に佐賀県、長崎県で発見されている。山口県からは下関市大字神田上の江尻に碇石らしいものが見つかったりしているだけであるので、この碇石は我が国の元寇遺物としては最東端に位置するものであり、その点からも貴重な考古資料といえる。



つか あな こ ふん しゅつ ど ひん
塚穴古墳出土品

- 指定年月日/昭和56年 6 月15日 ● 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字江崎 ● 員数/ 1 括



金比羅山の山すそに、付近一帯の字名にちなみ「塚穴」と呼ばれている横穴式石室古墳がある。この古墳からは須恵器 7 個、鉄刀子 1 個、鉄釘 2 本が出土した。須恵器は硬く焼き締められた灰色・灰黒色の土器で、古墳時代中期の渡来技術により作られたもので、後期古墳の副葬品に見られる。

ます だ け れき だいいりょう しゅ しょう ぞう が ぐん
益田家歴代領主肖像画群

つがたり し ほん ぼくしよ ます だ なりつねさん いっ ぶく
附 紙本墨書益田就恒賛一幅

- 指定年月日/平成元年10月13日 ● 所有者/個人
- 所在地/萩市大字須佐（萩市立須佐歴史民俗資料館寄託） ● 員数/12幅



益田家は藤原鎌足第17代国兼くにかねを始祖とし、永久年間（1113～1117）石見国一の宮浜（浜田市）に下向して御神本みかもとと称した。第4代兼高かねたかの時に益田七尾城に移り、姓を益田と改めた。第20代元祥もとよしは、関ヶ原の戦い（1600）に敗れた毛利輝元に従い須佐に移った。この時「徳川方につかないか」と使者を立てた徳川家康からの誘いを断っており、これに感激した毛利輝元は益田家を永代家老として重用した。

- 絹本着色益田尹兼像（第18代）
- 紙本着色益田藤兼像（第19代）
- 絹本着色益田元亮像 / 波多野等有筆（第21代）
- 紙本着色益田就宣像（第22代）
- 絹本着色益田元道像（第27代）
- 絹本着色益田広亮像（第28代）
- 絹本着色益田就祥像 / 大楽養庵筆（第29代）
- 絹本着色益田就恭像 / 大楽養庵筆（第30代）
- 絹本着色益田房清像（第31代）
- 絹本着色益田元宣像（第32代）
- 絹本着色益田親興像（第33代益田親施の兄）
- 絹本着色益田親施像 / 波多野仁十郎光暉筆（第33代）

す さ から つ やき ほ じ しゃ
須佐唐津焼保持者つち たに かず ふみ
土谷一史

- 認定年月日/平成17年2月28日
- 住所/萩市大字堀内



須佐唐津焼については、明德元年（1390）大陸より渡来した陶工が田原道仙と称し、肥後国唐津において開窯した後、文禄の役の頃（1592）長門国須佐郷に移り住んだことを起源とする説がある。田原道仙は、関ヶ原の戦い後に須佐の領主となった益田家の御用焼物師となり、土谷鹿郎衛門を名乗った。その技法は一子相伝により継承され、現在に至っている。

土谷一史は、昭和45年（1970）須佐唐津焼窯元の土谷家第13代にあたる土谷一孔（一水）の長男として生まれた。昭和61年（1986）より土谷家第12代元斉に師事し、平成2年（1990）に元斉が没すると一水に師事して作陶を学び、平成4年（1992）には戦後途絶えた須佐黒を再現している。平成15年（2003）一水没後に土谷家第14代目として道仙を襲名した。

まつ ばら ぎ おん ぐるま
松原祇園車

- 指定年月日/昭和53年 6 月15日
- 所有者/松原地区
- 萩市大字須佐 ● 員数/ 1 車



祇園車の起源は、文政年間(1818~1829)以前に地域の悪疫退散を祈願するため、八坂神社の氏子たちが山車を造り祭礼に参拝することがはじまりといわれている。松原の山車は、旧町内の山車の親車としての役割をもっていた。時代の変化に伴って他の山車は解体されたが、松原山車は祇園車として今なおその様相を保っている。

ほん まち なか ぎ おん ぐるま
本町中祇園車

- 指定年月日/昭和57年 8 月30日
- 所有者/本町中地区
- 所在地/萩市大字須佐 ● 員数/ 1 車



元文3年(1738)益田家第27代元道^{もと みち}が重病にかかり、平癒祈願のために公儀の許可を得て6月14・15日の両日、神こしの御神幸が行われた。それより祭日の変更はあったが、市中各丁々から花車・山鉾等が寄進され、車オドリや狂言等盛大な行事となった。その後、凶作や飢饉等で途絶えた時期もあったが、その都度復活され現在に至っている。

かい じょう しん こう し りょう こう てい しゃ しゃ でん
海上信仰資料黄帝社社殿

- 指定年月日/平成元年 3 月 29 日
- 所有者/宗教法人 宝泉寺
- 萩市大字須佐
- 員数/ 1 棟



須佐高山^{こうやま}の八合目の黄帝社には、中国の伝説神である黄帝が祀られている。黄帝は航海、造船の守護神として敬われ、古くから航海、漁業の守護神として祀られたと言われている。瑞林寺由来によると、元禄16年（1703）以降、狗留孫^{ぬり}孫^{かた}黄帝への信仰が高まり、宝永2年（1705）に萩藩永代家老益田家第26代就賢^{なりかた}が瑞林寺を創建したときには既に黄帝社が創建されていたという。須佐沖は高山山頂の磁石

石により船の磁石が狂い、難所であったことから、航行する船乗りが磁石の狂いを船霊の仕業とし、黄帝社を神霊社として信仰したのではないかとと思われる。

藩政時代には、淫祠として取り除きを命じられたが、信仰者が多く、日本無類の社として特に願い出て、瑞林寺山王社として祀ることを許されている。

こ ま かみ よ まい
木間「神代の舞」

- 指定年月日/昭和37年12月24日
- 保持者/木間神代の舞保存会
- 所在地/萩市大字山田



この舞は、約200年前、西木間の原川仁右衛門が上方から伝習し、西木間の杉本千代松が習い伝えた。舞は24種類あり、五穀豊穡を祈願して木間の氏神若宮神社の祭事の最後に拝殿で奉納される。

舞子は原則として地区内の長男があたり、その資格は終身である。衣装は舞によって異なるが、紋付・袴・五色の装束・烏帽子・白

足袋などである。舞に使用される面は木彫りで12種類ある。また、囃子方の衣装は紋付き・袴・烏帽子を着用する。鳴り物は太鼓・合わせ鉦・笛がある。天蓋とよばれる格子状の木の枠に色紙の幣を飾り、紙の玉垣と鳥居で囲んだものを天井に上げて、綱で引いて舞に用いるものもある。

たま え うら てん ぐ びょう し
玉江浦「天狗拍子」

- 指定年月日/昭和37年12月24日
- 保持者/天狗拍子保存会
- 所在地/萩市大字山田



玉江五鬼権現社の秋の大祭に奉納行事として行う大漁祈願の踊りで独特のものである。

踊りは「天狗の舞」と「恵美須舞・大黒舞」の二部からなっており、長い間、若者組の者によって演じられていたが、現在はすべて小学6年の子どもたちによって演じられている。

「天狗の舞」は16名（男8名、女8名）が2列になって踊る。衣装は紋付き、袴にたす

きを掛け、鉢巻きをして手甲・脚絆^{て こう きゃはん}を着用し、白足袋・わら草履をはく。腰に小刀1本を帯び、両袖に鈴を下げる。

「恵美須舞・大黒舞」は各1人ずつ踊り子が踊る。衣装は紋付き、鉢巻きの代わりに装束・烏帽子^{えぼし}をつけ、面をつけて釣竿と小槌を持つ。鳴り物は老人があたり、太鼓と囃子^{はやし}がつく。

越ヶ浜「巫女の舞」

- 指定年月日/昭和46年 3 月26日
- 保持者/越ヶ浜郷土芸能保存会
- 所在地/萩市大字椿東



萩藩 2 代藩主毛利綱広^{つなひろ}のとき、安芸^{あき}の厳島^{いつくしま}神社^{かんじょう}を勧請^{かんじょう}して萩城^{かき}の東北海上 1 里の所にある越ヶ浜の池畔に一社を建立した。同社では毎年旧暦 6 月 17 日夜、本社の厳島神社と同じように管弦祭^{かんげんさい}が催された。その際に神輿^{みこし}を船に乗せて海上を渡るが、船に続いて大きな漁船 2 艘を横に並べて、その上に舞台を造った巫女船^{みづこふね}が続き、神楽^{かぐら}を奏する。

舞は 4 人 1 組の巫女によって演じられる。囃子^{はやし}の前半は横笛と太鼓の荘重な伴奏に合わせて扇^{あふ}を持って舞う。後半は鉦^{かね}が加わってにぎやかな伴奏で、鈴と扇とを両手に持って舞う。巫女の衣裳は本番までは神前に供えて清めたのち着用するのが慣例で、頭上には金色の小さい烏帽子^{えぼし}と花かんざしをつけている。

こし が はま おお あみ ごえ
越ヶ浜「大網声」

- 指定年月日/昭和46年3月26日
- 保持者/越ヶ浜郷土芸能保存会
- 所在地/萩市大字椿東



この地に伝わる「大網声」は漁師たちが船上で、魚を捕る網を引ながら歌った勇壮なものであり、古来より歌い継がれてきたものである。

1組6～7人以上が「トンリッキヤレヤ
祝い目出度や 若松様よ 江戸も栄えりや
葉も茂る ハンジョー エンエヘロー エン

エホナー」と無伴奏で歌ううたは、1番声の独唱と2番声の合唱が重なり、まさに海の男にふさわしいものである。

現在は、作業に動力を使用するようになったために歌われることがなく、わずかに数人の古老が伝承している。

ささ お ぎ みん
笹尾義民おどり

- 指定年月日/昭和55年 9 月12日
- 保持者/笹尾芸能保存会
- 所在地/萩市川上



文化7年（1810）、萩の二軒の造酒屋が代官に賄賂を贈り、橋本川の上流、太鼓湾をせき止めて、水車場が作られた。そのため、川筋が干上がり、川上からの筏が使えなくなってしまった。困った村人は藩庁に水車の取り除きを嘆願したが、聞き入れられず、村人は話し合い水車を打ち壊すことにした。しかし、そのことが役人に知れ、首謀者として平助と権太が捕らえられた。その後、藩は事の顛末を調査し、水車場は撤去されたが、首謀者の2人は斬首となった。この踊りは、犠牲になった2人の義民の業績をしのび作られたものである。

とお たに かぐ ら まい
遠谷神楽舞

- 指定年月日/昭和55年 9 月12日
- 保持者/遠谷神楽舞保存会
- 所在地/萩市川上



創始の時期は不明であるが、昔大飢饉の際雨乞いと悪疫平癒のために氏子が老若男女総て神社に集い、少ない米を出し合い御神酒を造り飯を炊き参籠^{さんろう}の上祈願し、降雨まで5日間昼夜を問わず舞い続けたのが起源である。後世に至り、秋祭りの行事として五穀豊穰、悪疫退散のために行われるようになったと伝えられている。

遠谷神楽舞は、座開から綱切まで24種の舞があるが、現在では、そのうち数種の舞が舞われている。

なか の はら まと

中ノ原的まつり

- 指定年月日/昭和55年 9 月12日
- 保持者/中ノ原惣の瀬的まつり保存会
- 所在地/萩市川上



その昔、惣の瀬の奥にある扇子落の滝に棲んでいた大うなぎを里人たちが食べてしまい、その亡霊が里を襲い、里人たちは3人を残し悪疫に倒れてしまった。残った3人は神明様にお祈りし、大うなぎの亡霊を弓矢で退治した。この的まつりは、それ以後、里人たちが神明様に感謝し、的まつりを行ったことに由来すると言われている。

まつりでは、的を怪物になぞらえ、4種類の的に次々に競射し、五穀豊穡を祈念するのであるが、矢が当たらなければ神事が終わったことにならず、日没になり続行できなければ、翌日も矢が当たるまで射続けなければならない。

まつりは、毎年4月29日に行われている。

おお え ご かぐ ら まい

大江後神楽舞

- 指定年月日/昭和56年 6 月15日
- 保持者/長門神式座
- 所在地/萩市大字上小川



昭和2年(1927) 地元の有志らが島根県益田市鎌手西平原から師を招いて8調子の舞を習い、舞い始めたのが現在の大江後神楽(石見神楽)の始まりである。第二次世界大戦中は、しばらく途絶えていたが、戦後復活し、毎年、武氏八幡宮の大祭をはじめ、地方の秋祭りに奉納してきた。

大江後神楽には、8調子で伝承されている舞が10数種類あり、「鐘馗」「蛇舞」「岩戸」などが代表的な舞である。中でも「岩戸」の舞は、原形のまま伝えられている。

しも りょう かぐ ら まい しん しょう ざ
 下領神楽舞（神笑座）

●指定年月日/昭和56年12月19日 ●保持者/下領地区

●所在地/萩市大字高佐下



明治41年（1908）から下領地区で継承されている下領神楽舞は、大田亀松を師とする六郷舞（^{ちやうし}6調子）と、松本勝太郎を師とする商人舞（^{あきんど}8調子）で俗に「石州舞」^{そく}ともいう。現在伝承されている舞は10種類で、「神楽」「塩^{しお}払^{はらい}」「柴^{しば}立^{たて}」「鬼^き返^{がえし}」「天^{てん}神^{じん}」「恵^え比^ひ須^す」「塵^{じん}輪^{りん}」などがあり、中でも「鍾^{しょう}馘^き」「岩^{いわ}戸^と」「蛇^{じゃ}舞^{まい}」は下領神笑座の代表的な舞である。

の だ はしら まつ 野田の柱松

- 指定年月日/平成4年10月7日
- 所有者/野田地区
- 所在地/萩市大字吉部下



野田地区の伝統行事で、約10mの柱に青竹で朝顔形のかごを作り、その中に稲ワラ、杉・檜の葉、青竹をつめ、その中心に弊^{へい}を立て、ロープで三方から引きながら柱を立てる。

火種は、地区の戸数程ワラでスボを作り、それに1本ずつの弊をつけて、お祇園様から火を貰ってワラスボに火をつける。柱松を中心に円になり、火を投げ上げ、上のかごに火をつける。杉・檜の葉の焼ける音と、パーン、パーンという青竹のはじける音が大きい程よいとされている。

その昔、野田地区で牛馬の疫病が流行し、農耕に一番大切な牛馬が多く死んだとき、お祇園様に願をかけてこの火祭をしたところ、疫病はすっかり止んだという。それ以来、火祭は毎年7月14日に絶え間なく続けられている。

はぎ じょう か まち わり げん ぴょう せき
萩城下街割原標石

- 指定年月日/昭和37年 1 月11日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字江向
- 員数/ 1 基



街割原標石は、江向米屋町下り筋の東側道路端の市民館横に据えてある。玄武岩の切り石で、長さ123cm、周囲約100cmの柱状で5か所のタガネ跡がある。半分は地中に埋設され、文字などの彫刻は施されていない。

藩医を務めた烏田智庵^{からす だ ち あん}の覚書「烏田智庵記」に「萩の正中は米屋町より江向縄手に出て、東側第一の宅地の西北角なり」とあるが、こ

れが基準石のことで、藩士長富佐兵衛が命を受けてここに石を立て萩城下の中心点を標示した。

昭和42年（1967）道路拡張のため東南に、さらに市民館の増築により現在位置に移されたが、この小さな石が今日まで路傍に保存されていたことは貴重である。

むら た せい ふう べっ たく あと
 村田清風別宅跡

- 指定年月日/昭和37年12月24日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字平安古町
- 指定面積/991.24m²



この別宅跡は、旧萩城三の丸と外堀を隔てた平安古満行寺筋に位置する。

文政3年（1820）清風38歳のとき藩士香川作兵衛から買い入れて引き移り、弘化2年（1845）まで清風が藩政に携わった25年間の旧宅跡である。現在は清風が起居していた本邸の家屋は老朽のため解体され、その300坪（991.24m²）の敷地と長屋門のみが残されている。

長屋門は木造^{さんかわらぶき}棧瓦葺平屋建、^{けた ゆき}桁行14.84m、^{はり ま}梁間4.015mの寄棟造で、中央から右寄りに4m幅の門を開き、格子入りの出窓が3か所ある。

清風は萩藩が雄藩としての基礎を築いた天保の改革では民政・兵制の刷新、文武の奨励などに尽力して萩藩が明治維新に活躍する基礎を築いた。

たま き ぶん の しん きゅう たく
 玉木文之進旧宅

- 指定年月日/昭和39年 3 月28日 ● 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字椿東 ● 指定面積/307.66m²



この旧宅は、松下村塾^{しょうか んじんく}や吉田松陰誕生地ともほど遠くない所に位置している。

建物は木造茅葺平屋建で、41.76m²、8畳の座敷のほか4畳の畳部屋、3畳半の玄関、4畳半の板の間と土間の台所がある。別に湯殿・便所がある。

玉木文之進は吉田松陰の父杉百合之助の末弟で吉田松陰の叔父にあたり、杉家から出て

玉木家（大組40石）を継いだ。生来学識に優れ、付近の児童を集めて教授し松下村塾と名付けた。この塾の名称は後に久保五郎左衛門が継ぎ、安政2年（1855）には松陰が継承して、名を天下に揚げるに至ったところから、この旧宅を松下村塾発祥の地といえる。

えん こう じ あな かん のん こ ぶん
 円光寺穴観音古墳

- 指定年月日/昭和46年3月26日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大井
- 指定面積/126m²



この古墳は、小高い山の急斜面中腹に築造された横穴式古墳で、6世紀中・後期に築造された円墳と推測される。

遺骸を納めた玄室は、前室と奥室の2室に区切られ、前室の手前に羨道せんどうがあったと思われる石積みが見られる。幅2.56m、奥行き9m、高さは前室で1.7m、奥室は2.3mないし2.5mで奥に入るほど高くなっている。こ

の巨大な石室の規模から、文献上に見られる「阿牟あむの国造」との関連が考えられる貴人が豪族の墳墓であったことがうかがわれる。特に石室に使用されている石の巨大なことは山口県の北浦一帯ではほかに例をみない。玄室の壁の石積みは大和地方の影響を受けた竪積で、一つの高さが1.4m、横3.0mにも及ぶものがある。

やつ はし けん ぎょう ひ
八橋検校の碑

- 指定年月日/昭和46年 3 月26日
- 所有者/宗教法人 赤崎神社
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/ 1 基



この碑は、姥倉運河を渡った香川津北部の赤崎神社の境内にある。

高さ1.22m、幅0.88m、厚さ0.33mの花崗岩製の石碑である。

天明4年（1784）日本近世箏曲の祖である八橋検校の100年忌を記念して、萩の箏曲の師匠参一ら4人が建立した頌徳碑である。碑に刻まれた碑文は検校の履歴および業績を知るうえで重要な資料であり、また、全国的に八橋検校の頌徳碑は非常に少ないため、貴重である。

お ぐら し けん ぼ しょ
小倉四賢墓所

- 指定年月日/昭和47年2月9日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字椿
- 指定面積/52.81m²



この墓所は南明寺山麓、もと和泉寺といわれた小高い夏みかん畑の西面に位置している。

幅9.09m、奥行き5.81mのコンクリート垣に囲まれた小倉4先生(尚斎・鹿門・南皋・遜斎)の墓碑4基、および小倉家墓碑7基と安藤紀一撰ならびに書の小倉遜斎顕彰碑がある。小倉尚斎、鹿門、遜斎はともに藩校明倫

館の祭酒(初代、5代、13代学頭)として、また、南皋は藩の侍講となった。

四賢ともに藩政時代の長州藩の学問教育(儒学)に尽し、その功績は大きかった。こうした4先生の教育者としての優れた事跡はもとより、歴史的、学術的にみても貴重な墓所といえる。

よし だ しょう いん はか ぼ しょ 吉田松陰の墓ならびに墓所

- 指定年月日/昭和47年2月9日 ● 所有者/個人
- 所在地/萩市大字椿東 ● 指定面積/313.8m²



吉田松陰の墓は松陰誕生の地に隣接し、^{だん}団子岩とよばれる小高い風光明媚な所に建っている。

墓碑は高さ0.8m、幅0.45m、礎石からの高さ1.6mの^{か こう がん}花崗岩質の自然石で作られている。

表に「松陰二十一回猛士墓」、裏に「姓吉田氏、称寅次郎、安政六年己未十月二十七日於江戸歿、享年三十歳」と刻まれている。

松陰の没後百カ日に当たる万延元年(1860)2月7日、生家の杉家では百カ忌を営み、遣

髪を埋めて松陰の墓を建立した。墓前には、門人17名が寄進して、その名を公然と刻んだ石製水盤、花立、燈籠が供えられている。

また、この墓所には杉家、吉田家、玉木家、久坂家一族と高杉晋作などの墓が立ち並んでいる。

幕末の日本史上に影響を与えた松陰と係わりの深い人々の墓所として歴史的に重要である。

きく が はま ど るい おなご だい ば
 菊ヶ浜土塁（女台場）

- 指定年月日/昭和48年2月13日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字今魚店町
- 指定面積/6,035m²



文久3年（1863）5月10日の攘夷決行の日、萩藩の馬関砲台（下関市）は関門海峡を通過する外国船に砲撃を加えたが、期待に反して大損害を受けた。この報が萩に伝わると、浜崎町の住民が菊ヶ浜に土塁の構築を請願するなど、城下を自らの手で守ろうとする機運がにわかに高まったので、藩はこれに応じて土塁の築造を命じた。6月25日に着手し、9月上旬までには、高さ5m、下部幅18m、上

部幅9m、長さ100mないし300mの土塁が合計6か所完成した。

通称「女台場」といわれているが、この土塁は女だけの力でできたものではない。武士の妻や奥女中までが派手な装いで応援をした姿が印象的に語り伝えられているからであろう。維新前夜を彩る民衆活動の一つとして歴史的意義は大きい。

の やま ごく いわ くら ごく あと
野山獄・岩倉獄跡

- 指定年月日/昭和48年7月31日 ● 管理団体/萩市
- 所在地/萩市大字今古萩町 ● 指定面積/128.91m²

正保2年（1645）9月17日夜、藩士岩倉孫兵衛（大組200石）は酒に狂って、道を隔てた西隣の藩士野山六右衛門（大組200石）の宅に切り込み家族を殺傷した。この事件のため岩倉は死刑となり、両家とも取りつぶされ屋敷は藩の獄となった。

野山獄は上牢として士分の者を収容し、岩倉獄は下牢として庶民を収容した。幕末、吉田松陰は海外渡航に失敗したのち野山獄に、その時の従者金子重之助（重輔）は岩倉獄に投ぜられた。松陰はそこで仲間の囚人を教化するという、前例のない教育活動を行っている。

現在、敷地の一部を保存して記念碑などが建てられ、萩藩の波乱に富んだ維新当時を偲ぶことができる。



▲ 野山獄跡



▲ 岩倉獄跡

よし み まさ より そく じょ はか
吉見正頼息女の墓

- 指定年月日/昭和54年 7 月28日
- 所有者/宗教法人 禅林寺
- 萩市大字高佐下
- 員数/ 1 基



この墓は、高佐下禅林寺の境内に建立されている高さ1.83mの宝篋印塔ほうきょういんとうである。

石州三本松（津和野）城主吉見正頼まさより（11代城主）が阿武郡を支配していた頃、萩の指月山の別邸と三本松城を往復する際に、この地に休憩所を設け、そこに正頼の息女を住まわせていたが、天正13年（1585）8月26日萩の指月邸において息女は病死し、遺言によりこの地へ葬ったと言われている。

墓の銘に、「妙性院殿」「吉見正頼息女」「萩津指月死所」「天正十三乙酉八月廿六日」とある。

なお、「禅林寺」改号は、当初「妙性庵」から宝永2年（1705）に「妙性院」となり、後に「高德寺（景）」「高大寺（横貝）」を合併して「徳性寺」と改号され、昭和49年9月18日「三岳寺（後井）」を合併して「禅林寺」となる。

戦国大名吉見正頼（11代三本松城主）は、永正10年（1513）に生まれ、天文9年（1540）兄隆頼たかよりの家督を継ぎ、大内義興よしおきの娘大宮姫を妻とした（大内義隆よし たかの義兄）。天正16年（1588）5月22日、萩指月で没した（76才）。

ます だ け ぼ しょ
益田家墓所

- 指定年月日/昭和55年 7 月 1 日
- 所有者/個 人
- 萩市大字須佐
- 員数/ 1 基



須佐初代領主益田家第20代元祥（牛庵）
以下代々の墓があり、永年にわたる萩藩永代
家老益田家の繁栄と領主としての功績の跡を
しのばせるものがある。地・水・火・風・空
と刻まれた形の異なった墓石が大地に立ち並
び、歴代領主の墓地、また、益田時代の合葬
墓としてその風格を保っている。

益田藤兼ふじかねの四男、益田家第20代元祥は、
毛利家の部将で石見国益田城主として6万石
を領有していた。慶長5年（1600）関ヶ原
の戦いで主君である毛利輝元てるもとは敗戦の将とな

り、徳川家康は元祥とその二男景祥かげよしを優遇し
ようとしたが、元祥はこれを辞退し、毛利家
と運命を共にすることとしたので、毛利輝元
は大いに感じ入って毛利家の永代家老とした。
旧領に近い長門国阿武郡須佐で1万2000石
を受領し、萩城の築城、藩政の基礎確立に尽
力し、第33代親施ちかのぶまで藩の政治に関与した。
親施は元治元年（1864）禁門の変の責任を
負い、徳山惣持院で同年11月12日、32歳を
一期として国司親相くに し ちかすけ、福原元儼ふく はら もと たけ二家老とともに
その生涯を閉じた。

す さ じ こ ぶん 須佐地古墳

- 指定年月日/昭和56年 6 月15日
- 所有者/萩 市
- 萩市大字江崎
- 員数/ 1 基



この古墳は、もともと山陰線江崎駅の西方約1.3 km、鉄道線路右側の丘の上にあったが、永年にわたる雨水の浸食を受けて崩壊寸前となったため、昭和46年7月に調査を行った後、田万川コミュニティセンター横に移築した。

古墳の墳丘は半径15m、高さ1.5mの半円形で、内部はほぼ完全な形で残っていた。石室の大きさは長さ350cm、幅50～80cm、深さ70cmで、側壁は河床礫を積んだ上に割り石を小口積みにし、床面は中央をくぼめる割竹状に小粒の礫を敷いた竪穴式石室である。5世紀頃のものとは推定されている。

つか あな こ ふん
塚穴古墳

- 指定年月日/昭和56年 6 月15日
- 所有者/個人
- 萩市大字下小川
- 員数/1基



小川の小島盆地の東側、保田川の右岸の標高45mの河岸段丘に「塚穴」と呼ばれる古墳がある。

この古墳は、玄門（玄室の入口）の幅が玄室（遺骸を納める部屋）よりわずかに狭くなった両袖式と呼ばれる横穴式の石室をもつ古墳で、羨道（玄室への道）や墳丘などは、風雨等により削りとられてその原形をとどめて

いない。石室を造るにあたって、ゆるい傾斜の上に土を置き、ほぼ平らにした上に大形の自然石を組み上げている。また、山麓からやや離れた位置を選び、墳丘の見かけの大きさをより大きく見せようと工夫した跡がうかがわれる。玄室内から発見された土器などにより、6世紀頃の古墳と推定されている。

きゅう ゆ かわ け や しき

旧湯川家屋敷

- 指定年月日/平成 5 年12月 1 日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字川島
- 指定面積/1,282.97m²



湯川家は萩藩の藩士で23石余の禄を授けられていた。湯川家がここに居住しはじめたのは、明治以後と考えられる。

建物は主屋と長屋門・台所・表付属屋から成っている。

【主 屋】

主屋は桁行^{けた ゆき}13.84m、梁間^{はり ま}7.92mで北面は切妻造、南面は庇付属の棧瓦葺である。間取りは北に式台と玄関の間、その南に床と仏壇を配した六間取りの主室等、茶室を含む7部屋で構成され、その周囲には内縁が設けられている。



「ハトバ」

【長屋門】

長屋門は桁行^{けた ゆき}9.78m、梁間^{はり ま}2.97mの北面切妻造^{きり づま づくり}棧瓦葺、南面は台所に接続し、8畳と6畳の畳部屋を設けている。

【台 所】

台所部分は桁行5.94m、梁間4.91m、棟折曲り西面入母屋造、東半部は勝手口内の通り土間になっており、西半部には板の間及び台所、「ハトバ」がある。

【表付属屋】

表付属屋は桁行10.84m、梁間北半部2.97m、南半部1.98m切妻造^{きり づま づくり}段違^{だん ちがひ}棧瓦葺^{さん かわら ぶき}の建物で物置及び湯殿・廁が設けられている。湯殿内には川に面して「ハトバ」が設けられ、北面に門が付属している。

場所としては藍場川の最上流に位置し、藍場川の水を敷地内に取り入れて流水式の池泉庭園を形成し、池を出た水は家屋内の下を通り建物内に設けられた「ハトバ」で家庭用水として使用された後、再び川に戻している。藍場川沿いの武家屋敷の典型的な水の利用法を見ることができる。

なが ぞえ やま こ ふん

長添山古墳

- 指定年月日/平成7年2月1日
- 所有者/宗教法人 萩市護国神社
- 所在地/萩市大字椿東
- 員数/1基



この古墳は、長添山の山頂西寄りに位置している。

現在、周辺部は削平されているが、当初は一辺10m程度の方墳であったと推定される。墳頂部に竪穴式石室・箱式石棺一基が露出している。

竪穴式石室は内法長さ3.32m、幅78cm、深さ63cmである。石室の構造は平らな石を周囲に立てまわした後、その上部に同様な石

を小口積みにしていたもので、下部のみを見ると巨大な箱式石棺のようで、天井は4枚の扁平な石で覆われている。

箱式石棺は竪穴式石室の南側に、ほぼ平行に造られている。長さ1.66m、幅は34cmで東側が少し広く、床には海浜礫が敷き詰められている。規模が小さいので小児棺の可能性も否定できない。また古くから開口していたためか、副葬品等は全く検出されなかった。

かつら た ろう きゅう たく
桂太郎旧宅

- 指定年月日/平成10年 1 月27日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字川島
- 指定面積/905.77m²



桂太郎は、萩藩士桂與一右衛門の一子として弘化4年（1847）萩城下の平安古に生まれ、3歳のときに川島に移り住んだ。藩校明倫館で学び、戊辰戦争では奥羽地方鎮撫総督の参謀として活躍した。明治34年（1901）内閣総理大臣となり、以後3度にわたって組閣した。また、拓殖大学の創立者としても著名である。

旧宅は、明治40年（1907）に桂が少年時代を過ごした川島の土地を買い戻して新築したものである。

主屋は木造平屋建入母屋造^{いりもやづくりさんかわらぶき}瓦葺、床面積は67.65m²である。全体を数奇屋風の意匠にまとめ、こじんまりと巧みに収めている。

庭園も建物と同じ頃に作られたもので、藍場川の水を引き入れ、池泉庭園を形成している。

本旧宅は、桂太郎が現職の総理大臣として活躍していた頃に建てられたもので、故郷に対する桂太郎の愛着が感じられ、当時をしのぶことができるものとして貴重である。

い とう ひろ ぶみ きゅう たく ち
伊藤博文旧宅地

つきたり
附

い とう ひろ ぶみ べっ てい
伊藤博文別邸

- 指定年月日/平成10年 8 月31日
- 管理団体/萩 市
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/1,309.76m²



本旧宅地は、伊藤博文が安政元年（1854）から居住していた旧宅（国指定史跡）の周辺を取り囲む位置にあり、旧宅ゆかりの土地として、その環境もふくめて良好な状態である。旧宅の保存及び整備・活用に不可欠な土地として大事である。

【附 伊藤博文別邸】

伊藤博文別邸は、東京都品川区大井山中町にあったものの主要部分を、現在の場所に移築した。建物は玄関が木造平屋建^{さん かわらぶき}瓦葺（95.9

m²）、大広間が木造二階建^{さん かわらぶき}瓦葺（112.06m²）、離れ座敷が木造二階建^{さん かわらぶき}瓦葺（149.72m²）、石灯籠二基を擁する広大なもので、材料は当時の一級のものを使用している。大広間廊下の鏡天井や離れ座敷の節天井等意匠に優れている。

明治の元勳伊藤博文は、明治天皇の信任が厚く、大日本帝国憲法の起草、内閣制度の制定等に手腕を発揮し活躍した。それ等の偉功に対して下賜された赤坂離宮内の建物がこの別邸である。

よし だ しょう いん たん じょう ち
吉田松陰誕生地

- 指定年月日/平成13年12月20日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/2,566.63m²



吉田松陰は、天保元年（1830）に家禄26石萩藩士杉百合之助の2男としてここに生まれた。杉家の旧宅となる以前は、萩藩士八谷聴雨の山荘で「樹々亭」と称されていた。松陰自身が書き残したものの中にも「樹々亭」「山屋敷」「山宅」などの表現が見られる。当時の家の間取を示す旧宅の敷石は、後に住んでいた人の記憶によって復元したもので、3畳の玄関と6畳2間、3畳2間と台所、それに別棟の納屋と厩という簡素な建物であったこ

とがわかる。誕生地は松陰が誕生から19歳までの人間としての形成期を過ごした場所であり、両親や兄弟とともに農耕に従事し、合間には父から漢籍の素読などを受けた思い出深い場所である。松陰はこの頃のことを、嘉永3年（1850）10月25日の「西遊日記」の中で「夢を記す」として夢に見たことを書いている。当地は歴史的意義、現状の環境とともに、当時の趣をよく残しており、幕末維新の史跡として貴重な場所である。

う つ かん のん じ かん のん どう
宇津観音寺観音堂

- 指定年月日/平成15年 6 月27日
- 所有者/宗教法人 観音寺
- 所在地/萩市見島
- 指定面積/553.84m²



言い伝えによると、宇津山観音寺観音堂は、弘法大師が33歳の厄年祈願のため大同元年（806）自ら彫刻された正観音菩薩像をウツ口船に納めて流したところ、見島宇津の浜に漂着した。漁民達が見つけた船から取り出し堂宇を建てて祀ったのが起源であるといわれている。

観音堂が中世初期の室町時代には建てられていたことは、奉納された応永13年（1406）銘の鰐口によってわかる。その後改築修理を

繰り返して現在の建物に至った。

観音堂の立地する宇津の地勢、堂周辺の諸工作物等を歴史や信仰とのかかわりで見るとき、寺の重みを十分に認めることが出来る。しかも、その信仰は島人の葬送儀礼を含めた年中行事のなかでも大きな比重を占めている。

また、当観音が死者鎮魂の霊場（仏石）を伴うこと、あるいは多数の鳥居が絶えることなく奉納され続けていることなどは、宗教民俗学上でも注目すべき事柄である。

しづきやま 指月山のミカドアゲハ

- 指定年月日/昭和37年1月11日
- 所有者/萩市
- 所在地/萩市大字堀内
- 指定面積/19.13ha



ミカドアゲハは^{りん し もく}鱗翅目、アゲハチョウ科、アオスジアゲハ属に属する昆虫で、アオスジアゲハに類似するものの、淡色窓状斑帯はアオスジアゲハより淡い青緑色で、中帯はより各斑が小さく、^{ぜん し}前翅ではアオスジアゲハにならない外帯と内帯がある。

ミカドアゲハは、もともと南方系の昆虫でインド・セイロン・中国大陆・台湾・マレー

半島・フィリピン等から日本にかけての広い範囲に分布し日本はその北限にあたるようである。

明治18年（1885）に鹿児島で初めて発見され、しだいに北上し現在は九州・四国・南紀まで分布域を広げている。萩は中国地方唯一の生息地で、昭和31年（1956）に指月山で採集され、生息が確認された。

だい しょう いん おお 大照院の大フジ

- 指定年月日/昭和37年 1 月11日
- 所有者/宗教法人 大照院
- 所在地/萩市大字椿
- 指定面積/990m²



大照院の大フジは自生したもので、シイ林中にはい上がった巨茎が10茎以上もあり、中には樹幹から離れ垂れ下がったものもある。そのうち1茎は根元付近での周囲が2.14mにもなり、高さは、そばのシイノキの樹冠に達することから約30mぐらいと推定される。

フジの天然記念物としては根株の大きいものもあるが、単茎としては山梨県富士吉田市の1.9m、静岡県豊田町の1.8mがあり、その他の県の天然記念物として推定されているものは1.5mから2.0mくらいが普通である。

これらと比較しても大照院のものは遜色がなく県下既知のものうち最大である。5月の開花時の眺めは、庭園と調和して美しい。

つば せ 椿瀬のツバキ

- 指定年月日/昭和55年 9 月12日
- 管理団体/萩 市
- 所在地/萩市川上



この椿は、花弁が一枚、一枚散るため、椿瀬地区では「散りツバキ」と呼ばれ、園芸用としては非常に珍しいものである。

指定時には樹齢約400年、目通り周囲約2mの大木があったが、平成11年7月の台風により倒木し、現在は新芽が育っている。

の と ろ 野戸呂のシラカシ

- 指定年月日/昭和55年 9 月12日
- 所有者/萩 市
- 所在地/萩市川上



このシラカシは、野戸呂地区の西涼山大師堂庭にある。指定時には樹齢約400年と推定され、川上地域内のカシでは一番古く大きいものである。樹の目通り周囲約5.2m、枝を三方に分け枝張りは、左右約20m、樹高約15mもある。

須佐の シダレアカマツ

- 指定年月日/昭和57年 2 月26日
- 所有者/個 人
- 萩市大字須佐 ● 員数/ 1 本



指定木は、石見益田家に仕えた永代大組の家柄で、慶長年間（1596～1615）から須佐に居住する大谷家の庭にある。樹高は約4m、幹周り45cmで、家人の証言から樹齢は100数十年と推定されている。

樹上から地面に枝垂れた姿は、シダレヤナギかシダレザクラを思わせるような樹形から、「さがり松」「たれ松」とも呼ばれる。

尊正寺の エドヒガン

- 指定年月日/昭和63年 3 月17日
- 所有者/宗教法人 尊正寺
- 所在地/萩市大字上小川



尊正寺の境内にあるエドヒガンは、目通り周囲4m、樹高は約10mで、主幹に空洞が見られるが、樹の勢いはよく樹形も整っており、毎年見事に開花している。推定樹齢は400年、山口県内に現存するエドヒガンでは、最大級のものである。

エドヒガン（バラ科）は本州・四国・九州の山地に生える野生のサクラで、古くから庭園や寺院に植えられている。

現在の尊正寺本堂は、平成6年春に再建されたが、再建前の本堂建立は、記録によると天正年間（1573～1591）で、エドヒガンが植えられた頃とほぼ同じ時期である。

たけ うじ はち まん ぐう しゃ そう
 武氏八幡宮社叢

- 指定年月日/昭和63年 3 月17日
- 所有者/宗教法人 武氏八幡宮
- 所在地/萩市大字上小川

武氏八幡宮の社殿を中心とした境内地^{けい だい ち}は、常緑広葉樹の老木巨樹が多く、自然の植生^{しよく せい}をよく保存している。

特に、社殿の裏にはスダジイ（ブナ科シイノキ属）の巨樹があり、根元から7本の枝にわかれ、その大きさは目通り周囲2.2m、2.3m、3.4m、0.9m、0.9m、0.4m、0.6mで、全体としての目通り周囲5.0m、根廻り周囲は8.0mに及んでいる。

このほかに、タブノキ（クスノキ科タブノキ属）、イチイガシ（ブナ科アカガシ亜属の常緑高木）、シラカシ（ブナ科アカガシ亜属の常緑高木）などの巨樹が林立している。

このお宮は、守護大名^{おお うち}大内氏の祈願所であり、また古くから地域の人々の信仰の中心として歴史の重みを今に伝えている。



み あけ 三明のイトザクラ

- 指定年月日/昭和63年 3 月17日
- 所有者/個 人
- 所在地/萩市大字上小川



三明のイトザクラは、萩市小川支所前の県道をはさんだ向かいにある。

目通り周囲2.8m、樹高は約11m、推定樹齢は400年で、指定時には県内に現存するイトザクラでは最大級であったが、平成18年6月の大雨により倒木し、現在は新芽が育っている。

みょう ごん じ 妙権寺のイブキ

- 指定年月日/昭和63年 3 月17日
- 所有者/宗教法人 妙権寺
- 所在地/萩市大字下小川



妙権寺のイブキは同寺の境内にあり、目通り周囲2.1m、樹高は約10m、推定樹齢は300年、樹形がよく整っていて境内の景観に趣を添えている。

文政7年（1824）の火災で本堂が焼失したとき、主幹の一部も焼けてしまい、今も炭跡^{あと}がみられるが、樹勢はきわめて旺盛^{おうせい}である。

島根県境に位置する同寺は、幕末における四境戦争の一つ、石州口^{せきしゅうぐち}の戦いの際、長州軍の屯所^{とんじょ}でもあった。この木は、こうした歴史を見つめてきた記念物といえる。

笠山^{かさ やま}虎ヶ崎^{とら が さき}タチバナ^{じ せい ほく げん ち}自生北限地 およびコウライタチバナ^{じ せい ち}自生地

- 指定年月日/平成 5 年 1 月 26 日
- 所有者/越ヶ浜自治会
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/852.60m²

タチバナは台湾以北に分布する暖地性植物で、本州日本海側では笠山を北限とし、太平洋側では伊豆半島を北限としている。長門市青海島に自生し、天然記念物として県指定を受けているが、長門市より萩市が北に位置しているため最北限といえる。笠山のタチバナは国指定天然記念物「笠山コウライタチバナ自生地」より西方500mの椿群生林の中で、コウライタチバナとともに1本自生している。根元の周囲60cmで樹齢は100年と推定される。

また、コウライタチバナは椿林中タチバナの周辺に点在する形で数本自生している。樹齢はいずれも60年と推定される。



かさ やま じ せい ほう げん ち
笠山ハマボウ自生北限地

- 指定年月日/平成 5 年 1 月 26 日 ● 所有者/個 人
- 所在地/萩市大字椿東 ● 指定面積/225m²



ハマボウは海辺地に生長するアオイ科の暖地性落葉灌木で、普通樹高 2 m 近くまで成長し、幹から多くの枝を出す。笠山のハマボウは樹高 3 m を越す老木で 5 株が自生している。根元の周囲はそれぞれ 100cm、90cm、85cm、58cm、55cm で、枝張りは湿地を覆うように伸びている。夏には枝頭に径 5 cm ばかりの黄花をつける。

わが国では屋久島、九州、四国から本州の

太平洋岸の神奈川県にいたるかなり広い範囲に分布しているが、日本海側では下関市吉母、室津、神田、長門市伊上、萩市笠山に自生がみられる。

笠山の西側海岸のアカメガシワ、エノキ、ハマビワ、マサキなどの木の茂った中に自生しているハマボウは日本海沿岸では自生北限地といえる。

し ぶき いっ ぽん 紫福の一本スギ

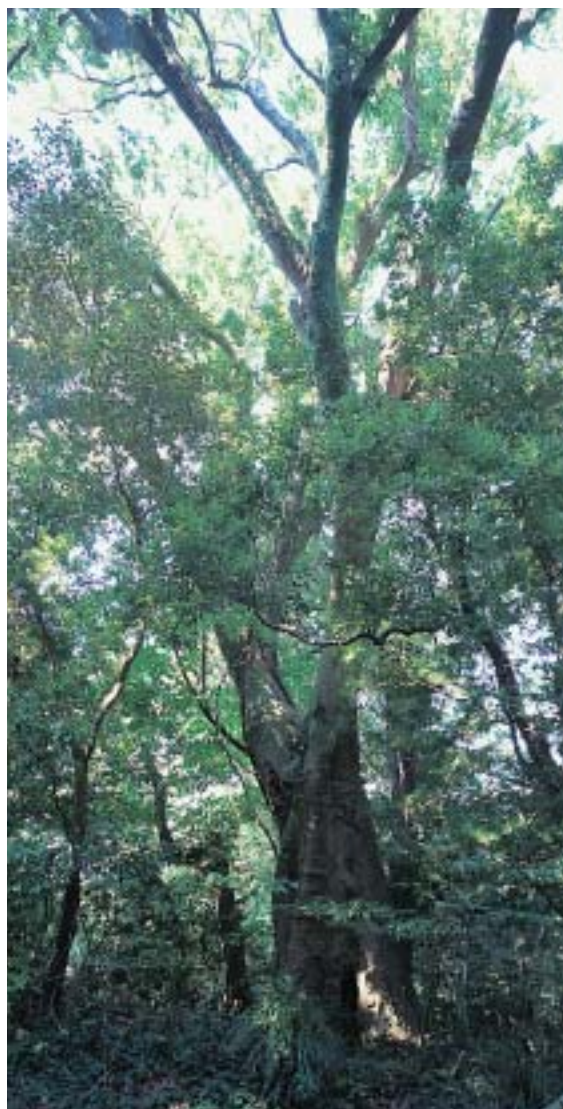
- 指定年月日/平成 6 年 3 月 14 日
- 所有者/宗教法人 信盛寺
- 所在地/萩市大字紫福 ● 員数/ 1 本



この杉は樹高36.0m、目通りの周囲6.5m、樹齢は推定で600年を超えている。表日本系統の実生杉と考えられ、まだ成長過程にあると思われる。

ひつ しま はち まん ぐう 櫃島八幡宮の リュウキュウエノキ

- 指定年月日/平成 7 年 2 月 1 日
- 所有者/宗教法人 櫃島八幡宮
- 所在地/萩市櫃島 ● 指定面積/1,236.36m²



リュウキュウエノキは、暖地性植物で、我が国では萩市見島が北限地であり、櫃島八幡宮の境内地に所在する指定木はこの北限上に位置すると言える。山口県では、稀少植物の部類に属する。

幹周は現在知られている同種の中で我が国最大にあたる6.2mあり、樹高も約23mと大きく、また、樹勢も旺盛であり、貴重なものである。

かさ やま

笠山のホソイノデ・カサヤマイノデ・ カタホソイノデ^{こん せい ち}混生地

- 指定年月日/平成7年2月1日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市大字椿東
- 指定面積/2,261m²



イノデは、オシダ科に属する常緑性のシダで、茶褐色の鱗片が密生する状況を「猪の手」に見立ててこの名がある。

指定地は、谷全体が笠山独特の風穴になっており、夏でも10度前後の冷気が吹き出している。この冷涼な環境により、谷の底部に寒地性植物であるホソイノデが自生している。ホソイノデは主に北海道や本州の亜寒帯林に見られ、中国地方では鳥取県大山に植生が認

められるのみである。

さらにホソイノデは、本来笠山に自生している暖地性のイノデの雑種として、カサヤマイノデ及びカタホソイノデを生じている。この2種は、笠山にのみ見られる稀少種である。これは、笠山の特殊な環境により生じたものであり、他の場所では起りえない極めて珍しい現象である。

見島日崎のタダムシオイガイ・ミシマヒメベッコウおよびその棲息地

- 指定年月日/平成13年12月21日
- 所有者/個人
- 所在地/萩市見島
- 指定面積/991m²



▲ タダムシオイガイ



▲ ミシマヒメベッコウ

指定種であるタダムシオイガイとミシマヒメベッコウは、昭和30年（1955）に見島在住の貝類研究家 多田武一氏によって発見された。見島以外では発見されていない稀少種である。タダムシオイガイは、ムシオイガイ科に属し、殻高2.8mm、殻径4.2mm。ミシマヒメベッコウは、ベッコウマイマイ科に属し、殻高3.5mm、殻径4.4mmである。光沢が強く、黄褐色をしている。

一般的に陸産貝は移動能力が低く、ごく限られた範囲で棲息しているため、離島など地理的に隔離された場所では固有種が分布していることがあり、これら2種の模式産地である日崎は、見島東部に位置する標高82.1mの半島で、その植生は島内唯一の原生状態となっている。

かさ やま とら が さき ぐん せい りん

笠山虎ヶ崎ヤブツバキ群生林

- 指定年月日/平成14年 8 月 1 日 ● 管理団体/萩 市
- 所在地/萩市大字椿東 ● 指定面積/77,189m²



ヤブツバキは、ツバキ科ツバキ属に属し、本州から琉球列島及び朝鮮半島の一部にのみ自生している。笠山は、藩政時代に藩直轄の公有林となり、伐採が制限されたため、極相の常緑広葉樹が生い茂る原生林状態であり、樹下にはヤブツバキが植生していた。明治以降、幾度ともなく伐採された結果、その度にヤブツバキの萌芽更新を繰り返したため、「株立ち」の状態になるとともに落下種子の発芽更新により、ますますその密度を高めたもの

である。

虎ヶ崎のヤブツバキは自生密度が10m²当たり1.3株強、1株当たり約3.7本であり、全国でも例のない高密度林で特異な樹形である。また、一般的なヤブツバキと南方系のツバキとの交配や度重なる萌芽更新の結果、笠山独自の特徴ある花卉や変わり葉ツバキを生み出すとともに最大株周囲2.4mに及ぶヤブツバキをはじめ、藩政時代からの古株が多数存在している。

佐々並のウラジロガシ

●指定年月日/平成16年10月22日 ●所有者/個人

●所在地/萩市大字佐々並



ウラジロガシは、宮城県、新潟県から済州島、台湾の山地に分布する常緑高木である。佐々並のウラジロガシは、目通り周囲6.2m、主幹は大きく三分岐し、枝張りは東西約26m、南北約20mの見事な楕円形に繁っており、この種では県内最大級である。

あい ば がわ あい ば がわ しゅう へん ち く 藍場川および藍場川周辺地区

- 選定年月日/昭和48年 1 月25日
- 所在地/萩市大字川島・江向 ● 選定面積/1.675ha



▲ 川島地区内

選定地域は川島の樋ノ口から江向あい だま ざ藍玉座跡を経て水車筋東側にいたる藍場川を中心にした総延長2,412m（川島地区の一部は藍場川の両岸から10m以内）である。この川は江戸時代中期に開削され、農業用水路のほか川上から薪炭などを運ぶのに用いられた。今も板囲いの洗場や川舟が通り易いように中央を高くした石橋など昔の面影をよく残している。

いま うお のたな ち く
今魚店地区

- 選定年月日/昭和48年 1 月25日
- 所在地/萩市大字今魚店町 ● 選定面積/9,782m²



▲熊谷家住宅南側（西ノ町筋）

選定地域は熊谷家住宅を中心にその周辺の土塀を含んだ一帯である。この地域は広大な敷地内に国指定重要文化財熊谷家住宅の主屋、離れ座敷、土蔵等が立ち並び、その周囲を取り囲んで、土塀がつらなっている。江戸後期の地方豪商の住宅や緑の木々が土蔵と調和し、歴史的雰囲気醸し出している。

だい しょう いん ぷ きん
大照院付近

- 選定年月日/昭和48年 1 月25日
- 所在地/萩市大字椿 ● 選定面積/40,862m²



選定地域は、大照院参道から境内・墓所を含めた一帯である。この地域は国指定重要文化財大照院や国指定史跡萩藩主毛利家墓所などがある。また、市指定天然記念物大フジが枝を四囲に張り巡らすなど、自然に溶け込み配置された社寺建築物が歴史の流れを感じさせる。

とう こう じ よし だ しょう いん たん じょう ち ふ きん
 東光寺および吉田松陰誕生地付近

- 選定年月日/昭和48年 1 月25日
- 所在地/萩市大字椿東 ● 選定面積/59,782m²



▲ 吉田松陰誕生地

選定地域は東光寺周辺と、通称団子岩と呼ばれる松陰誕生地の一帯である。この地域は国指定重要文化財東光寺をはじめ国指定史跡萩藩主毛利家墓所や市指定史跡吉田松陰墓所などが点在し、木々の緑の中で往時の姿をとどめており歴史的にも価値の高い地域である。

堀内地区

- 選定年月日/昭和48年 1 月25日
- 所在地/萩市大字堀内 ● 選定面積/14.7ha



▲ キリシタン墓地

選定地域は堀内疎水に架る指月橋から西ノ浜にかけての一带（萩城跡・二の丸地区を除く）及び疎水を南下し、常盤橋下流にいたる右岸10m以内である。この地域は国指定重要文化財旧厚狭毛利家萩屋敷長屋やキリシタン墓地などを含み、歴史的雰囲気醸し出している。

なん みょう じ けい だい さん どう 南明寺境内および参道

- 選定年月日/昭和55年 9 月11日
- 所在地/萩市大字椿 ● 選定面積/852.89m²



選定地域は南明寺境内及び参道を中心にした一帯である。南明寺は平安時代に創建された真言宗の修験寺で、のちに天台宗に改宗され毛利家祈願寺として栄えた。山腹の市指定文化財の観音堂や参道の入口付近の垂れ桜の大樹など見るべきものがあり、山の緑と観音堂前の白い土塀が調和している。

あい だま ざ あと ど べい
 藍玉座跡土堀

- 選定年月日/昭和56年3月10日
- 所在地/萩市大字江向 ●選定面積/631.8m²



選定地域は藍場川の下流、かつて藍玉座があった場所を中心に、その周囲の土堀（高さ2m、長さ北面で63m、西側41m）を含んだ一帯である。藍玉座は明和年間（1764～1771）藩によって開設された藍色の染料の元となる藍玉を製造したところで、内部には現在でも大きな井戸が残っている。

北側土堀の外には道路を隔てて藍場川が流れ水車筋に沿って北に曲がる所の川幅が広がっている。通航する川舟が方向転換するために設けられた舟まわしと呼ばれるものである。これ等藍玉座跡土堀と川の織りなす景観は歴史的雰囲気をよく残している。

萩市の文化財 五十音順索引

	名 称	区 分	所在地()は寄託先	地 域	頁
あ	藍玉座跡土塀	市選定	江向	萩	218
	藍場川および藍場川周辺地区	市選定	川島・江向	萩	212
	穴観音古墳	県指定	高佐下	むつみ	88
い	育英館門 附「育英館」扁額	市指定	須佐	須佐	120
	伊藤博文旧宅	国指定	椿東	萩	32
	伊藤博文旧宅地 附 伊藤博文別邸	市指定	椿東	萩	136
	今魚店地区	市選定	今魚店町	萩	213
う	宇津観音寺観音堂	市指定	見島	萩	138
	宇津観音寺鰐口	市指定	見島	萩	160
え	円光寺穴観音古墳	市指定	大井	萩	182
	円光寺古墳出土品	県指定	堀内	萩	77
	円政寺内金毘羅神社社殿	市指定	南古萩町	萩	110
	附 石鳥居・山門・石灯籠				
お	大板山たたら製鉄遺跡	県指定	紫福	福栄	89
	大井八幡宮文書	市指定	(堀内)	萩	164
	大江後神楽舞	市指定	上小川	田万川	126
	大下阿弥陀堂内厨子	市指定	佐々並	旭	116
	奥阿武幸判勘場跡	県指定	吉部上	むつみ	90
	奥平家長屋門	市指定	土原	萩	115
	小倉四賢墓所	市指定	椿	萩	164
	落合の石橋	国登録	佐々並	旭	59
	海上信仰資料黄帝神社社殿	市指定	須佐	須佐	120
	花月楼	県指定	椿東	萩	65
か	笠松神社石燈籠	市指定	須佐	須佐	113
	笠松神社鳥居	市指定	須佐	須佐	113
	笠山コウライタチバナ自生地	国指定	椿東	萩	45
	笠山虎ヶ崎タチバナ自生北限地	市指定	椿東	萩	205
	およびコウライタチバナ自生地				
	笠山虎ヶ崎ヤブツバキ群生林	市指定	椿東	萩	210
	笠山のホソイノデ・カサヤマイノデ	市指定	椿東	萩	208
	・カタホソイノデ混生地				
	笠山ハマボウ自生北限地	市指定	椿東	萩	206
	鹿背隧道	国登録	椿、明木ほか	萩・旭	58
	片俣八幡宮懸仏	市指定	(吉部上)	むつみ	158
	桂太郎旧宅	市指定	川島	萩	135
	上三原の田植ばやし	県指定	須佐	須佐	84

	名 称	区 分	所在地 ()は寄託先	地 域	頁
か	川上のユズおよびナンテン自生地	国指定	川上	川上	49
き	菊ヶ浜土塁(女台場)	市指定	今魚店町	萩	166
	菊屋家住宅	国指定	呉服町一丁目	萩	8
	木戸孝允旧宅	国指定	呉服町二丁目	萩	33
	吉部八幡宮のスギ	県指定	吉部上	むつみ	92
	旧厚狭毛利家萩屋敷長屋	国指定	堀内	萩	2
	旧久保田家住宅	市指定	呉服町一丁目	萩	122
	旧周布家長屋門	市指定	堀内	萩	97
	旧梨羽家書院	県指定	堀内	萩	64
	旧萩藩御船倉	国指定	東浜崎町ほか	萩	34
	旧萩藩校明倫館	国指定	江向	萩	30
	旧福原家書院	市指定	堀内	萩	100
	旧福原家萩屋敷門	県指定	堀内	萩	63
	旧湯川家屋敷	市指定	川島	萩	162
	玉泉寺毘沙門堂内厨子	市指定	川上	川上	118
く	口羽家住宅	国指定	堀内	萩	10
	熊谷家住宅	国指定	今魚店町	萩	12
け	元寇の碇石	市指定	大井	萩	165
	絹本着色吉川元春像	市指定	(須佐)	須佐	128
	絹本着色釈迦三尊像	県指定	(山口市)	市外	67
	絹本着色釈迦涅槃図	市指定	須佐	須佐	126
	絹本着色春夏秋冬山水図	国指定	呉服町一丁目	萩	19
	絹本着色束帯天神像	市指定	(須佐)	須佐	129
こ	河内の大ムク	県指定	椿	萩	91
	亨徳寺三門	市指定	北古萩町	萩	104
	小川家長屋門	市指定	土原	萩	101
	越ヶ浜「大綱声」	市指定	椿東	萩	174
	越ヶ浜「巫女の舞」	市指定	椿東	萩	173
	木間「神代の舞」	市指定	山田	萩	171
さ	西国三十三観音霊場絵馬(十番札所)	市指定	川上	川上	134
	西国三十三観音霊場絵馬 (四番札所、五番札所)	市指定	川上	川上	131
	西堂寺六角堂	県指定	江崎	田万川	66
	笹尾義民おどり	市指定	川上	川上	175
	佐々並のウラジロガシ	市指定	佐々並	旭	211
	讃岐坊梵鐘	市指定	見島	萩	149
	三祖師号	県指定	椿東	萩	73
	三見橋	国登録	三見	萩	57
	三見吉広のバクチノキ	県指定	三見	萩	93

	名 称	区 分	所在地 ()は寄託先	地 域	頁
し	指月山	国指定	堀内	萩	50
	志都岐山神社のミドリヨシノ	県指定	堀内	萩	94
	指月山のミカドアゲハ	市指定	堀内	萩	199
	実相寺天井絵	市指定	川上	川上	132
	石屏子介禅師墨蹟	県指定	(堀内)	萩	75
	紫福の一本スギ	市指定	紫福	福栄	207
	紙本着色足利義昭像	市指定	(須佐)	須佐	128
	紙本着色束帯天神像(宗竺筆)	市指定	(須佐)	須佐	129
	紙本墨画十六羅漢像	市指定	須佐	須佐	130
	紙本墨画出山釈迦図	市指定	須佐	須佐	124
	紙本墨画着色人物鶴龍図	市指定	須佐	須佐	127
	紙本墨書年徳の書	市指定	堀内	萩	161
	下横瀬公民館(旧明木村立図書館)	国登録	明木	旭	60
	下領神楽舞(神笑座)	市指定	高佐下	むつみ	127
	松下村塾	国指定	椿東	萩	27
	常念寺表門	国指定	下五間町	萩	1
す	須佐唐津古窯跡群	県指定	須佐	須佐	87
	須佐唐津焼青磁釉銅器写花瓶	市指定	須佐	須佐	154
	須佐唐津焼保持者 土谷一史	市指定	堀内	萩	168
	須佐高山の磁石石	国指定	須佐	須佐	48
	須佐地古墳	市指定	江崎	田万川	190
	須佐のシダレアカマツ	市指定	須佐	須佐	202
	須佐湾	国指定	須佐	須佐	43
せ	住吉神社「お船謡」	県指定	浜崎町	萩	83
	雪峯東山空和尚外集 石屏子介手沢本	国指定	(堀内)	萩	25
そ	尊正寺のエドヒガン	市指定	上小川	田万川	202
た	大蘊寺梵鐘	市指定	須佐	須佐	140
	大照院	国指定	椿	萩	14
	大照院の大フジ	市指定	椿	萩	200
	大照院付近	市選定	椿	萩	204
	武氏八幡宮懸仏	市指定	上小川	田万川	156
	武氏八幡宮社叢	市指定	上小川	田万川	208
	武氏八幡宮神輿	市指定	上小川	田万川	157
	立木薬師如来像	市指定	福井下	福栄	140
	太刀 銘長州住人藤原□重・	市指定	須佐	須佐	151
	寛永二十一甲申八月□日				
	太刀 銘延吉 附 絲巻太刀拵	国指定	(堀内)	萩	23
	太刀 銘光房	国指定	(堀内)	萩	24
	弘安三年十月 日 附 革包太刀拵				

	名 称	区 分	所在地()は寄託先	地 域	頁
た	たま え 浦 「てん ぐ びょう し」 玉江浦「天狗拍子」	市指定	山田	萩	172
	た ま がわ ちゅうじょうせつ り すいちゅう し は さい よう がん 田万川の柱状節理と水中自破碎溶岩	県指定	上小川	田万川	95
	たま き ぶん の しんきゅう なく 玉木文之進旧宅	市指定	椿東	萩	181
ち	ちようしゅう あ ぶ ごおり え づ うら りやく ず 長州安武郡江津浦畧圖	市指定	江崎	田万川	125
	ちようじゆ し じゅう さん じゅうのとう 長寿寺十三重塔	県指定	北古萩町	萩	62
	ちようもんきよう 長門峽	国指定	川上ほか	川上	42
つ	つか あな こ ぶん 塚穴古墳	市指定	下小川	田万川	181
	つか あな こ ぶんしゆつ どの ひん 塚穴古墳出土品	市指定	江崎	田万川	166
	つじ やま 辻山のシダレザクラ	県指定	高佐上	むつみ	96
	つば せ 椿瀬のツバキ	市指定	川上	川上	201
と	と い た ま す だ し きゅう なく ど べい 問田益田氏旧宅土塀	市指定	堀内	萩	99
	とう こう じ 東光寺	国指定	椿東	萩	3
	とう こう じ よし だ し しょう いん たん じ しょう ち ふ きん 東光寺および吉田松陰誕生地付近	市選定	椿東	萩	215
	と お ち に か ぐ ら まい 遠谷神楽舞	市指定	川上	川上	125
	とも の ぶ か ぐ ら まい 友信神楽舞	県指定	中小川	田万川	85
な	なか し ま よ し まろ さく たけ かご 中嶋善麿作 竹籠	市指定	上田万	田万川	159
	なが ぞえ やま こ ぶん 長添山古墳	市指定	椿東	萩	184
	なか の はら まと 中ノ原的まつり	市指定	川上	川上	126
	なんみょう じ かん のん だう 南明寺観音堂	市指定	椿	萩	187
	なんみょう じ げい だい さん だう 南明寺境内および参道	市選定	椿	萩	207
の	の だ はしらまつ 野田の柱松	市指定	吉部下	むつみ	178
	の と ろ 野戸呂のシラカシ	市指定	川上	川上	201
	の やま ごく いわ ぐら ごく あと 野山獄・岩倉獄跡	市指定	今古萩町	萩	187
は	はい がく じ どうし しょう 梅岳寺銅鐘	市指定	川上	川上	155
	はぎ えき しや 萩駅舎	国登録	椿	萩	54
	はぎ ちやう かん 萩住還	国指定	椿、明木ほか	萩・旭	41
	はぎ がく こ しょう しょう いん しつ 萩学校教員室	県指定	堀内	萩	61
	はぎ し はま きき 萩市浜崎	国選定	浜崎町ほか	萩	53
	はぎ し へい ちやう ちく 萩市平安古地区	国選定	平安古町	萩	51
	はぎ し ぼり うち ちく 萩市堀内地区	国選定	堀内	萩	52
	はぎ じ しょう ちく 萩城跡	国指定	堀内ほか	萩	35
	はぎ じ しょう か まち わり げん び しょう せき 萩城下街割原標石	市指定	江向	萩	179
	はぎ じ しょう じ しょう か まち 萩城城下町	国指定	呉服町一丁目ほか	萩	36
	はぎ はん しやう 萩反射炉	国指定	椿東	萩	29
	はぎ はん しや ちやう り け ぼ しや 萩藩主毛利家墓所	国指定	堀内ほか	萩	37
	はぎ やき こ しょう せき ぐん 萩焼古窯跡群	県指定	椿東	萩	86
	はぎ やき ぼ じ しや 萩焼保持者 岡田 裕	県指定	椿東	萩	81
	はぎ やき ぼ じ しや の さか こう き 萩焼保持者 野坂康起	県指定	山田	萩	79
	はぎ やき ぼ じ しや は だ の ぜん ぞう 萩焼保持者 波多野善蔵	県指定	堀内	萩	80

	名 称	区 分	所在地 ()は寄託先	地 域	頁
は	萩焼保持者 三輪節夫 (壽雪) 第 11 代三輪休雪	国指定	椿東	萩	26
	端坊鐘楼	市指定	恵美須町	萩	109
	端坊梵鐘	市指定	恵美須町	萩	152
	花江茶亭	市指定	堀内	萩	108
ひ	櫃島八幡宮のリュウキュウエノキ	市指定	櫃島	萩	207
ふ	佛光寺楼門	市指定	紫福	福栄	121
	不動明王立像	市指定	椿	萩	153
	古川久輝 書	市指定	下田万	田万川	162
へ	平安橋	市指定	堀内、平安古町	萩	98
ほ	宝泉寺船絵馬群	県指定	(堀内)	萩	82
	発昌寺襖絵 附 高島北海書状一通	市指定	(堀内)	萩	133
	堀内地区	市選定	堀内	萩	216
	本町中祇園車	市指定	須佐	須佐	169
ま	益田家墓所	市指定	須佐	須佐	169
	益田家歴代領主肖像画群 附 紙本墨書益田就恒賛一幅	市指定	須佐	須佐	167
	益田館	市指定	須佐	須佐	119
	松崎八幡宮石燈籠	市指定	須佐	須佐	112
	松原祇園車	市指定	須佐	須佐	169
み	三明のイトザクラ	市指定	上小川	田万川	204
	見島ウシ産地	国指定	見島	萩	46
	見島ジーコンボ古墳群	国指定	見島	萩	40
	見島ジーコンボ古墳群出土品	県指定	堀内	萩	76
	見島のカメ生息地	国指定	見島	萩	47
	見島八幡宮鰐口	市指定	見島	萩	150
	見島日崎のタダムシオイガイ・ ミシマヒメベッコウおよびその棲息地	市指定	見島	萩	209
	妙権寺のイブキ	市指定	下小川	田万川	204
	明神池	国指定	椿東	萩	44
む	むつみ村役場旧庁舎	国登録	吉部上	むつみ	56
	むつみ村役場土蔵	国登録	吉部上	むつみ	56
	村田清風別宅跡	市指定	平安古町	萩	160
め	明倫館遺構 観徳門	市指定	江向	萩	104
	明倫館遺構 聖賢堂	市指定	江向	萩	108
	明倫館遺構 聖廟	市指定	北古萩町	萩	105
	明倫館遺構 南門	市指定	江向	萩	106
	明倫館遺構 万歳橋	市指定	堀内	萩	107
	明倫小学校本館	国登録	江向	萩	55

	名 称	区 分	所在地()は寄託先	地 域	頁
も	毛利氏日明貿易関係資料	県指定	土原	萩	78
	木額・柱聯・榜牌・同下書	県指定	椿東	萩	74
	木造赤童子立像	国指定	椿	萩	20
	木造阿弥陀如来立像	市指定	福井下	福栄	140
	木造阿弥陀如来立像	市指定	(堀内)	萩	147
	木造延命地藏菩薩立像	市指定	福井上	福栄	141
	木造義翁和尚倚像	県指定	椿	萩	72
	木造弘法大師立像	市指定	(堀内)	萩	141
	木造金剛力士像	市指定	紫福	福栄	142
	木造釈迦如来坐像	県指定	椿	萩	68
	木造釋迦如来坐像	市指定	中小川	田万川	139
	木造釈迦如来立像	市指定	(堀内)	萩	143
	木造聖観世音菩薩立像	市指定	福井下	福栄	146
	木造聖観音立像	国指定	椿	萩	21
	木造隨身倚像	市指定	須佐	須佐	136
	木造千手観音立像	国指定	椿	萩	22
	木造二天立像	市指定	佐々並	旭	137
	木造如意輪観世音菩薩坐像	市指定	福井下	福栄	144
	木造毘沙門天立像	県指定	川上	川上	69
	木造毘沙門天立像脇立吉祥天女像	市指定	川上	川上	138
	木造毘沙門天立像脇立善日童子像	市指定	川上	川上	138
	木造不動明王立像	県指定	北古萩町	萩	70
	木造不動明王立像	市指定	福井上	福栄	143
	木造扁額「實相山」	市指定	紫福	福栄	145
	木造文殊菩薩騎獅像	県指定	紫福	福栄	71
	木造薬師如来坐像	市指定	椿東	萩	135
	森田家住宅	国指定	黒川	福栄	7
や	八橋検校の碑	市指定	椿東	萩	163
	山本又兵衛法号記	市指定	川上	川上	163
よ	吉田松陰誕生地	市指定	椿東	萩	167
	吉田松陰の墓ならびに墓所	市指定	椿東	萩	165
	吉田松陰幽囚ノ旧宅	国指定	椿東	萩	28
	吉見正頼息女の墓	市指定	高佐下	むつみ	168
り	龍蔵寺観音堂	市指定	椿東	萩	102

文化財マップ1



田万川地域

【県指定有形文化財】

❖ (建造物) 西堂寺六角堂

【県指定無形民俗文化財】

❖ 友信神楽舞

【県指定天然記念物】

❖ 田万川の柱状節理と水中自破碎溶岩

【市指定有形文化財】

125 (絵画) 長州安武郡江津浦畧圖

130 (彫刻) 木造 釋迦如来坐像

150 (工芸品) 武氏八幡宮懸仏

157 (工芸品) 武氏八幡宮神輿

159 (工芸品) 中嶋善麿作 竹籠

162 (書跡) 古川久輝 書

166 (考古資料) 塚穴古墳出土品

【市指定無形民俗文化財】

178 -2 大江後神楽舞

【市指定史跡】

180 須佐地古墳

181 塚穴古墳

【市指定天然記念物】

202 -2 尊正寺のエドヒガン

203 武氏八幡宮社叢

204 -1 三明のイトザクラ

204 -2 妙権寺のイブキ

須佐地域

【国指定名勝及び天然記念物】

❖ 須佐湾

【国指定天然記念物】

❖ 須佐高山の磁石石

【県指定無形民俗文化財】

❖ 上三原の田植ばやし

【県指定史跡】

❖ 須佐唐津古窯跡群

【市指定有形文化財】

112 (建造物) 松崎八幡宮石燈籠

113 -1 (建造物) 笠松神社石燈籠

113 -2 (建造物) 笠松神社鳥居

119 (建造物) 益田館

120 (建造物) 育英館門 附「育英館」扁額

124 (絵画) 紙本墨画出山釈迦図

126 (絵画) 絹本着色釈迦涅槃図

127 (絵画) 紙本墨画着色人物鶴龍図

128 -1 (絵画) 紙本着色足利義昭像

128 -2 (絵画) 絹本着色吉川元春像

129 -1 (絵画) 紙本着色束帯天神像(崇竺筆)

129 -2 (絵画) 絹本着色束帯天神像

130 (絵画) 紙本墨画十六羅漢像

136 (彫刻) 木造 隨身倚像

140 (工芸品) 大蘊寺梵鐘

151 (工芸品) 太刀 銘長州住人

藤原□重・寛永二十一甲申八月□日

154 (工芸品) 須佐唐津焼青磁釉銅器写花瓶

167 (歴史資料) 益田家歴代領主肖像画群

【市指定有形民俗文化財】

169 -1 松原祇園車

169 -2 本町中祇園車

170 海上信仰資料黄帝社社殿

【市指定史跡】

189 益田家墓所

【市指定天然記念物】

202 -1 須佐のシダレアカマツ

むつみ地域

【国登録有形文化財】

❖ -1 むつみ村役場旧庁舎

❖ -2 むつみ村役場土蔵

【県指定史跡】

❖ 穴観音古墳

❖ 奥阿武宰判勘場跡

【県指定天然記念物】

❖ 吉部八幡宮のスギ

❖ 辻山のシダレザクラ

【市指定有形文化財】

158 (工芸品) 片俣八幡宮懸仏

【市指定無形民俗文化財】

177 下領神楽舞(神笑座)

178 野田の柱松

【市指定史跡】

188 吉見正頼息女の墓

福栄地域

【国指定重要文化財】

❖ (建造物) 森田家住宅

【県指定有形文化財】

❖ (彫刻) 木造文殊菩薩騎獅像

【県指定史跡】

❖ 大板山たたら製鉄遺跡

【市指定有形文化財】

121 (建造物) 佛光寺楼門

129 -1 (彫刻) 立木薬師如来像

129 -2 (彫刻) 木造阿弥陀如来立像

131 -1 (彫刻) 木造延命地藏菩薩立像

132 (彫刻) 木造金剛力士像

133 -2 (彫刻) 木造不動明王立像

134 (彫刻) 木造如意輪観世音菩薩坐像

135 (彫刻) 木造扁額「實相山」

136 (彫刻) 木造聖観世音菩薩立像

【市指定天然記念物】

207 -1 紫福の一本スギ

川上地域

【国指定名勝】

❖ 長門峡

【国指定天然記念物】

❖ 川上のユズおよびナンテン自生地

【県指定有形文化財】

❖ (彫刻) 木造毘沙門天立像

【市指定有形文化財】

118 (建造物) 玉泉寺毘沙門堂内厨子

131 (絵画) 西国三十三観音霊場絵馬
(四番札所、五番札所)

132 (絵画) 実相寺天井絵

134 (絵画) 西国三十三観音霊場絵馬
(十番札所)

138 -1 (彫刻) 木造毘沙門天立像脇立
吉祥天女像

138 -2 (彫刻) 木造毘沙門天立像脇立
善日童子像

155 (工芸品) 梅岳寺銅鐘

160 (書跡) 山本又兵衛法号記

【市指定無形民俗文化財】

175 -1 笹尾義民おどり

175 -2 遠谷神楽舞

176 -1 中ノ原的まつり

【市指定天然記念物】

201 -1 椿瀬のツバキ

201 -2 野戸呂のシラカシ

旭地域

【国指定史跡】

❖ 萩往還

【国登録有形文化財】

❖ 鹿背隧道

❖ 落合の石橋

❖ 下横瀬公民館(旧明木村立図書館)

【市指定有形文化財】

186 (建造物) 天下阿弥陀堂内厨子

187 (彫刻) 木造二天立像

【市指定天然記念物】

201 佐々並のウラジロガシ

萩地域

【国指定重要文化財】

❖ (工芸品) 太刀 銘延吉

❖ (工芸品) 太刀 銘光房

❖ (書跡) 雪峯東山空和尚外集

【国指定史跡】

❖ 見島ジーコンボ古墳群

❖ 萩往還

【国指定天然記念物】

❖ 見島ウシ産地

❖ 見島のカメ生息地

【国登録有形文化財】

❖ 三見橋

❖ 鹿背隧道

【県指定有形民俗文化財】

❖ 宝泉寺船絵馬群

【県指定天然記念物】

❖ 河内の大ムク

❖ 三見吉広のバクチノキ

【市指定有形文化財】

133 (絵画) 発昌寺襖絵

附 高島北海書状一通

131 -2 (彫刻) 木造弘法大師立像

133 -1 (彫刻) 木造釈迦如来立像

137 (彫刻) 木造阿弥陀如来立像

139 (工芸品) 讃岐坊梵鐘

150 (工芸品) 見島八幡宮鰐口

160 (工芸品) 宇津観音寺鰐口

161 (書跡) 紙本墨書年徳の書

164 (古文書) 大井八幡宮文書

165 (考古資料) 元寇の碇石

【市指定無形文化財】

168 須佐唐津焼保持者 土谷一史

【市指定無形民俗文化財】

171 木間「神代の舞」

【市指定史跡】

182 円光寺穴観音古墳

189 宇津観音寺観音堂

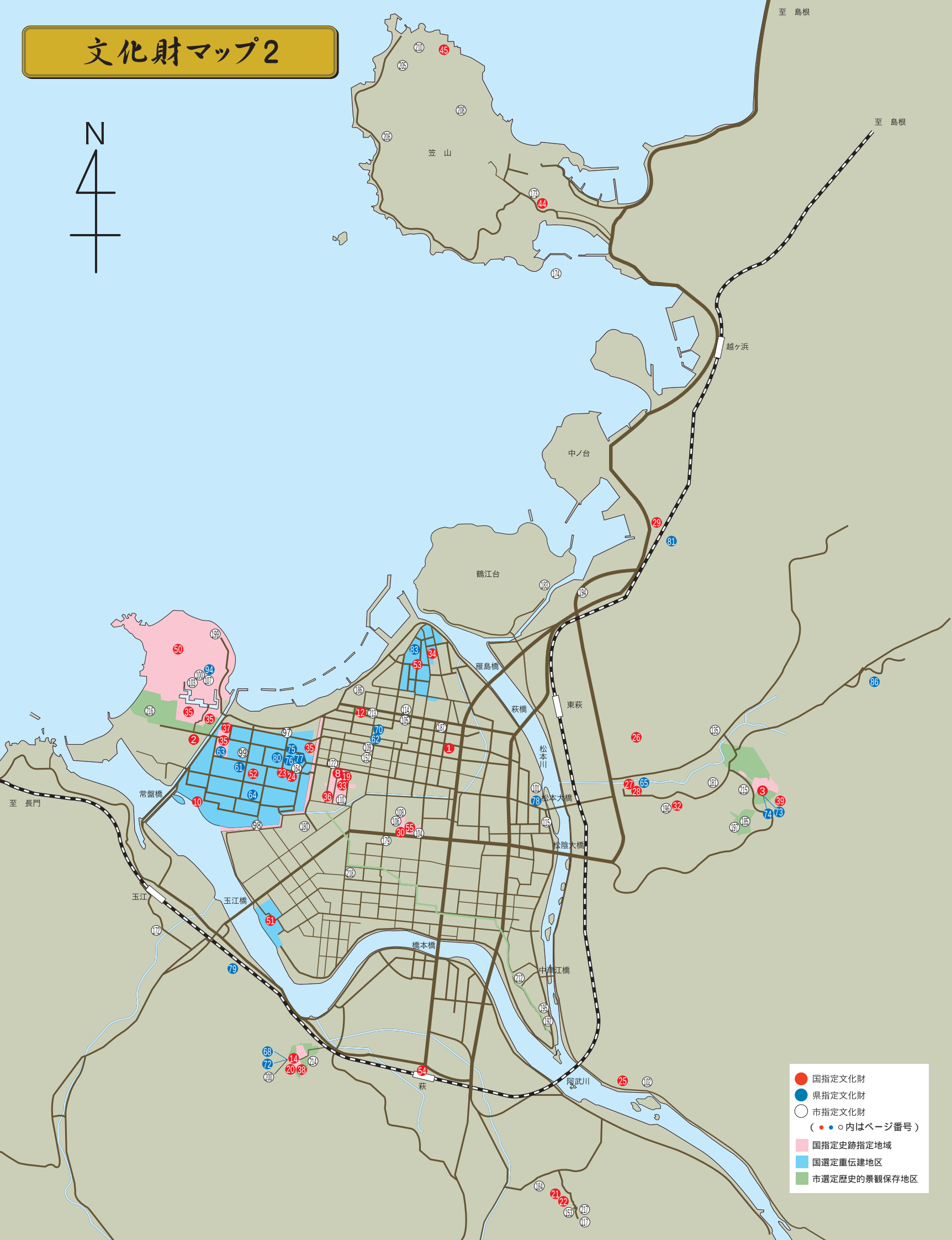
【市指定天然記念物】

207 -2 櫃島八幡宮のリュウキュウエノキ

209 見島日崎のタダムシオイガイ・

ミシマヒメベッコウおよびその棲息地

文化財マップ2



国指定文化財

【重要文化財】

- ❦ (建造物) 常念寺表門
- ❦ (建造物) 旧厚狭毛利家萩屋敷長屋
- ❦ (建造物) 東光寺
- ❦ (建造物) 菊屋家住宅
- ❦ (建造物) 口羽家住宅
- ❦ (建造物) 熊谷家住宅
- ❦ (建造物) 大照院
- ❦ (絵画) 絹本著色春冬山水図
- ❦ (彫刻) 木造赤童子立像
- ❦ (彫刻) 木造聖観音立像
- ❦ (彫刻) 木造千手観音立像

【重要無形文化財】

- ❦ (工芸技術) 萩焼保持者 三輪節夫

【史跡】

- ❦ 松下村塾
- ❦ 吉田松陰幽囚ノ旧宅
- ❦ 萩反射炉
- ❦ 旧萩藩校明倫館
- ❦ 伊藤博文旧宅
- ❦ 木戸孝允旧宅
- ❦ 旧萩藩御船倉
- ❦ 萩城跡
- ❦ 萩城城下町
- ❦❦❦ 萩藩主毛利家墓所
- ❦ 天樹院
- ❦ 大照院
- ❦ 東光寺

【天然記念物】

- ❦ 明神池
- ❦ 笠山コウライタチバナ自生地
- ❦ 指月山

【重要伝統的建造物群保存地区】

- ❦ 萩市平安古地区
- ❦ 萩市堀内地区
- ❦ 萩市浜崎

【登録有形文化財】

- ❦ 萩駅舎
- ❦ 明倫小学校本館

県指定文化財

【有形文化財】

- ❦ (建造物) 萩学校教員室
- ❦ (建造物) 長寿寺十三重塔
- ❦ (建造物) 旧福原家萩屋敷門
- ❦ (建造物) 旧梨羽家書院
- ❦ (建造物) 花月楼
- ❦ (彫刻) 木造釈迦如来坐像
- ❦ (彫刻) 木造不動明王立像
- ❦ (彫刻) 木造義翁和尚倚像
- ❦ (書跡) 三祖師号
- ❦ (書跡) 木額・柱聯・榜牌・同下書
- ❦ (書跡) 石屏子介禅師墨蹟
- ❦ (考古資料) 見島ジーコンボ古墳群出土品
- ❦ (考古資料) 円光寺古墳出土品
- ❦ (歴史資料) 毛利氏日明貿易関係資料

【無形文化財】

- ❦ (工芸技術) 萩焼保持者 野坂康起
- ❦ (工芸技術) 萩焼保持者 波多野善蔵
- ❦ (工芸技術) 萩焼保持者 岡田 裕

【無形民俗文化財】

- ❦ 住吉神社「お船謡」

【史跡】

- ❦ 萩焼古窯跡群

【天然記念物】

- ❦ 志都岐山神社のミドリヨシノ

市指定文化財

【有形文化財】

- 97 (建造物) 旧周布家長屋門
- 98 (建造物) 平安橋
- 99 (建造物) 問田益田氏旧宅土塀
- 100 (建造物) 旧福原家書院
- 101 (建造物) 小川家長屋門
- 102 (建造物) 龍蔵寺観音堂
- 103 (建造物) 花江茶亭
- 104 (建造物) 明倫館遺構 観徳門
- 105 (建造物) 明倫館遺構 聖廟
- 106 (建造物) 明倫館遺構 南門
- 107 (建造物) 明倫館遺構 万歳橋
- 108 (建造物) 明倫館遺構 聖賢堂

- 109 (建造物) 端坊鐘楼
- 110 (建造物) 円政寺内金毘羅社社殿
- 114 (建造物) 亨徳寺三門
- 115 (建造物) 奥平家長屋門
- 117 (建造物) 南明寺観音堂
- 122 (建造物) 旧久保田家住宅
- 135 (彫刻) 木造薬師如来坐像
- 152 (工芸品) 端坊梵鐘
- 153 (工芸品) 不動明王立像

【無形民俗文化財】

- 127 玉江浦「天狗拍子」
- 128 越ヶ浜「巫女の舞」
- 129 越ヶ浜「大綱声」

【史跡】

- 129 萩城下街割原標石
- 180 村田清風別宅跡
- 181 玉木文之進旧宅
- 183 八橋検校の碑
- 184 小倉四賢墓所
- 185 吉田松陰の墓ならびに墓所
- 186 菊ヶ浜土塁(女台場)
- 187 野山獄・岩倉獄跡
- 192 旧湯川家屋敷
- 194 長添山古墳
- 195 桂太郎旧宅
- 196 伊藤博文旧宅地 附 伊藤博文別邸
- 197 吉田松陰誕生地

【天然記念物】

- 199 指月山のミカドアゲハ
- 200 大照院の大フジ
- 205 笠山虎ヶ崎タチバナ自生北限地 およびコウライタチバナ自生地
- 206 笠山ハマボウ自生北限地
- 208 笠山のホソイノデ・カサヤマイノデ・カタホソイノデ混生地
- 210 笠山虎ヶ崎ヤブツバキ群生林

【歴史的景観保存地区】

- 212 藍場川および藍場川周辺地区
- 213 今魚店地区
- 214 大照院付近
- 215 東光寺および吉田松陰誕生地付近
- 216 堀内地区
- 217 南明寺境内および参道
- 218 藍玉座跡土塀

所在地別文化財件数一覧			地 域 区 分							計	
			萩	川上	田万川	むつみ	須佐	旭	福栄		市外
国	重要文化財	建造物	7						1		8
		絵画	1								1
		彫刻	3								3
		工芸品	2								2
		書跡	1								1
		典籍									0
		古文書									0
		考古資料									0
		歴史資料									0
	重要無形文化財	芸能									0
		工芸	1								1
	重要民俗文化財	有形									0
	無形									0	
記念物	史跡 1	11.5					0.5			12	
	名勝		1							1	
	名勝及び天然記念物					1				1	
	天然記念物	5	1			1				7	
記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財として選択されたもの 2		1								1	
重要伝統的建造物群保存地区		3								3	
登録有形文化財 3		3.5			2		2.5			8	
計		39	2	0	2	2	3	1	0	49	
県	有形文化財	建造物	5		1						6
		絵画								1	1
		彫刻	3	1					1		5
		工芸品									0
		書跡	3								3
		典籍									0
		古文書									0
		考古資料	2								2
		歴史資料	1								1
	無形文化財	芸能									0
		工芸	1								1
	民俗文化財	有形	1								1
	無形	1		1		1				3	
記念物	史跡	1			2	1		1		5	
	名勝									0	
	天然記念物	3		1	2					6	
計		21	1	3	4	2	0	2	1	34	
市	有形文化財	建造物	18	1			5	1	1		26
		絵画	1	3	1		8				13
		彫刻	4	2	1		1	1	8		17
		工芸品	5	1	3	1	3				13
		書跡	1	1	1						3
		典籍									0
		古文書	1								1
		考古資料	1		1						2
		歴史資料					1				1
	無形文化財	芸能									0
		工芸	1								1
	民俗文化財	有形					3				3
	無形	4	3	1	2					10	
記念物	史跡	15		2	1	1				19	
	名勝									0	
	天然記念物	8	2	4		1	1	1		17	
歴史的景観保存地区		7								7	
計		66	13	14	4	23	3	10	0	133	
合 計		126	16	17	10	27	6	13	1	216	

1 萩往還は萩・旭地域に跨るため、各地域で0.5ずつカウントした。

2 萩焼 三輪邦廣(休和) 昭和32年3月30日選択

3 鹿背隧道は萩・旭地域に跨るため、各地域で0.5ずつカウントした。

表紙説明

めいしょう はげ ちょうもん きょう の す よし だ はつ さぶ ろう ひつ
名勝萩と長門峡之図 吉田初三郎筆
(萩博物館蔵)

昭和7年(1932)に萩市の市制施行を記念して、鳥瞰図の第一人者で「大正の広重」といわれた吉田初三郎に依頼して描かれた、萩市とその周辺の鳥瞰図。縦約2m、横約4mの6曲1隻の屏風。初三郎は、全国各地の鳥瞰図を描いているが、そのほとんどが携帯用に印刷されたもので、肉筆で描かれたこれほどの大作はあまり残っていない。

萩の三角州を中央に、その左右には笠山と指月山を配し、上部には長門峡の景観を描いている。また、左右の遠景には北海道、富士山、東京までも描き込み、日本海上空から萩を中心に見渡した大パノラマ図が展開されている。町並みや神社仏閣・史跡、さらには汽車・自動車・船なども克明に描かれており、昭和初期の萩を探し出し発見する楽しみを秘めている。

萩市の文化財

2008年3月発行

発行者・編集 萩市建設部文化財保護課
写 真 萩地域：下瀬信雄
萩地域以外：萩市ほか
印 刷 (有)松陰堂印刷所